徒を領じて、山塢の間に入るに、廟有り甚だ靈なり、殿中に唯だ一の竈を安す。遠近祭祀して輟まず、物の命を烹殺したること甚だ多し。師、廟中に入り、拄杖を以て竈を敲つこと三下して云く、「咄、汝本塼土合成す、靈何れよりか來り、聖何れよりか起つて、恁麼に物の命を烹殺す」と云つて、又乃ち擊つこと三下。竈乃ち自ら傾破墮落す。須臾にして一人有つて、青衣峨冠、忽然として師の前に立つて拜を設けて曰く、「我は乃ち竈神なり、久しく業報を受く、今日師の無生の法を說くことを蒙つて、已に此の處を脫して、生じて天中に在り、特に來つて謝を致す。」師曰く、「汝が本有の性なり、吾が强ひて言ふに非ず。」神再び拜して沒す。侍者曰く、「某甲等、久しく和尙に參侍すれども、未だ指示を蒙らず、竈神何の徑旨を得てか、便乃ち天に生ず。」師曰く、「我れ只だ伊れに向つて道ふ、『汝本塼土合成す、靈何れよりか來り、聖何れよりか起る』と。」侍僧俱に對無し。師曰く、「會す麼。」僧云く、「不會。」師云く、「禮拜著せよ。」僧禮拜す。師云く、「破也破也、墮也墮也。」侍者忽然として大悟す。後に僧有り、㋮安國師に擧似す、師默じて云く、「此の子物我一如なることを會し盡す」と。竈神此を悟ることは則ち故に是。其の僧乃ち五蘊の成身、亦破也墮也と云へば、二り俱に開悟す。且く㋯四大五蘊と塼瓦泥土と、是れ同か是れ別か、既に是れ此の如し。雪竇什麼と爲てか道ふ、「杖子忽ち擊著す。方に知んぬ我れに辜負することを。」甚に因つてか卻つて箇の辜負と成り去る、只だ是れ未だ拄杖子を得ざること在り。且く道へ、雪竇木佛火を渡らざることを頌す、什麼と爲てか卻つて破竈墮の公案を引く。老僧直截に儞が與に說く、他の意只だ是れ得失情塵意想を絕して、淨躶躶地にして、自然に他の親切の處を見ん。

㋮破竈墮和尙は、嵩山安國師の法嗣、傳燈第四、會元第二に傳あり、傳燈傾瓶墮落の下の註に云く、「安國師驗して破竈墮と爲す。」

㋮安國師は、五祖大滿禪師旁出の法嗣、傳燈第四、會元第二に傳あり。

㋯四大は地水火風、五蘊は色受想行識。

第九十七則

垂示に云く、一を拈じて二を放つ、未だ是れ作家ならず。一を擧げて三を明らむ、猶ほ宗旨に乖く。直に天地陡變し、四方絕唱し、雷奔り雷馳せ、雲行き雨驟き、傾湫倒嶽、甕瀉ぎ盆傾くことを得るも、未だ一半を提得せざることあり。還つて天關を轉ずることを解し、能く地軸を移す底ありや。試みに擧す看よ。

【本則】擧す、金剛經に云く、「若し人の爲に輕賤せられんに、(一線道を放つ。又且つ何ぞ妨げん。)是の人先世の罪業あつて、(驢駝馬載。)應に惡道に墮すべきに、(陷墮し了れり。)今世の人に輕賤せらるゝを以ての故に、(本を酬いて末に及ばず、只だ忍受することを得たり。)先世の罪業、(什麼の處に向つてか摸索せん。穀を種ゑて豆苗を生ぜず。)則ち爲に消滅す」と。(雪上に霜を加ふ又一重、湯の氷を消すが如し。)

【本則】東巖禪師云く、九十七則、便ち金剛經の大事なり。先師會て道ふ、「一代藏經多き中に、大般若を攝び、般若多き中に特に此の經を攝び、此の經多句有る中に、此の語句を攝ぶ、此の經此の頌、最も子細に參

【評唱】　金剛經に云く、「若し人の爲に輕賤せられんに、是の人先世の罪業あつて、應に惡道に墮すべきに、今世の人に輕賤せらるゝを以ての故に、先世の罪業、則ち爲に消滅す」と。只だ平常の講究に據らば、乃ち經中に常に論ず。雪竇拈じ來つて這の意を頌して、敎家鬼窟裏の活計を打破せんと欲す。昭明太子此の一分を科して、能淨業障と爲す。敎中の大意、此の經の靈驗を說く。此の如きの人、先世の地獄の業を造る、善力强きが爲に未だ受けず。今世の人に輕賤せらるゝを以ての故に、先世の罪業、則ち爲に消滅す。此の經故に能く無量劫來の罪業を消して、重を轉じて輕と成し、輕を轉じて受けざらしめ、復た佛果菩提を得せしむ。敎家に據らば此の二十餘張の經を轉ずるを、便ち喚んで持經と作す。什麼の交涉か有らん。有る底は道ふ、「經に自ら靈驗有り。」若し恁麼ならば、儞試みに一卷を將て、閑處に放在して看よ、他感應有りや也た無や。法眼云く、「❶佛地を證する者を、此の經を持すと名く。」經中に云く、「一切の諸佛及び諸佛阿耨多羅三藐三菩提の法は、皆此の經より出づ」と。且く道へ、什麼を喚んでか此の經と作さん。是れ黃卷赤軸底是なること莫し麼。且く錯つて定盤星を認むること莫

詳す可きのみ、然らずんば看經の眼を具せず、向上の事全く失す。」予、乙丑の比、碧巖錄に於て、則頌俱に到り、一點の疑無し、只だ此の頌のみ有りて徹せざる處有り、先師に請益す、師拈一反して吟弄嘯嘆して曰く、「好頌好則」、予此に於て不安、籠に在ること多日、後二歲許りを經て徹處を得ること許多、一偈以て予が志を遂ぶ。

金剛般若上頭の事、甚に因つて分つて三十二と爲す、太子汝眼睛を缺撓す、琰王の嚴責知己無し。

❶傳燈第二十九、大法眼禪師文益の頌十四首中、金剛經爲人輕賤の章の細字註に云く、「持經とは佛地を證するなり。」

れ。金剛は法に論ふ、體堅固なるが故に、物壞する能はず。利用なるが故に、能く一切の物を摧く。山に擬すれば則ち山摧け、海に擬すれば則ち海竭く。論に就いて名を彰す、其の法亦然り。此の般若に三種有り、一には實相般若、二には觀照般若、三には文字般若。實相般若とは卽ち是れ眞智なり。乃ち諸人腳跟下、一段の大事、今古に輝騰して、迥かに知見を絕す、淨躶躶赤灑灑たる者是れ。觀照般若とは、卽ち是れ眞境なり。二六時中、放光動地、聲を聞き色を見る者是れ。文字般若とは、卽ち能詮の文字。卽ち如今說く者聽く者、且く道へ、是れ般若か、是れ般若にあらざるか。古人道く、「人人一卷の經有り。」又道く、「❷手に經卷を執らずして、常に如是經を轉ず」と。若し此の經の靈驗に據らば、何ぞ止だ重を轉じて輕ならしめ、輕を轉じて受けざらしむるのみならん。設使ひ聖に敵する功能も、未だ奇特と爲さず。見ずや龐居士、金剛經を講ずるを聽いて、座主に問うて曰く、「俗人敢て小問有り、知らず如何。」主云く、「疑有らば請ふ問へ。」士云く、「無我相無人相と、既に我人の相無くんば、阿誰をして講せしめ、阿誰をして聽かしめん。」座主對無し。卻へつて云く、「某甲文に依つて義を解す、此の意を知らず」と。居士乃ち頌有り、云く、「無我亦無人、作麼ぞ疎親有らん。君に勸む座を歷ることを休めよ。爭か直に眞を求むるに似かん。金剛般若の性、外一纖塵を絕す。我聞幷に信受、總に是れ假りに名を稱す」と。此の頌最も好し、分明に一時に說き了れり。圭峰四句の偈を科して云

❷丹丘の興成、法華經台宗の諸義を叙ぶる中に、智者の云く、「手に經卷を執らず、常に是の經を讀み、口に言音無うして、獨く衆典を誦す云云。」

く、「凡そ所有の相は、皆是れ虛妄なり。若し諸相は非相なりと見ば、卽ち如來を見ん。」此の四句の偈の義、全く佛地を證する者を、此の經を持すと名づくと云ふに同じ。又道く、「若し色を以て我れを見、音聲を以て我れを求めば、是の人邪道を行ず、能く如來を見ること能はず」と。此れ亦是の四句の偈、但だ中間其の義全き者を取る。僧㊀晦堂に問ふ、「如何なるか是れ四句の偈。」晦堂云く、「㊁話墮するも也た知らず。」雪竇此の經上に於て指出す。若し人有り、此の經を持せん者は、卽ち是れ諸人本地の風光、本來の面目なり。若し祖令當行に據らば、本地の風光、本來の面目も、亦斬つて三段と爲さん。三世の諸佛、十二分敎、一揑と消せず。這裏に到つて設使ひ萬種の功能有るも、亦管得することを能はず。如今の人只管に經を轉じて、都て是れ箇の什麼の道理と云ふことを知らず。只管に道く、「我れ一日に多少を轉得す」と。只だ黃卷赤軸、巡行數墨を認む。殊に知らず全く自己本心の上より起ることを。這箇、唯だ是れ轉處の些子なり。㊂大珠和尙云く、「空屋裏に向つて、數函の經を堆うして看よ、他光を放つ麼。只だ自家一念發する底の心、是れ功德なるを以てなり。」何が故ぞ、萬法は皆自心より出づ、一念是れ靈なり、既に靈なれば卽ち通ず、既に通ずれば卽ち變ず。古人道く、㊃「青青たる翠竹盡く是れ眞如。鬱鬱たる黃花般若に非ずと云ふこと無し。」若し見得徹し去らば、卽ち是れ眞如。忽ちに未だ見得せずんば、且く道へ、作麼生か喚んで眞如と作さん。㊄華嚴經に云く、「若し人三世一切の佛を了知せんと欲せば、應に法界の性は、一切唯心の造なることを觀ずべし。」儞若し識得し去らば、境に逢ひ緣に遇うて、主と爲り宗と爲らん。若し未だ明得すること能はずんば、且く伏して處分を聽け。雪竇眼を出して大槩を頌して、經の靈驗を明めんことを要す。頌に云く、

【頌】明珠掌に在り、(上霄漢に通ず、下黃泉に徹す。什麼と道ふぞ、四邊誦訛八面玲瓏。)功ある者を賞す。(多少分明、他に隨ひ去る。忽ちに若し功無き時作麼生か賞せん。)胡漢來らず。(內外消息を絕す、猶ほ些子に較れり。)全く伎倆なし。(展轉して沒交涉。什麼の處に向つてか摸索せん。漆桶打破し來れ相見せん。)伎倆既になし、(休し去り歇し去る、阿誰か恁麼に道ふ。)波旬途を失す。(勘破了也、這の外道魔王蹤跡を尋ぬるに見えず。)瞿曇瞿曇。(佛眼も覷れども見えず。咄。)我れを識るや也た無や。(咄、勘破了也。)復た云く、「勘破了也。」(一棒一條の痕、已に言前に在り。)

【評唱】「明珠掌に在り、功有る者は賞す。」若し人有つて此の經を持し得て、功驗有る者は、則ち珠を以て之を賞す。他此の珠を得て、自然に用ふることを會す。胡來れば胡現じ、漢來れば漢現す。萬象森羅、縱橫顯現す。此は是れ功勳有り。法眼云く、「佛地を證する者を、此の經を持すと名く」と。

㊀晦堂祖心は、南嶽下十一世黃龍南の法嗣、付寶傳二十三、會元十七に傳あり。
㊁話墮は、論に負けるなり。
㊂大珠和尙は、南嶽下二世馬祖の法嗣、傳燈第六、會元第三に傳あり。
㊃以下、般若に非ずと云ふこと無しに至る、道生法師の語、祖庭事苑第五に出づ。
㊄以下、唯心の造なることを觀ずべしに至る、唐譯華嚴經十九卷、夜摩宮中偈讚品覺林菩薩の偈。

此の兩句に公案を頌し畢る。「胡漢來らず、全く伎倆無し。」雪竇鼻孔を裂轉す、也た胡漢有つて來る則んば、倆をして現せしむ。若し忽ち胡漢俱に來らざる時、又且つ如何。這裏に到つて佛眼も也た覷れども見えず。且く道へ、是れ功勳か是れ罪業か、是れ胡か是れ漢か、直に羚羊の角を掛くるに似たり。道ふこと莫れ聲響蹤跡、氣息も也た無し、什麼の處に向つてか摸索せん。諸天をして花を捧ぐるに路無く、魔外をして潛かに覷ふに門無からしむるに至る。是の故に洞山和尚、一生住院、土地神他の蹤跡を覓むるに見えず。一日厨前に米麪を拋撒す。洞山心を起して曰く、「常住の㋮物色何ぞ作錢すること此の如きことを得たる。」土地神、遂に一見することを得て便ち禮拜す。雪竇道く、「伎倆既に無し」と。若し此の伎倆無き處に到つては、波句も也た途を失せしむ。世尊一切衆生を以て赤子と爲す。若し一人有つて發心修行すれば、波句の宮殿之が爲に振裂す、他便ち來つて修行者を惱亂す。雪竇道く、「直饒ひ波句恁麼に來るも、也た須らく途路を失卻して、近傍の處無からしむべし。」雪竇更に自ら點胴して云く、「瞿曇瞿曇、我れを識るや也た無や」と。道ふこと莫れ、是れ波句と。任ひ是れ佛來るも、還つて我を識るや也た無や。釋迦老子、尚ほ自ら見ず、諸人什麼の處に向つてか摸索せん。復た云く、「勘破了也。」且く道へ、是れ雪竇瞿曇を勘破するか、瞿曇雪竇を勘破するか、具眼の者、試みに定當して看よ。

㋮物色は猶ほ物事と云ふがごとし、色の字事の字別に意義なし。

第九十八則

垂示に云く、一夏嘮々として葛藤を打し、幾ど五湖の僧を絆倒す。金剛の寶劍當頭に截る。始めて覺ゆ從來百不能なることを。且く道へ、作麼生か是れ金剛の寶劍。眉毛を眨上して、試みに請ふ鋒鋩を露す、看よ。

【本則】舉す、天平和尚行腳の時、西院に參ず。常に云く、「道ふこと莫れ佛法を會すと、箇の舉話の人を覓むるも也た無し。」(漏逗少からず、這の漢是なることは則ち是。爭奈せん靈龜尾を曳くことを。)一日西院遙かに見て召して云く、「從漪。」(鐃鈎搭索し了れり。)平頭を擧ぐ。(著、兩重の公案。)西院云く、「錯。」(也た須らく是れ鑪裏に鍛過して始めて得べし。劈腹剜心、三要印開して朱點牽し。未だ擬議を容れざるに主賓分る。)平行くこと三兩步。(已に是れ半前落後。這の漢泥裏に土塊を洗ふ。)西院又云く、「錯。」(劈腹剜心、人皆喚んで兩重の公案と作す。殊に知らず水を水に入るゝに似、金を金に博ふるが如きことを。)平近前す。(依前として落處を知らず、展轉して摸索不着。)西院云く、「適來這の兩錯、是れ西院が錯か、是れ上座が錯か。」

【本則】東嶺禪師云く、九十八則、便ち四院兩錯、古今其則たること明す。西院和尚は、先寶壽延沼禪師に承嗣す、此の師特に扶宗の大志有り、今、天平を試むるの一機、甚だ操履を含めり、寶壽の嗣爲るに耻づ、夏を過して此の公案を圓にせんことを請求するに、天平の省せざるは、大いに祖師門下の事を失す、惜むべし、惜むべし。

（前箭は猶ほ輕く後箭は深し。）平云く、「從漪が錯。」（錯つて驢鞍橋を認めて喚んで爺の下頷と作す、恁麼の衲僧に似ば、千箇萬箇を打殺すとも什麼の罪か有らん。）西院云く、「錯。」（雪上に霜を加ふ。）平休し去る。（錯つて定盤星を認む、果然として落處を知らず、軒かに知んぬ儞か鼻孔別人の手裏に在ることを。）西院云く、「且く這裡に在つて夏を過し、上座と共に這の兩錯を商量せんことを待て。」（西院尋常脊梁硬きこと鐵に似たり。當時何ぞ趕ひ將て出し去らざる。）平當時便ち行く。（也た衲僧に似たり、似たることは則ち似たり、是なることは則ち未だ是ならず。）後に住院して衆に謂つて云く、（貧兒舊債を思ふ、也た須らく是れ點過すべし。）「我れ當初行腳の時、業風に吹かれて、思明長老の處に到る、兩錯を連下せられ、更に我れを留めて夏を過して、我れと共に商量せんことを待たしむ。我れ恁麼の時錯とは道はず、我が發足して南方に向つて去りし時、早く知んぬ錯と道ひ了ることを。」（這の兩錯を爭奈何せん。千錯萬錯爭奈せん沒交渉。轉た見る郎當として人を愁殺することを。）

【評唱】㋑思明先づ㋺大覺に參ず、後㋩前寶壽に承嗣す。㋥一日問ふ、「化城を踏破し來る時如何。」壽云く、「利劍、死漢を斬らず。」明云く、「斬。」壽便ち打つ、思明十回斬と道ふ。壽十回打つて云く、「這の漢、甚の死急か、箇の死屍を將て、他の痛棒に抵する。」遂に喝出す。其の時一僧有つて、

㋑思明即ち西院なり、南嶽下六世寶壽沼の法嗣、傳燈十二、會元十一に傳あり。
㋺大覺は、南嶽下五世臨濟の法嗣、傳燈十二、會元十一に傳

寶壽に問うて云く、「適來問話底の僧、甚だ道理有り、和尚方便して他を接せよ。」寶壽亦打つて、這の僧を趕ひ出す。且く道へ、寶壽亦這の僧を趕ふ。唯だ當に他是と說き非と說くと道ふべき、且つ別に道理有るか、意作麼生。後來俱に寶壽に承嗣す。㋭思明一日出でて南院に見ゆ、院問うて云く、「甚れの處よりか來る。」明云く、「許州より來る。」院云く、「什麼をか將ち得來る。」明云く、「箇の江西の剃刀を將ち得たり、和尚に獻與せん。」院云く、「既に許州より來る、甚に因つてか卻つて江西の剃刀有る。」明、院の手を把つて㋮掐一掐す。院云く、「侍者收取せよ。」思明衣袖を以て拂一拂して便ち行く。院云く、㋯「阿剌剌、阿剌剌」と。㋰天平曾て㋱進山主に參じ來る。他諸方に到つて、此の㋲蘿蔔頭の禪に參得して、肚皮裏に在くが爲に、到る處に便ち輕しく大口を開いて道く、「我れ禪を會し道を會す」と。常に云く、「道ふこと莫れ佛法を會すと。箇の擧話の人を覓むるに也た無し」と。屎臭の氣人に薰ず、只管に輕薄を放にす。且く諸佛未だ出世せず、祖師未だ西來せず未だ問答有らず、未だ公案有らざる已前の如きんば、還つて禪道有り麼。古人事已むことを獲ず、機に對して垂示す、後人喚んで公案と作す。

㋭以下、阿剌剌に至る、傳燈十二南院、慧顒の章に、會元十一南院、慧顒の章に、此の緣を收む。
㋮掐は說文に「爪刺なり。」
㋯阿剌剌は驚く意なり、「おうおう」又は「おやおや」と譯す。
㋰天平從漪は、青原下九世清豁進の法嗣、傳燈二十六、會元第八に傳あり。
㋱進山主は、青原下八世羅漢琛の法嗣、傳燈二十四、會元第八に傳あり。
㋲蘿蔔頭禪は、古抄に家常底と云ふ義か。

因に世尊拈華、迦葉微笑。後來阿難、迦葉に問ふ、「世尊金襴を傳ふる外、別に何の法をか傳ふ。」迦葉云く、「阿難」と、阿難應喏す。迦葉云く、「門前の刹竿を倒卻著せよ」と。只だ未だ花を拈せず、阿難未だ問はざる已前の如きんば、甚の處よりか公案を得來らん。只管諸方冬瓜の印子に印定し了られて便ち道ふ、「我れ佛法の奇特を會す、人をして知らしむること莫れ」と。天平正に此の如し。西院に叫び來つて兩錯を連下せられて、直に得たり周章惶怖して、㊇分疎不下。㊆前村に撲らず、後店に迭らざることを。有る者は道ふ、「箇の西來意を說く、早く錯り了れり」と。殊に西院這の兩錯の落處を知らず、諸人且く道へ、什麼の處にか落在す。所以に道ふ、「他活句に參じて、死句に參せざれ」と。天平頭を擧す、已に是れ二に落ち三に落ち了れり。西院云く、「錯。」他卻つて當用の用處を薦得せず、只だ我が肚皮裏に禪有りと道つて、他に管する莫し。又行くこと三兩步。西院又曰く、「錯。」卻つて舊に依つて黑漫漫地、天平近前す。西院云く、「適來の兩錯、是れ西院が錯か、是れ上座が錯か。」天平云く、「從瀚が錯」と。且喜すらくは沒交涉。已に是れ第七第八頭にし了れり。西院云く、「且く這裏に在つて夏を度つて、上座と共に、這の兩錯を商量せんを待て。」天平當時便ち行く、似たることは則ち也た似たり、是なることは則ち未だ是ならず。也た他不是とは道はず、只だ是れ趕へども㊆上らず、然も是の如くなりと雖も、卻つて些子

㊇分疎不下は、云ひほどき得ずと譯す。

㊆前村に撲らず、後店に迭らずとは、先きへも着かず、後へも着かざるの義なり。

㊆上の字は着字の意、「おひつかぬ」と譯す。

粥僧の氣息有り。天平後に住院、衆に謂つて云く、「我れ當初行腳の時、業風に吹かれて、思明和尙の處に到るに、兩錯を連下せらる。更に我れを留め夏を度つて、我れと共に商量せんことを待たしむ。我れ恁麼の時、錯と道はず、我れ發足して南方に向つて去る時、早く知んぬ錯と道ひ了ることを。」這の漢也た煞だ道ふ、只だ是れ第七第八頭に落つ、㊄料掉として沒交涉。如今の人他の發足して南方に向つて去りし時、早く知んぬ錯と道ひ了ることをと道ふを聞いて、便ち去つて卜度して道ふ、「未だ行腳せざる時、自ら許多の佛法禪道無し。行腳するに至るに及んで、諸方に熱瞞せらる。未だ行腳せざる時も、地を喚んで天と作し、山を喚んで水と作す可らず、幸に一星事無し」と。若し總に恁麼に流俗の見解を作さば、㊂何ぞ一片の帽を買ふて戴いて、大家に時を過さざる、什麼の用處か有らん。佛法は是れ這箇の道理にあらず、若し此の事を論せば、豈に許多般の葛藤有らんや。倘若し我れは會す他は會せずと道つて、一擔の禪を擔うて、天下を遶つて走るも、明眼の人に勘破せられて、一點も也た使ふことを著す。雪竇正に此の如く頌出す。

【頌】禪家流、(漆桶一狀に領過す。)輕薄を愛す。(也た些子有り、佛を呵し祖を罵る麻の如く粟に似たり。)滿肚參じ來つて用ふることを著す。(只だ宜しく用處有るべし、方木圓孔に逗せず、闍黎他と

㊄料は力弔切、掉は徒弔切、同韵同等の疊韵なれば、料の一字の意義なり、掉の字意義なし、料は料度、料計の義にて、物事を「つもる」意、今は、計較分別では、よつてもつかぬ意なり。度々頭を打ち掉つて肯はざるを云ふ。

㊂古抄に、なぜに、頭巾を一つ買ふて、還俗して時を過さぬぞ。

同參）悲むに堪へたり笑ふに堪へたり天平老。（天下の衲僧跳不出。旁人の眉を攢むることを怕れず、也た人の鈍悶することを得たり。）卻つて謂ふ當初悔らくは行脚せしことを。（未だ行脚せざる已前に錯り了れり。草鞋を踏破して何の用を作すにか堪へん、一筆に勾下す。）錯錯。（是れ什麼ぞ、雪竇錯つて名言を下し了れり。）西院の清風頓に銷鑠す。（西院什麼の處にか在る、何似生。道ふ莫れ西院と三世の諸佛、天下の老和尚も亦須らく倒退三千して始めて得べし。斯に於て會得せば、爾に許す天下に横行することを。）復た云く、「忽ち箇の衲僧あつて出でて云はん錯と。」（一狀に領過す、猶ほ些子に較れり。）雪竇が錯は天平が錯と何似ぞ。（西院又出世。款に據つて案に結す。總に沒交渉。且く道へ、畢竟して如何。打つて云く、錯。）

【評唱】「禪家流、輕薄を愛す、滿肚參じ來つて用ふることを著す」と。這の漢會することは則ち曾す、只だ是れ用ひ得ず。尋常目に雲霄を視て道ふ、「他多少の禪を會得す」と。烘爐裏に向つて纔かに烹るに至るに及んで、元來一點も使ふことを著ず。五祖先師道く、「一般の人有つて參禪す、琉璃瓶裏に㋑糍糕を搗くが如くに相似たり。更に動轉することを得ず、㋺抖擻し出さず、觸著すれば卽ち破る。若し活潑潑地ならんことを要せば、但だ皮殼漏子の禪に參せよ。直に高山の上に向つて撲將下來するも、亦不破、亦不壞。古人道く、「設使ひ言前に薦得するも、猶ほ殼に滯り封に迷ふ。直饒ひ句下に精通するも、未だ途に觸れて狂見することを免れず。」「悲むに堪へたり笑ふに堪へたり天平老。卻つて謂ふ當初悔らくは行脚せしことを。」雪竇道く、「悲むに堪へたり他人に對して說き出さざることを。笑ふに堪へたり他一肚皮の禪を會して、更に些子を使ひ著ざることを。」錯錯、這の兩錯、有る者は道ふ、「天平會せざる是れ錯」と。又有る底は道ふ、「無語底是れ錯」と、什麼の交涉か有らん。殊に知らず這の兩錯、擊石火の如く、閃電光に似たることを。是れ他の向上の人行履の處なり。劒に仗つて人を斬るに、直に人の咽喉を取つて、命根方に斷ずるが如し。若し此の劒刃上に向つて行じ得ば、便ち七縱八横ならん。若し兩錯を會得せば、便ち以て西院の清風頓に銷鑠することを見る可し。雪竇上堂、此の話を擧し了つて、意に道く、「錯」と。我れ且く爾に問はん、雪竇這の錯、天平の錯に何似ぞ。且つ參せよ三十年。

㋑糍糕は牡丹餅の類なるべし。
㋺抖擻は袋から物をふり出すを云ふ。皮殼漏子は皮袋なり、轉々自在にして破るゝことなきを云ふ。

第九十九則

垂示に云く、龍吟ずれば霧起り、虎嘯けば風生ず。出世の宗猷、金玉相振ひ、通方の作略、箭鋒相拄ふ。徧界藏さず、遠近齊しく彰れ、古今明かに辨ず。且く道へ、是れ什麼人の境界ぞ。試みに擧す看よ。

【本則】擧す、肅宗皇帝、忠國師に問ふ、「如何なるか是れ十身調御。」（作家の君主大唐の天子、也た合に恁麼なることを知るべし。頭上の捲輪冠

【本則】東嶺禪師云く、九十九則、便

脚下の無憂履。）國師云く、「檀越毘盧頂上を踏んで行け。」（須彌那畔手を把つて共に行く。猶ほ這箇の有る在り。）帝曰く、「寡人不會。」（何ぞ領話せざる、可惜許。好彩分付せず、帝ならば當時便ち喝せん、更に會することを用て什麼か作ん。）國師云く、「自己清淨法身を認むること莫れ。」（然も葛藤すと雖も卻つて出身の處有り、醉後郎當として人を愁殺す。）

【評唱】肅宗皇帝、㋑東宮に在せし時、已に忠國師に參す。後來卽位して、之を敬すること愈篤し、出入迎送、躬自ら車輦を捧ぐ。一日箇の問端を致し來つて、國師に問うて云く、「如何なるか是れ㋺十身㋩調御。」師云く、「檀越毘盧頂上を踏んで行け。」國師平生、一條の脊梁骨、硬きこと生鐵の如し。帝王の面前に至るに及んで、爛泥の如くに相似たり。然も答へ得て廉纖なりと雖も、卻つて箇の好處有り。他道ふ、「儞會得せんと要せば、檀越須らく是れ毘盧頂額上に向つて行いて始めて得べし。」他卻つて薦せず、更に道ふ、「寡人不會」と。國師後面に忒煞だ㋥郎當として草に落ち、更に頭上底の一句を注して云く、「錯つて自己清淨法身と認むること莫れ。」所謂人人具足、箇箇圓成。看よ他の一放一收、八面に敵を受くることを。道ふこ

㋑書言故事第一に云く、「太子を東宮と曰ふ。」這の詩に、正に青德を少陽に體す、註に謂く、「太子天子の體を繼ぐ、德を東宮に青ふ、少陽は東方、又震を長子と爲す、東は震に屬す、故を以て宮を東に立つ、故に東宮と曰ふ。」

㋺驛氏要覽中卷、華嚴經に云く、「一には無著佛、二には願佛、三には業報佛、四には住持佛、五には涅槃佛、六には法界佛、七には心佛、八には三昧佛、九には性佛、十には如意佛、十種の他受用佛亦十身と名く。」

㋩調御は十號の一なり、調御丈夫とは大丈夫の力用を具して、種種の諸法を說き、一切衆生を調伏し制御して、垢染を離れて大涅槃を得せしむ、故に調御丈夫と號す、大明三藏法數三十五に見ゆ。

㋥郎當は「落ちぶれる」と譯す。

㋭天親菩薩金剛經上卷の偈に云く、「應化眞佛に非ず、亦說法者に非ず、說法に取せず、說無く言相を離る。」

㋬三因とは、一には、正因性、二には、了因性、三には、緣因性。

㋣三德とは、法身の德、般若の德、解脫の德。

とを見ずや、善く師と爲る者は、機に應じて敎を設け、風を看て帆を使ふ。若し只だ一隅を僻守せば、豈に能く回互せんや。看よ佗の黃檗老、善能く人を接することを。臨濟に遇著して、三回便ち痛く六十棒を施す、臨濟當下に便ち會し去る。裴相國の篤にするに至るに及んで、葛藤忒煞だし。此れ豈に是れ善く人の師と爲るにあらずや。忠國師善巧方便して、肅宗帝を接す、蓋し他八面に敵を受くる底の手段有るが爲なり。十身調御とは、卽ち是れ十種の他受用身なり。法報化の三身は、卽ち法身なり。何が故ぞ、㋭報化は眞佛に非ず、亦說法者に非ず、法身に據るに、則ち一片虛凝にして寂照なり。太原の孚上座、揚州の光孝寺に在つて、涅槃經を講ず。游方の僧有り、卽ち夾山の典座なり、寺に在つて雪に阻てらる。因に往いて講を聽く。講じて㋬三因佛性、㋣三德法身に至つて、廣く法身の妙理を談ず、典座忽然として失笑す。孚乃ち目顧す、講じ罷んで禪者を請せしめて問うて云く、「某素智狹劣にして、文に依つて義を解す、適來講の次、上人の失笑するを見る、某必らず短乏せる處有らん、請ふ上人說け。」典座云く、「座主問はずんば、卽ち敢て說かず、座主既に問ふ、則ち言はずんばある可らず、某實に是れ座主の法身を識らざることを笑ふ。」孚云く、「此の如く解說す、何れの處か是ならざる。」典座云く、「請ふ座主更に說くこと一徧せよ。」孚云く、「法

身の理は猶ほ太虛の若し、豎に㋣三際を窮め、横に㋤十方に亘る。㋥八極に彌綸し、㋦二儀を包括す、㋧緣に隨ひ感に赴いて、周徧ならずと云ふこと靡し。」典座曰く、「座主の說不是とは道はず、只だ法身量邊の事を識り得て、實に未だ法身を識らざること在り。」孚曰く、「既に然も是の如くならば、禪者當に我が爲に說くべし。」典座曰く、「若し是の如くならば、座主暫く講を輟め、旬日靜室の中に於て、端然として靜慮し、心を收め念を攝め、善惡の諸緣一時に放卻して、自ら窮究して看よ。」孚一に言ふ所に依る。初夜より五更に至り、鼓角の鳴るを聞いて、忽然として契悟す。便ち去つて禪者の門を叩く。典座曰く、「阿誰ぞ。」孚曰く、「某甲。」典座咄して曰く、「汝をして大敎を傳持して、佛に代つて說法せしむ。夜半什麼と爲てか、酒に醉うて街に臥す。」孚曰く、「自來の講經、生身父母の鼻孔を將て扭捏す、今日より已後、更に敢て是の如くならず」と。看よ他の奇特の漢、豈に只だ去つて箇の昭昭靈靈を認めて、驢前馬後に落在せんや。須らく是れ業識を打破して、一絲毫頭の得可き無かるべし。猶ほ只だ一半を得ること在り。㋪古人道く、「纖毫修學の心を起さずんば、無相光中常に自在なり」と。但だ寂滅底を識つて、盤色を認むること莫れ、但だ㋫靈知を識つて、妄想を認むること莫れと。所以に道

㋬三際は前、後、中際を謂ふ。
㋤十方は東西南北四維上下。
㋥東西南北四維を八極と謂ふ。彌綸と言ふは、周遍包羅の義。
㋦易係辭上傳に云く、易に太極有り、是れ兩儀を生ず、兩儀四象を生ず、四象八卦を生ず。
㋧唐譯華嚴經六卷、如來現相品に、一切法勝音菩薩の頌に云く、「佛身は法界に充滿し、普く一切衆生の前に現ず、緣に隨ひ云云。」
㋨以下、禪門諸祖偈頌上卷、雪竇和尚十二時の歌の二句なり。
㋩幻住曰く、靈妙の本知なり。

ふ、「㋭假使ひ鐵輪頂上に旋るとも、定慧圓明にして終に失せず」と。達磨二祖に問ふ、「汝雪に立つて臂を斷つ、當に何の事の爲にかすべき。」祖曰く、「某甲心未だ安からず、乞ふ師安心せしめよ。」磨云く、「心を將ち來れ、汝が與に安せん。」祖曰く、「心を覓むるに了に不可得なり。」磨曰く、「汝が與に安心し竟んぬ。」二祖忽然として領悟す。且く道へ、正當恁麼の時、法身什麼の處にか在る。長沙云く、「學道の人眞を識らざることは、只だ從前識神を認むるが爲なり。無始劫來生死の本、癡人喚んで本來の人と作す。」如今の人只だ箇の昭昭靈靈を認め得て、便ち瞳眼努目して精魂を弄す、什麼の交涉か有らん。只だ他自己清淨法身と認むること莫れと道ふが如き、且く自己法身の如きんば、儞も也た未だ夢にも見ざること在り、更に什麼の認むること莫れとか說かん。敎家には清淨法身を以て極則と爲す、什麼と爲てか卻つて人をして認めしめざる。道ふことを見ずや、㋮認著すれば依前として還つて不是、咄。好し便ち棒を與ふるに、此の意を會得せば、始めて他の自己清淨法身と認むること莫れと道ふことを會せん。雪竇他の老婆心切なることを嫌ふ、爭奈せん爛泥裏に刺有ることを。豈に見ずや、洞山和尙、人を接するに三路有り、㋯所謂玄路、鳥道、展手なり。初機の學道、且く此の三路に向つて行履せしむ。僧問ふ、「師尋常學人をして鳥道を行かしむ。未審し如何なるか是れ鳥道。」洞山云く、「一人に逢はず。」僧云く、「如何が行かん。」

㋭以下失せずに至る、證道歌。
㋮此の句、傳燈二十九、寶誌和尙十二時の頌中に見ゆ、依前は「相變らず」と譯す。
㋯洞山玄中の銘に曰く、擧足下足、鳥道に殊なること無し。坐臥經行玄路に非ずと云ふことと莫し。

山云く、「直に須らく❍足下無私にして去るべし。」僧云く、「只だ鳥道を行くが如きんば、便ち是れ本來の面目なること莫しや否や。」山云く、「闍黎什麼に因つてか顚倒す。」僧云く、「什麼の處か是れ學人顚倒の處。」山云く、「若し顚倒せずんば、什麼と爲てか奴を認めて郎と作す。」僧云く、「如何なるか是れ本來の面目。」山云く、「鳥道を行かざれ」と。須らく是れ見て這般の田地に到つて、方に少分の相應有るべし。直下に打疊して、迹を削り聲を呑ましむるも、猶ほ是れ衲僧門下は、沙彌童行の見解なること在り。更に須らく首を塵勞に回して、大用を繁興して始めて得べし。雲竇の頌に云く、

❍足下無私を一に無絲に作る。

【頌】　一國の師も亦强ひて名づく。（何ぞ必らずしもせん、空花水月、風過ぎて樹頭搖く。）南陽獨り許す嘉聲を振ふことを。（果然として要津を坐斷す。千箇萬箇の中、一箇半箇を得難し。）大唐扶け得たり眞の天子。（可憐生、接得して何の用を作すにか堪へん。瞎衲僧を接得して、什麼の事をか濟さん。）曾て毘盧頂上を踏んで行かしむ。（一切の人、何ぞ恁麼に去らざる、直に得たり天上天下。上座作麼生か踏まん。）鐵鎚擊碎す黃金の骨。（平生を暢快す、已に言前に在り。）天地の間更に何物ぞ。（茫茫たる四海知音少なり。全身擔荷す、沙を撒し土を撒す。）三千刹海夜沈々。（高く眼を着けよ、封疆を把定す。儞鬼窟裏に入り去らんことを待つや。）知らず誰か蒼龍窟に入る。（三十棒一棒も也た少なきことを得じ、拈了也、還つて會すや、咄。諸人の鼻孔雪竇に穿ち了らる、錯つて自己淸淨法身と認むること莫れ。）

【評唱】「一國の師も亦强ひて名く、南陽獨り許す嘉聲を振ふことを。」此の頌一に箇の眞贊に似て相似たり。道ふことを見すや、至人に名無しと。喚んで國師と作すも、亦是れ强ひて名を安じ了れり。國師の道、比倫す可らず、善能く恁麼に人を接す。獨り許す南陽是れ箇の作家なることを。大唐扶け得たり眞の天子、曾て毘盧頂上を踏んで行かしむ。若し是れ具眼の衲僧の眼腦ならば、須らく是れ毘盧頂上に向つて行いて、方に此の十身調御を見るべし。佛之を調御と謂ふ、便ち是れ十號の一數なり。一身十身と化し、十身百身と化す。乃至千百億身も、大綱只だ是れ一身なり。這の一頌卻つて說き易し。後は他の自己淸淨法身と認むること莫れと道ふことを頌す。頌し得て水灑げども著かず、直に是れ口を下して說くこと難し。「鐵鎚擊碎す黃金の骨。」此は自己淸淨法身と認むること莫れと云ふを頌す。雪竇忒煞だ佗を讚歎して、黃金の骨一鎚に擊碎し了れり。天地の間更に何物ぞ、直に須らく淨躶躶赤灑灑とし、更に一物の得可き無き、乃ち是れ本地の風光なるべし。一に三千刹海夜❍沉沉たるに似たり。三千大千世界、香水海の中に、無邊刹有り、一刹に一海有り、正當夜靜かに更深くる時、天地一時に澄澄地なり。且く道へ、是れ什麼ぞ、切に忌む目を閉ぢ眼を合する會を作すことを。若し恁麼に會せば、正に毒海に墮在せん。知らず誰か蒼龍の窟に入る。腳を展べ腳を縮む。且く道へ是れ誰ぞ、諸人の鼻孔一時に雪竇に穿卻し了らる。

❍沈々、一に澄々に作る。

第一百則

垂示に云く、因を收め果を結び、始めを盡し終を盡す。對面私無し、元曾て說かず。忽ち箇の出で來つて、一夏請益す。什麼としてか曾つて說かずと道ふあらば、儞が悟り來らんを待つて、儞に向つて道はん。且く道へ、爲復是れ當面に諱卻するか、爲復別に長處有るか。試みに擧す看よ。

【本則】擧す、僧、巴陵に問ふ、「如何なるか是れ吹毛の劍。」(斬、嶮。)陵云く、「珊瑚枝々月を檠著す。」(光萬象を呑む、四海九州。)

【評唱】巴陵干戈を動せず、四海五湖多少の人、舌頭地に落つ。雲門人を接すること正に此の如し、他は是れ雲門の的子なり。亦各箇の作略を具す。是の故に道ふ、「我れは愛す韶陽新定の機、一生人の與に釘を抽き楔を拔くことを。」這箇の話、正に恁麼地なり。一句の中に於て、自然に三句を具す。函蓋乾坤の句、截斷衆流の句、隨波逐浪の句、答へ得て也た妨げず奇特なり。浮山の遠錄公云く、「未透底の人は、句に參せんより意に參せんには如かず、透得底の人は、意に參せんより句に參せんには如かず」と。雲門下に三尊宿有り、吹毛の劍に答へて、俱に了と云ふ。唯だ是れ巴陵の

【本則】東昌禪師云く、第一百則、便ち智劍出で來りて無一物、明頭未だ顯れず暗頭明なるの大意を明す。

先師曰く、「此の答話の如きは、巴陵に和して喪身失命し了れり。」又曰く、「巴陵の句に非ず、蕚月の句に非ず、畢竟して如何、霜天月落ちて花將に半ばならんとす、誰と共にか澄潭影を照して來き。」又曰く、「雪竇亦巴陵の毒酒に醉ふか。」

み答へ得て了の字に過ぎたり。此れ乃ち句を得たり。且く道へ、了の字と珊瑚枝枝月を檠著すと、是れ同か是れ別か。前來道ふ、「三句辨ず可し、一鏃空に逸る」と。這の話を會せんと要せば、須らく是れ情塵意想を絕して、淨盡き、方に他の珊瑚枝枝月を檠著すと道ふことを見るべし。若し更に道理を作さば、轉た摸索不著なることを見ん。此の語は是れ禪月友人を懷ふ詩に曰く、「厚きことは㋑鐵圍山上の鐵に似たり、薄きことは㋺雙成仙體の㋩纈に似たり。㋥蜀機鳳雛動もすれば歷歷、珊瑚枝枝月を檠著す。㋭王凱が家中藏して掘り難く、㋬顏回が飢漢天雪を愁ふ。古檜の筆直うして㋮雷にも折れず、雪衣の石女㋯蟠桃の缺。佩びて龍宮に入つて步遲遲たり、繡簾銀簟何ぞ參差たる、卽ち知らず驪龍珠を失す知るや知らずや。」巴陵句中に於て、一句を取つて吹毛の劍に答ふ、則ち是れ快なり。劍刃上に毛を吹いて之を試むるに、其の毛自ら斷つ。乃ち利劍、之を吹毛と謂ふ。巴陵只だ他の問處に就いて、便ち這の僧の話に答ふ、頭落つるも也た知らず。頌に云く、

【頌】不平を平げんことを要す。(細なること蚍蜉の如し、大丈夫の漢、須らく是れ恁麼なるべし。)大巧は拙の如し。(聲色を動さず身を藏し影を露す。)或は指或は掌。(看よ、果然として這箇不是。)天に倚つて雪を照す。

㋑鐵圍山は、法苑珠林、四州の部に詳なり。

㋺事文類聚續集二十三に云く、漢武內傳に、西王母、侍女董雙成に命じて、靈和の笙を吹かしむ。

㋩纈は韻會に、「緝を繫ぎ染めて文を爲す」とあり、今のしぼり染めならん。ひも也。

㋥蜀機は蜀江の錦機なり、鳳雛は錦の文なり、暨暨は本集に鬱鬱と作す、鬱鬱は、旋旋として行く貌。つまづき倒れんとする也、衣裳薫く廣大なれば。

㋭王凱は晉の富人なり。事文類聚別集十八に故事を出す。蔵して掘り難しは、蓋し隱生、

（斬、覿着すれば則ち瞎す。）大冶も磨礱し下さず、（更に煅煉を用て什麼か作ん。干將能く來ること莫し。）良工も拂拭して未だ歇まず。（人能く行くこと莫し、直饒ひ干將出で來るとも倒退三千。）別別。（咄、什麼の別處か有らん。讚歎するに分有り。）珊瑚枝枝月を撐著す。（三更月落ちて影寒潭を照す。且く道へ、什麼の處にか向つて去る、直に得たり天下太平なることを。醉後郎當として人を愁殺す。）

【評唱】「不平を平げんことを要す、大巧は拙の若し。」古俠客有り、路に不平を見て、强の弱を凌ぐを以て、卽ち劍を飛して强者の頭を取る。所以に宗師家眉に寶劍を藏し、袖に金鎚を掛けて、以て不平の事を斷ず。「大巧は拙の若し。」巴陵の答處、不平の事を平げんと要す。他の語忒煞だ傷巧なるが爲に、返つて拙と成るに相似たり。何が故ぞ、佗當面に揮ひ來らずして、卻つて僻地裏に去つて、一截して暗に人の頭を取るに、而も人覺えざるが爲なり。「或は指或は掌、天に倚つて雪を照す。」會得せば則ち㋬天に倚る長劍、凜凜たる神威の如し。㋭古人道く、「心月孤圓にして、光萬象を呑む、光境を照すに非ず、境も亦存するに非ず、光境俱に亡ず、復た是れ何物ぞ。」此の寶劍、或は現じて指上に在り、忽ち掌

金を藏す故事を用ひしか、都文頴槃檢集二十五に出づ。

㋩論語雍也篇に、子曰く、「賢なるかな回や、一簞の食一瓢の飲、陋巷に在り、人は其の憂に堪へず、回や其の樂を改めず、賢なるかな回や。」

㋪福本に雪を雪と作す。

㋫蟠桃は卽ち仙桃なり、鈇は古本に玦に作る、說文に玉佩なり。雪衣の石女は人品の潔白也。

㋬祖庭事苑第四に云く、「宋玉が大言の賦に、方地を鑿と爲し、圓天を蓋と爲す、弓を彎いて扶桑を射る、長劍天外に倚る。」

㋭以下、何物ぞに至る、盤山の語、前に見ゆ。

中に現ず。昔日慶藏主、說いて這裏に到つて、手を豎てて云く、「還つて見る麼。」也た必らずしも手指の上に在らず、雪質路を借つて經過して、儞をして古人の意を見せしむ。且く道へ、一切處是れ吹毛の劍にあらずんばある可らず。所以に道ふ、「三級浪高うして魚龍と化す、癡人猶ほ犀む夜塘の水。」㋮祖庭事苑に孝子傳を載せて云く、「楚王の夫人、嘗て夏涼に乘じて、鐵柱を抱いて感じて孕む、後一の鐵塊を產す。楚王干將をして鑄て劍を爲らしむ。三年にして乃ち雙劍を成す。一雌一雄、干將密かに雄を留めて、雌を以て楚王に進む。王匣中に秘す、常に悲鳴するを聞く。王、群臣に問ふ、臣曰く、『劍に雌雄有り、鳴く者は雄を懷ふのみ。』王大いに怒つて、卽ち干將を收へて之を殺さんとす。干將其の應を知つて、乃ち劍を以て屋柱の中に藏す。因つて妻の莫耶に囑して曰く、『日北戶より出づ、南山其れ松あり、松石に生ず、劍其の中に在り』と。妻後に男を生む、眉間赤と名く。年十五、母に問うて曰く、『父何くにか在る。』母乃ら前事を述ぶ。久しく思惟して柱を剖いて劍を得たり。日夜父の爲に讎を報いんと欲す。楚王亦募つて其の人を覓めしむ。宣言すらく、『眉間赤を得る者有らば、厚く之を賞せん』と。眉間赤遂に逃る。俄かに客有り、曰く、『子は眉間赤に非ざることを得る邪。』曰く、『然り。』客曰く、『吾れは甑山の人なり、能く子が爲に父の讎を報せしめん。』赤曰く、『父昔寧無きに、枉げて荼毒せらる、君今惠念す、何の須むる所ぞ。』客

㋮或人曰く、圓悟、瞎庵と時を同じうす、豈に祖庭事苑を引くべけんや、蓋し刊行の誤ならん、況んや亦蜀本に此の緣を載せざるをや。蜀本には、「祖庭事苑」より「俱に爛る」に至る、此れ無し。後人の附會ならんと。

曰く、『當に子の頭并に劒を得べし。』赤乃ち劒并に頭を與ふ、客之を得て楚王に進む。王大いに喜ぶ。客曰く、『願はくは油を煎じて之を烹ん。』王遂に鼎中に投ず。客、王を詒いて曰く、『其の首爛れず。』王臨み視るに方つて、客後に於て劒を以て王の頭に擬すれば、鼎中に墮つ。是に於て二首相囓む。客、眉間赤が勝たざらんことを恐れて、乃ち自ら刎ねて以て之を助く。三頭相囓む。尋で亦俱に爛る。」（川本、此の楚王の一段無し。）雪竇道く、「此の劒能く天に倚つて雪を照す」と。尋常道ふ、「天に倚る長劒光能く雪を照す」と。這の些子の用處、直に得たり大冶磨㋐鑄し下さゞることを。任ひ是れ良工も拂拭して未だ歇まず、良工は卽ち干將是れなり、故事自ら顯はる。雪竇頌し了つて、末後に顯出して道ふ、「別別」と。也た妨げず奇特なり、別に好處有り、尋常の劒と同じからず。且く道へ、如何なるか是れ別處。「珊瑚枝枝月を撐著す。」謂つ可し光前絕後、獨り寰中に據つて、更に等匹無し、畢竟如何。諸人頭落ちぬ、老僧更に一小偈有り。

萬斛舟に盈ちて手に信せて拏く、卻つて㋙一粒に因つて甕蛇を呑む、百轉の舊公案を拈提して、時の人の幾眼沙をか㋚撒卻す。

國譯佛果圜悟禪師碧巖錄卷第十　終

㋐鑄も亦磨なり。
㋙鈔に云く、「古詩に、將に謂へり蛇甕を呑むと。卻つて是れ甕蛇を呑む、恐らくは蜀川の椰諺か。其の意、著する所有るに因つて、則ち貪る所小なりと雖も、蛇甕中に墮して出づること能はざるなり云云。」
㋚撒は當に撩に作るべし、撩散なり。

後序

雲竇の頌古百則、叢林學道の㋑詮要なり。其の間、譬を經論或は儒家文史に取つて、以て此の事を發明す。具眼の宗匠、時に後學の爲に、擊揚剖析するに非ずんば、則ち以て之を知ること無けん。

圜悟老師成都に在せし時、予諸人の與に、其の說を請益す。師後に夾山道林に住す、復た學徒の之を扣くが爲に、凡そ三たび宗綱を提ぐ。語は不同なりと雖も、其の旨は一なり。門人掇うて之を錄すること既に二十年、師未だ嘗て過つて焉を問はざるに、四方に流傳して、或は㋒踏駁を致す。諸方且く其の言に因つて、其の道を以て之を尋繹すること能はず。而るを妄りに改作すること有らば、則ち此の書遂に廢せん。學者幸に其の傳を謬かにせよ。

㋒宣和乙巳春暮㋓上休　㋔刃牟人㋕闕友無黨記す

㋑詮は「說文に具なり、具に寡理を說くを謂ふ、」要は增讀に「樞要なり。」
㋒踏は乖なり、駁は亂なり。
㋓宣和は宋の徽宗の年號、乙巳は其の第七年なり。
㋔上休は、上旬の休日なり、六典に云く、「內外の官吏、則ち暇寧の館有り、」註に「旬每に一日なり。」
㋔牟の字二說あり、解の扁を省くとなすもの、牟の誤りとなすもの、何れか是なるを知らず、皆縣の名なり。
㋕闕は姓なり、風俗通に「闕の令喜が後なり。」

重ねて圜悟禪師の碧巖集を刊る疏

雪竇の頌古百則、圜悟重ねて注脚を下す、叢林に單示して、永く宗旨を垂るる㋑經なり。學人機鋒捷出、大慧密室に勘辨して、實詣無きことを知つて、梓を毀つて傳へざるは㋺權なり。此の書は諸佛の正眼、列祖の大機、㋩兩たび鉗鎚を經て、一も瑕纇無し。㋥茲に大慧の長書と鷲を並べ、㋭圜悟の心要と同じく兼ね行せんことを欲す。杲日を迷途に揭げ、南鍼を惠海に指す。快然として一覩せば、彼の群愚を開かん。相與に圓成せば、利益無きにあらず。幸甚。

右伏して以れば、十七歲にして便ち雲門睦州を悟る。道つ可し是れ口頭の三昧なりと。㋬二百年碧巖雪竇を見ず、忽ち渠が手下の㋣一幸に遭ふ。怎んか㋟弓冶裘箕を忘じ得ん。兒孫の種草を斷卻すること莫れ、人に隨つて脚跟後に去つて轉せば、誰か龍を釣る鈎を下し得ん。箇の眼目を具する底有つて來らんには、看て繫驢橛と作さず。此の事當に㋯筏喩の如くなるべし。他時自ら會し㋷筌忘せば、家家の門戶長安に透る。前者呼び後者應す、種種の因緣大數に歸す。昔は廢し今は興す、惟むこと莫れ、山僧口多きことを。終に是れ老婆心切なり。東土の書を讀まずんば安んぞ西來の意を知らん。重ねて一代の宗風を興す。㋻南去の鴈無しと雖も、北來の魚を看取せよ。便ち十分の㋼消息有り。㋽同文の印を持して、㋾無盡燈を續がん。謹んで疏す。

今月　日疏

㋑經は道の常なり。
㋺權は道の變なり。
㋩圜悟纂集し、大慧焚毀するを謂ふ。
㋥大慧書は、禁然の錄する所なり。
㋭圜悟心要は、干文の編する所なり。
㋬會元十九に云く、「大慧十七にして薙髮毘尼ん具す、偶ま古靈門錄を閱して、悅ぶこと舊習の如し。」年譜に、便ち雲門、睦州の說話を喜ぶの一節あり。
㋣幻住曰く、圜悟、碧巖を述べ、普照序を作る、高宗紹炎二年より、方回序を作る、成宗大德四年に至る、拋べて百七十三年を得たり、今は其の大數を舉ぐるのみ。
㋟古本に一交に作る從ふべし。
㋠書言故事第一に云く、「祖父の所業を承くるを、箕裘の業と謂ふ、」記に「良冶の子は、必ず裘を爲ることを學ぶ。良弓の子は、必ず箕を爲ることを學ぶ。」
㋯筏喩經に云く、「若し筏喩を解する者は、善法尙ほ捨つ、何ぞ況んや不善の法をや、若し川を濟らんと欲せば、先づ應に筏を取るべし、彼岸に至れば已に之を捨て去る。」
㋷莊子外物篇に云く、「筌は魚に在る所以ん、魚を得て筌を忘る、云云。」言は意に在る所以ん、意を得て言を忘る、吾れ安ぞ夫の忘言の人を得て、之と言はんかな、筌は魚を捕ふる器なり。
㋻章逭、杜子美に寄する詩に曰く、「相憶ふて南雁無し、何の時か報書有らん。」杜子美之に酬いて曰く、「南過の雁無しと雖も、北來の魚を看取せよ。」
㋼消息は音信なり。
㋽中庸に云く、「今天下車、軌を同じうし、書、文を同じうし、行、倫を同じうす。」
㋾維摩經に云く、無盡燈とは、譬へば、一燈の百千燈を然すが如し、冥き者皆明にして、明終に盡きず。

圜悟老祖夾山に居せし時、此の書を集成す。天下後世、佛祖の玄奥有ることを知らしめんことを欲す、豈に小補ならんや。㋑老妙喜深く學者の道に根かずして、知解に溺るゝことを患ふ。是に由つて之を毀る。其の父子の間㋺矛盾すと謂はば可ならんや。今嶋中の張居士、重ねて爲に板行す、果して何の謂ぞや。覽ん者宜しく自ら擇ぶべし。㋩大德壬寅中秋、天童に住する㋥第七世法孫比丘、㋭淨日拜手謹書す。

㋑老妙喜は、卽ち大慧なり、南嶽下十五世圓悟勤の法嗣、會元十九、明高僧傳第五に傳あり。釋の宗杲大慧と號す、妙喜庵に居するに因つて、又妙喜と號す。

㋺今の人言相副はざるを謂つて矛盾と曰ふ、楚人矛と盾とを鬻ぐ者有り、之を譽めて曰く、「吾が盾の堅きこと能く陷ること莫し」、又其の矛を譽めて曰く、「吾が矛の利なること、物に於て陷れずと云ふこと無し」と、或る人曰く、「子が矛を以て、子が盾を陷らば如何」、其の人應ずること能はず。

㋩大德は卽ち大元成宗の年號、壬寅は其の第六年なり。

㋥圓悟第七世なり、圓悟、虎丘、應庵、密庵、破庵、無準、東岩。

㋭淨日は、南嶽下二十一世西岩慧の法嗣。增集續傳燈第五に、四明天童東岩淨日禪師とあり。山庵雜錄上の五十二（本叢書第一卷の山庵雜錄上の三七十頁）に東岩和尚の事錄あり。

圜悟禪師、雪竇和尚の頌古一百則を評唱す。玄微を剖決し、幽邃を抉剔して、列祖の機用を顯し、後學の心源を開く。況んや妙智虛凝にして、神機默運、晶旭輝いて玄扃洞照し、圓蟾升つて幽室朗朗なり、豈に淺識にして能く極に致らんや。後、大慧禪師、學人の入室、下語頗る異なるに因つて之を疑ふ。纔かに勘して邪鋒自ら挫く。㋑再鞠して㋺欵を納る。自ら降つて曰く、「我れ碧巖集の中より記し來る、實に悟有るに非ず」と。因つて其の後根本を明めず、專ら語言を尙んで以て㋩口捷を圖らんことを慮る。是に由つて之を火いて以て斯の弊を救ふ。然も此の書を成し、此の書を火く、其の用心は則ち一なり、豈に二有らんや。嶋中の張明遠、偶寫本の後冊を獲、又雪堂の刊本及び蜀本を獲て、訛舛を校訂し、此の書を刊成して、萬古に流通す。上根大智の士をして、一覽して頓に本心を開き、直に無疑の地に造らしむ、豈に小補と云はんや。㋥延祐丁巳迎佛會の日、徑山住持比丘㋭希陵拜書して以て後序と爲す。

㋑鞠は罪人を窮理するなり。

㋺欵は白狀なり。

㋩史記に「豈に此の齒夫の讒讒として、利に捷給なるに數はんや。」

㋥延祐は大元仁宗の年號、丁巳は其の第四年なり。

㋭希陵は南嶽下二十一世仰山欽の法嗣、續燈錄第四に傳あり。又山庵雜錄（本叢書第一卷山庵雜錄下六十二頁）に虛谷和尚の事錄あり、虛谷は字なり。

儒門の ㊀子貢は極めて ㊁東家の聖人に功有り。藉令ひ良馬の鞭影を見て奔るも、皆後の顏子に瞠若たるが如し。吾が ㊂聖師何言の天に遊ぶこと久し、靈山會上、四衆海集す。世尊拈華の宗旨、諸人措くこと罔し。獨り迦葉尊者のみ、微しく之が爲に破顏す。吾が教中 ㊃一唯の外、口耳俱に喪すると同一にして、頓徹懸悟せり。當時曾參、直下に ㊄忠恕の秘鑰を剖擊せずんば、豈に惟だ門人の惑滋甚だしきのみならんや。千載の下、何を以てか一貫の迷雲を祛けんや。異時成都の佛果圜悟老禪、夾山の丈室を笏して、雪竇の頌古百則を拈提す。其の大弟子果上座、學人言句に泥み、從上の諸祖に辜負せんことを懼れ、老和尚の舌頭を取つて、一截に併せて烈焰に付して、煙して之を拉摧堆に颺ぐ。自ら以るに ㊅巨壑太虛、毫滴を投置し、㊆古德德山、油糕を賣弄する婆前に、此の疏鈔已に埃して冷かにして餘り無きが如し。㊇野火燒けども盡きず、春風吹いて又生ず。花碧巖に落ちて陽陂繡するが如し。過去劫を歷て、死灰復た然ゆ。知らず何許ぞ、許多の葛藤。一一巉中の張居士、手から栽うる無影樹子の上より、全體敗露す。直に得たり ㊈般若無說、諸天花を雨ふらすことを。㊉百七八十年、衲僧鬱地に橫に鼻孔を穿たれて、從前曾て嗅がざる底の寶熏、一旦水の如く湧き雲の如く蒸す。八萬四千の毛孔に於て、悉く普く悉く徧し。謂つ可し甚深希有、難値難遇の事なりと。已にして居士の二子心疾を得たり。或は謂ふ「勤寶の經、果上座板を爇く、居士當に遺燼を拾ふべからず。而るに日月光景の故に、是の如きの報を受く」と。居士なる者其の說を疑ひ、以て予に質す。予謂へらく、圜悟の門人人人而も果上座なりとも、碧巖は自ら碧ならん、何ぞ說有ることを得ん。果上座 ㊋月を見て指を亡ず、遂に乃ち古佛を追尤して、毒燎天に亘る。 ㊌刹竿を倒卻して、一綫を放さず、彼れ未だ嘗て月を識らざる者なり、誰か將に一指に乘じて之を示さん。或者又謂ふ、「果上座此の書を火いて、之を社鬼に盟ふものは深重なり。居士の二子の患正に此に ㊍坐す。」予謂らく、果上座灼然として、炬を秉る時に當つて、故紙を煉り得て通紅なり、何に緣つてか密室に風を通せん。㊎老勤巴命門舌根、別に自ら壞せざる處有らん。一星迸り散す明月空山、張居士那裏よりか這の消息を得來る。天然一段西蜀の錦機を把つて、舊に依つて舊日の花樣を織り作す。意ふに主林神、陰に之が地を爲して、㊏訶護今に至るか、亦

㊀子貢は孔子の高弟なり。
㊁家語に、魯人孔子は聖人なることを知らず、乃ち曰く、「彼の東家の丘は吾れ之を知れり。」
㊂論語陽貨篇に、子曰く、「予れ言ふこと無からんと欲す。」子貢曰く、「子若し言はずんば、則ち小子何をか述べん。」子曰く、「天何をか言ふや、四時行れ、百物成る、天何をか言ふや。」聖師は海衆、孔子を指して謂ふ。
㊃論語里仁篇に、子曰く、「參や、吾が道は一以て之を貫く。」曾子曰く、「唯」、註に參は曾子の名、唯は應ずることの速かにして疑無きなり。
㊄子出づ、門人問うて曰く、「何と謂ふことぞや。」曾子曰く、「夫子の道は忠恕なるのみ。」註に、己を盡す之を忠と謂ひ、己を推す之を恕と謂ふ。
㊅以下、餘り無きが如しに至る、第四則に見ゆ。
㊆傳燈德山の章に云く、大中の初め武陵の大守薛廷望、再び德山の精舍を崇んで、古德禪院と號す、相國裴休額を題す、見に存す。
㊇白樂天が詩に、「成陽原上の草、一歲一枯榮、野火燒けども盡きず、春風吹いて又生ず。」
㊈以下、花を雨らすに至る、第六則に見えたり。
㊉大慧書を燬いてより、張氏重刊に距るまでを謂ふ。
㊋三教老人の序に記す。
㊌三教老人の序に記す。
㊍大學指南に云く、罪相違なる有り之を坐と謂ふ。
㊎老勤は圜悟を謂ふ。巴は蜀の鄕號。
㊏退之の文に、鬼神守護して、不祥を呵禁す。

是れ此の書の世に出づべき因緣時節か。㋐清涼池上に㋑針芥相逢ふ。則ち書寫讀誦し、人の爲に演說するの功すら、應に殊勝の福德を獲べし。何ぞ況んや金石に刻鏤し展轉流布せんをや。居士二子の心疾の根本、本此に在らず、客作の漢、妄に情識を以て卜度す。居士其の目前計拔するに足らざるの禍福に緣つて、亦情識を以て之を卜度せば、是れ相隨つて火坑に赴くなり、豈に寃あらざらんや。冥驗記に、沛國の周氏、三子並に瘖す。一日客有り門に造つて曰く、「君內に宿愆を省す可し」と。忽ち猛憶するに、兒たりし時、燕窠の三子を見て、其の母の出づるを伺ひ、各一の蒺藜を以て之を呑ましむ。斯須にして共に斃る、母還つて悲鳴して去る、常に自ら悔責す。客曰く、「君既に悔責することを知らば、罪今免れん。」三子卽ち皆能く言ふ。然らば則ち居士二子の風を病み心を喪す、亦悔恨す可きの事有ること無きことを得んや。般若を談ずる者、㋒若し人の爲に輕賤せらるれば、是の人先世の罪業、應に惡道に墮すべきに、今世の人に輕賤せらるを以ての故に、先世の罪業卽ち爲に消滅す。居士能く此に於て省有らば縱ひ無始劫來所造の諸業も、當に時に應じて消滅すべし。卽ち君が二子の心疾、當に周氏が三子の、時に應じて能く言ふが如くなるべし、以て疑はざる可し。世尊住世、四十九年、六百函の文字、徧界を覆藏す。若し杲上座の說に從はゞ、㋓萬年一念、更に踪跡を留めて作麼せん。向上の禪林、限り無き尊宿、兩句有り、最も端的なり、曰く、「㋔任あれ卽心卽佛、我れは但だ非心非佛。」今よりして後、如來の正法輪を謗る者有らば、君但だ之に應へて曰へ、「任あれ汝杲上座底是と說くことを、我れは只だ勤老師底是と說かん」と。若し是の如くならずんば、卽ち恐らくは、面門を燎卻して、四百四病一時に發せん。將た居士の二子の心疾を如何。見ずや古人道く、「子を養ふて方に父母の恩を知る」と。居士佛を學び恩を知る、老に臨んで懺悔せば、他日作家の爐鞴、丈六の金身を跳出せしめん。知らず還つて勤老師眞箇揚眉竪拂を見るや否や。若し還つて一句に薦得せば、向つて道はん、「佛祖誓有り、罪重科せず、殃他家の兒孫に及ぶこと莫くんば好し。」然も是の如くなりと雖も、且得沒交涉。是れ年延祐丁巳㋕中元の日、㋖海粟老人馮子振題す。

㋐玄義第二に、是の乘に乘じて、清涼池に入る。

㋑圓覺小鈔に云く、經に說く、佛、迦葉に問ふ、「兜率天より一芥子を擲し、閻浮提に於て一針鋒を竪てゝ、芥子をして針鋒に投ぜしむ、此の事難きや易きや、」迦葉答へて言く、「甚だ難しと爲す、」佛の言く、「正因正緣相値遇することを得ること、更に此れより難し。」

㋒此の緣第九十七則に見えたり。

㋓三祖信心銘に、一念萬年。

㋔傳燈第七、大梅常禪師の章に大寂、師の住山するを聞いて、乃ち一僧をして到りて問はしめて云く、「和尚馬師に見えて、箇の什麼を得てか、便ち此の山に住す、」師云く、「馬師我に向つて道ふ、卽心是佛と、我れ便ち這裏に向つて住す、」僧云く、「馬師近日佛法別なり」、師云く、「作麼生か別なる、」僧云く、「近日又道ふ、非心非佛、」師云く、「這の老漢人を惑亂す、未だ了日有らず、任あれ非心非佛、我は只管卽心卽佛」と、其の僧還つて馬祖に擧似す、祖云く、「大梅子熟せり。」

㋕中元は七月十五日なり。

㋖佛法金湯編十六に云く、子振は攸州の人、自ら海粟居士と號す、其の章後、陳剛中と略ぼ同じ、剛中之を長敬す、子振天下の書に於て記せずと云ふ所無し、其の文を爲るに當つて、酒酣に耳熱し、侍史二三人に命じて、筆を潤して以て俟つ、子振疾書す、紙の多寡に隨つて頃刻に輒ち盡す。東坡が詩に頭を回して彭城を望めば、大海一粟を浮ぶ。海粟の號、蓋し此に本づくか。

佛果圜悟禪師碧巖錄卷第六

第五十一則

垂示云、纔有是非、紛然失心、不落階級、又無摸索、且道、放行卽是把住卽是、到這裏、若有一絲毫解路、猶滯言詮、尙拘機境、盡是依草附木、直饒便到獨脫處、未免萬里望鄉關、還搆得麽、若未搆得、且只理會箇現成公案、試擧看

【本則】擧、雪峰住庵時、有兩僧來禮拜。（作什麽、一狀領過。）峰見來、以手托庵門、放身出云、是什麽。（鬼眼睛、無孔笛、泥團有刺、如龍無足、似虎戴角。）僧亦云、是什麽。（泥彈子、氈拍板、箭鋒相拄。）峯低頭歸庵。（蛇有角、就中難爲措置。）僧後到巖頭。（也須是問過始得、同道方知。）頭問、什麽處來。僧云、嶺南來。（傳得什麽消息來、也須是通箇消息、還見雪峰麽。）頭云、曾到雪峯麽。（勘破了多時、不可道不到。）僧云、曾到。（實頭人難得、打作兩橛。）頭云、有何言句。（便恁麽去也。）僧擧前話。（一番重納敗闕。）頭云、他道什麽。（好劈日便打、失卻鼻孔了也。）僧云、他無語、低頭歸庵。頭云、噫、我當初悔不向他道末後句。（白浪滔天。）若向伊道、天下人不奈雪老何。（癡兒豪伴、不必、須彌也須粉碎、且道、他圈櫃在什麽處。）僧至夏末、再擧前話、

請益。已是不惺惺，正賊去了多時，賊過後張弓。頭云、何不早問。好與掀倒，禪床過也。僧云、未敢容易。這箇本是道僧喫穿，卻鼻孔停四長智，已是兩重公案。頭云、雪峯雖與我同條生，不與我同條死。漫天網地。要識末後句，只這是。覷一船人，我也不信，消乎分疎不下。

【評唱】大凡扶竪宗教，須是辨箇當機，知進退是非，明殺活擒縱，若忽眼目迷黎麻羅，到處逢問便問，逢答便答，殊不知鼻孔在別人手裏，只如雪峯巖頭同參德山，此僧參雪峯，見解只到恁麼處，及乎見巖頭，亦不曾成得一事，虛煩他二老宿，一問一答，一擒一縱，直至如今，天下人成節角誦訛，分疎不下，且道節角誦訛，在什麼處，雪峯雖遍歷諸方，末後於鵞山店，巖頭因而激之，方得勦絕大徹，巖頭後值沙汰，於湖邊作渡子，兩岸各懸一板，有人過敲板一下，頭云、儞過那邊，遂從蘆葦間，舞棹而出，雪峯歸嶺南住庵，這僧亦是久參底人，雪峯見來，以手托庵門，放身出云、是什麼，如今有底，恁麼問着，便去他語下，咬嚼，這僧亦怪，也只向他道，是什麼，峰低頭歸庵，往往喚作無語會，去也，這僧便摸索不着，有底道，雪峯被這僧一問，直得無語歸庵，殊不知，雪峯意有毒害處，雪峯雖得便宜，爭奈藏身露影，這僧後辭雪峯，持此公案，令巖頭判，既到彼巖頭問，什麼處來，僧云、嶺南來，頭云、曾到雪峯麼，若要見雪峯，只此一問，也好急着眼看，僧云、曾到，頭云、有何言句，此語亦不空過，這僧不曉，只管逐他語脈，轉頭云、他道什麼，僧云、他低頭無語歸庵，這僧殊不知，巖頭着草鞋，在他肚皮裏，行幾回了也，巖頭云、噫我當初悔不向他道，末後句，若向他道，天下人不奈雪老何，巖頭也是扶強不扶弱，這僧依舊黑漫漫地，不分緇素，懷一肚皮疑，眞箇道，雪峯不會，至夏末，再舉前話，請益巖頭，頭云、何不早問，這老漢，計較生也，僧云、未敢容易，頭云、雪峯雖與我同條生，不與我同條死，要識末後句，只這是，巖頭太煞不惜眉毛，諸人畢竟作麼生會，雪峯在德山會下，作飯頭，一日齋晚，德山托鉢下，至法堂，峯云、鐘未鳴鼓未響，這老漢托鉢向什麼處去，山無語低頭歸，方丈，雪峯舉似巖頭，頭云、大小德山，不會，末後句，山聞令侍者喚至，方丈，問云、汝不肯老僧那，頭密啓其語，山至來日上堂，與尋常不同，頭於僧堂前，撫掌大笑云、且喜老漢會，末後句，他後天下人不奈他何，雖然如是，只得三年，此公案中，如雪峯見德山無語，將謂得便宜，殊不知着賊了也，蓋爲他會着賊來，後來亦解做賊，所以古人道，末後一句始到牢關，有者道，巖頭勝雪峯，則錯會了也，巖頭常用此機示衆云、明眼漢沒窠臼，卻物爲上，逐物爲下，這末後句，設便親見祖師，來，也理會不得，德山齋晚，老子自捧鉢下法堂，去巖頭道，大小德山，末後句，在雪竇拈云，曾聞說，箇獨眼龍，元來只具一隻眼，殊不知，德山是箇無齒大蟲，若不是巖頭識破，爭知得昨日與今日不同，諸人要會末後句，麼，只許老胡知，不許老胡會，自古及今，公案萬別千差，如荊棘林相似，儞若透得去，天下人不奈何，三世諸佛，立在下風，儞若透不得，巖頭道，雪峯雖與我同條生，不與我同條死，只這一句，自然有出身處，雪竇頌云，

【頌】末後句。已在言前，將謂眞箇，覷着則瞎。爲君說。舌頭落也，說不着，有頭有尾，無尾無頭。明暗雙雙底時節。葛藤老漢，如牛無角，似虎有角，彼此是恁麼。同條生也共相知。是何種族，彼此沒交涉，君向瀟湘我向秦。不同條死還殊

絕。（拄杖子在我手裏、爭怪得山僧、開鼻孔爲什麼在別人手裏。）還殊絕。（還要喫棒麼、有什麼摸索處。）黃頭碧眼須甄別。（盡大地人亡鋒結舌、我也恁麼、他人卻不恁麼、只許老胡知、不許老胡會。）南北東西歸去來。（收、驢跟下猶帶五色線、在乞儞一條拄杖子。）夜深同看千巖雪。（猶較半月程、從他大地雪漫漫、塡溝塞壑無人會、也只是箇瞎漢、還識得末後句麼、便打。）

【評唱】末後句爲君說、雪竇頌此末後句、他意極有落草相爲、頌則煞頌、只頌毛彩些子、若要透見也未在、更敢開大口便道、明暗雙雙底時節、與儞開一綫路、亦與儞一句打殺了也、末後更與儞注解、只如招慶一日問羅山云、巖頭道、恁麼恁麼不恁麼不恁麼、意旨如何、羅山召云、大師、師應諾、山云、雙明亦雙暗、慶禮謝而去、三日後又問、前日蒙和尙垂慈、只是看不破、山云、盡情向儞道了也、慶云、和尙是把火行、山云、若恁麼據大師疑處問將來、慶云、如何是雙明亦雙暗、山云、同生亦同死、慶當時禮謝而去、後有僧問招慶、同生亦同死時如何、慶云、合取狗口、僧云、大師收取口喫飯、其僧卻來問羅山云、同生不同死時如何、山云、如牛無角、僧云、同生亦同死時如何、山云、如虎戴角、末後句、正是這箇道理、羅山會下有僧、便用這箇意致問招慶、慶云、彼此皆知、何故、我若東勝身洲道一句、西瞿耶尼洲也知、天上道一句、人間也知、心心相知眼眼相照、同條生也則猶易見、不同條死也還殊絕、釋迦達磨也摸索不著、南北東西歸去來、有些子好境界、夜深同看千巖雪、且道是雙明雙暗、是同條生是同條死、具眼衲僧試甄別看。

第五十二則

【本則】舉、僧問趙州、久響趙州石橋、到來只見略彴。（也有人來捋虎鬚、也是衲僧本分事。）州云、汝只見略彴、且不見石橋。（慣得其便、這老漢實身去也。）僧云、如何是石橋。（上釣來也、果然。）州云、渡驢渡馬。（一網打就、直得盡大地人、無出氣處、一死更不再活。）

【評唱】趙州有石橋、蓋李膺造也、至今天下有名、略彴者、卽是獨木橋也、其僧故意減他威光問他道、久響趙州石橋、到來只見略彴、趙州便道、汝只見略彴、且不見石橋、據他問處、也只是平常說話相似、趙州用去釣他、這僧果然上鈎、隨後便問、如何是石橋、州云、渡驢渡馬、不妨言中自有出身處、趙州不似臨濟德山、行棒行喝、他只以言句殺活、這公案好好看來、只是尋常鬪機鋒相似、雖然如是、也不妨難湊泊、一日與首座看石橋、州乃問首座、是什麼人造、座云、李膺造、州云、造時向什麼處下手、座無對、州云、尋常說石橋、問著下手處也不知、又一日州掃地次、僧問、和尙是善知識、爲什麼有塵、州云、外來底、又問、淸淨伽藍、爲什麼有塵、州云、又有一點也、又僧問、如何是道、州云、墻外底、僧云、不問這箇道、問大道、州云、大道透長安、趙州偏用此機、他到平實安穩處、爲人更不傷鋒犯手、自然孤峻用得此機、甚妙、雪竇頌云。

【頌】孤危不立道方高。（須是到這田地、始得人言草料。）入海還須釣巨鼇。（坐斷要津、不通凡聖、蝦蟆蝟蝶蚌不足問、大丈夫漢不可兩兩三三。）堪笑同時灌溪老。（也有恁麼人、曾恁麼來、也有恁麼用機關底手脚。）解云劈箭亦徒勞。（猶較半月程、似則似、是則未是。）

【評唱】孤危不立道方高、雪竇頌趙州尋常爲人處、不立玄妙不立孤危、不似諸方道打破虛空、擊碎須彌、海底生塵須彌鼓浪、方稱他祖師之道、所以雪竇道、孤危不立道方高、壁立萬仞、顯佛法奇特靈驗、雖然孤危峭峻、不如不立孤危、但平常自然轉轆轆地、不立而自立、不高而自高、機出孤危、方見玄妙、所以雪竇云、入海還須釣巨鼇、看他具眼宗師、等閑垂一語、用一機、不釣鰕蜆螺蚌、直釣巨鼇、也不妨是作家、此一句用顯前面公案、堪笑同時灌溪老、不見僧問、灌溪久響灌溪、及乎到來、只見箇漚麻池、溪云、汝只見漚麻池、且不見灌溪、僧云、如何是灌溪、溪云、劈箭急、又僧問黃龍、久響黃龍、及乎到來、只見箇赤斑蛇、龍云、子只見赤斑蛇、且不見黃龍、僧云、如何是黃龍、龍云、拖拖地、僧云、忽遇金翅鳥來時如何、龍云、恁麼則遭他食噉、去也、龍云、謝子供養、此總是立孤危、是則也是、不免費力、終不如趙州尋常用底、所以雪竇道、解云劈箭亦徒勞、只如灌溪黃龍、卽且致、趙州云、渡驢渡馬、又作麼生會、試辨看、

第五十三則

垂示云、徧界不藏、全機獨露、觸途無滯、着着有出身之機、句下無私、頭頭有殺人之意、且道、古人畢竟向什麼處休歇、試擧看。

【本則】擧、馬大師與百丈行次、見野鴨子飛過。兩箇落草漢、草裏一輕、爲顯作什麼。大師云、是什麼。和尚合知、這老漢鼻孔也不知。丈云、野鴨子。鼻孔已在別人手裏、只管供欵、第二杓惡水更潑。大師云、什麼處去也。前箭猶輕後箭深、第二回咀啄、也合自知。丈云、飛過去也。只管隨他後轉、當面蹉過。大師遂扭百丈鼻頭。父母所生鼻孔、卻在別人手裏、捩轉鎗頭一刻、轉鼻孔來也。丈作忍痛聲。只在這裏、這喚作野鴨子、得麼、還識痛痒麼。大師云、何曾飛去。莫瞞人好、這老漢元來只在鬼窟裏、作活計。

【評唱】正眼觀來、卻是百丈具正因、馬大師無風起浪、諸人要與佛祖爲師、參取百丈要自救不了、參取馬祖大師、看他古人、二六時中、未嘗不在箇裏、百丈卯歲離塵三學該練、屬大寂開化南昌、乃傾心依附、二十年爲侍者、及至再參、於喝下方始大悟、而今有者道、本無悟處、作箇悟門、建立此事、若恁麼見解、如獅子身中蟲自食獅子肉、不見古人道、源不深者流不長、智不大者見不遠、若用作建立會、佛法豈到如今、看他馬大師與百丈行次、見野鴨子飛過、大師豈不知是野鴨子、爲什麼卻恁麼問、且道、他意落在什麼處、百丈只管隨他後走、馬祖遂扭他鼻孔、丈作忍痛聲、馬祖云、何曾飛去、百丈便省、而今有底錯會、纔問著便作忍痛聲、且喜跳不出宗師家爲人須爲教徹、見他不會、不免傷鋒犯手、只要教他明此事、所以道、會則途中受用、不會則世諦流布、馬祖當時、若不扭住、只成世諦流布、也須是逢境遇緣、宛轉教歸自己、十二時中、無空缺處、謂之性地明白、若只依草附木、認箇驢前馬後、有何用處、看他馬祖百丈恁麼用、雖似昭昭靈靈、卻不住在昭昭靈靈處、百丈作忍痛聲、若恁麼見去、徧界不藏頭頭成現、所以道、一處透千處萬處一時透、馬祖次日陞堂、衆纔集、百丈出卷卻拜蓆、馬祖便下座、歸方丈、次問百丈、我適來上堂、未曾說法、儞爲什麼、便卷卻蓆、丈云、昨日被和尚扭得鼻孔痛、祖云、儞昨

日向甚處留心、丈云、今日鼻頭又不痛也、祖云、儞深知、今日事、丈乃作禮、卻歸、侍者寮哭、同事侍者問云、儞哭作什麼、丈云、儞去問馬祖、祖云、儞去問取他看、侍者卻歸寮問百丈、丈卻呵呵大笑、侍者云、儞適來哭、而今爲什麼卻笑、丈云、我適來哭、如今卻笑、看他悟後、阿轆轆地、羅籠不住、自然玲瓏、雪竇頌云。

【頌】野鴨子。成群作隊、又有一隻。知何許。用作什麼、如麻似粟。馬祖見來相共語。打葛藤、有什麼了期、說箇什麼、獨有馬祖識箇後底。話盡山雲海月情。東家杓柄長西家杓柄短、知他打葛藤多少。依前不會還飛去。因、莫道他不會言、飛過什麼處去。欲飛去。鼻孔在別人手裏、已是與他下注腳了也。卻把住。老婆心切、更道什麼。道道。什麼道、不可也、教山僧道、不可也。

【評唱】雪竇撈頭便頌道、野鴨子知何許、且道、有多少、馬祖見來相共語、此頌、馬祖問百丈云、是什麼、丈云、野鴨子、語盡山雲海月情、頌、再問百丈、什麼處去、馬大師爲他意旨、自然脫體、百丈依前不會、卻道、飛過去也、兩重蹉過、欲飛去、卻把住、雪竇據欵結案、又云、道道、此是雪竇轉身處、且道、作麼生道、若作忍痛聲則錯、若不作忍痛聲、又作麼生會、雪竇雖然頌得甚妙、爭奈也跳不出。

第五十四則

垂示云、透出生死、撥轉機關、等閑截鐵斬釘、隨處蓋天蓋地、且道、是什麼人行履處、試舉看。

【本則】舉、雲門問僧、近離甚處。不可也道西禪、探半影、草不可道東西南北。僧云、西禪。果然可煞、實頭當時、好與本草料。門云、西禪近日有何言句。欲學恐驚和尚、深辨來風也似和尚相似寐語。僧展兩手。敗闕也、了、勾說破家、不妨令人疑著。門打一掌。據令而行、好打快便難逢。僧云、某甲話在。儞待要翻欵、那卻似有攙旗奪鼓底手脚。門卻展兩手。檢、駕與青龍不解騎。僧無語。惜可。門便打。不可放過、此棒合是雲門喫、何故、當斯不斷、返招其亂、闍黎合喫多少、放過一著、著不放過、合作麼生。

【評唱】雲門問這僧、近離甚處、僧云、西禪、這箇是當面話、如閃電相似、門云、近日有何言句、也只是平常說話、這僧也不妨是箇作家、卻倒去驗雲門、便展兩手、若是尋常人、遭此一驗、便見手忙脚亂、他雲門有石火電光之機、便打一掌、僧云、打卽故是、爭奈某甲話在、這僧有轉身處、所以雲門放開、卻展兩手、其僧無語、門便打、看他雲門、自是作家、行一步知一步落處、會瞻前亦解顧後、不失蹤由、這僧只解瞻前不能顧後、頌云。

【頌】虎頭虎尾一時收。殺人刀活人劍、須是這僧始得、千兵易得、一將難求。凜凜威風四百州。坐斷天下人舌頭、蓋天蓋地。卻問、不知何太嶮。不可言、伽藍棒、雪竇元來未知在、闍黎相次著也。師云、放過一着。若不放過、又作麼生、盡天下人一時落節、擊禪床一下。

【評唱】雪竇頌得此話、極易會、大意只頌雲門機鋒、所以道、虎頭虎尾一時收、古人云、慊虎頭、

收虎尾、第一句下明宗旨、雪竇只據款結、案愛雲門會、據虎頭、又能收虎尾、僧展兩手、門便打、是據虎頭、雲門展兩手、僧無語、門又打、是收虎尾、頭尾齊收、眼似流星、自然如擊石火、似閃電光、直得凜凜威風四百州、直得盡大地世界風颯颯地、卻問、不知何太嶮、不妨有嶮處、雪竇云、放過一著、且道、如今不放過時、又作麼生、盡大地人、總須喫棒、如今禪和子、總道、等他展手時、也還他本分草料、似則也似、是則未是、雲門不可只恁麼教儞休、也須別有事在。

第五十五則

垂示云、穩密全眞、當頭取證、涉流轉物直下承當、向擊石火閃電光中、坐斷誦訛、於據虎頭收虎尾處、壁立千仞、則且置、放一線道、還有爲人處也無、試舉看。

【本則】舉、道吾與漸源至一家弔慰、源拍棺云、生邪死邪。道什麼、好不惺惺、這滄猶在兩頭。吾云、生也不道、死也不道。龍吟霧起、虎嘯風生、買櫃相頭、老婆心切。源云、爲什麼不道。蹉過了也、果然錯會。吾云、不道不道。恩水驀頭澆、前箭猶輕、後箭深。回至中路。太慢慢。源云、和尚快與某甲道、若不道打和尚去也。卻較些子、罕逢穿耳客、多遇刻舟人、似這較不唧唧漢、入地獄如箭。吾云、打即任打、道即不道。再三須重事、就身打劫、這老漢滿身泥水、初心不改。源便打。好打、且道、打他作什麼、風棒元來有人喫在。後道吾遷化、源到石霜、舉似前話。知而故犯、不知是不是、是則也大奇。霜云、生也不道、死也不道。可惜新鮮、這較棄飯卻元來有人喫。源云、爲什麼不道、路雖一較寬、無兩種、且道、與前來問是同是別。霜云、不道不道。天上天下、曹溪波浪如似、無風平相人被陸沈。源於言下有省。諸漢、且莫瞞山僧好。源一日將鍬子、於法堂上、從東過西、從西過東。也是死中得活、好與先師出氣、莫問他、且看這漢一場懊惱。霜云、作什麼。聽後、賣藥袋、悔數也。源云、覓先師靈骨。喪車背後、不慌不忙、當初、儞道什麼。霜云、洪波浩渺白浪滔天、覓什麼先師靈骨。也須遷他作家始得、成群作隊作什麼。雪竇着語云、蒼天蒼天。太遲生、誠過後蛩弓、好與一坑埋卻。源云、正好着力。且道、落在什麼處、先師曾向儞道什麼、這漢從頭到尾、直至如今出身不得。太原孚云、先師靈骨猶在。大衆見麼、閃電相似、是什麼破草鞋、猶較些子。

【評唱】道吾與漸源至一家弔慰、源拍棺木云、生邪死邪、吾曰、生也不道、死也不道、若向句下便入得、言下便知歸、只這便是透脫生死底關鍵、其或未然、往往當頭蹉過、看他古人行住坐臥、不妨以此事爲念、纔至人家弔慰、漸源便拍棺問道吾云、生邪死邪、道吾不移易一絲毫、對他道、生也不道、死也不道、漸源當面蹉過、逐他語句走、更云、爲什麼不道、吾云、不道不道、吾可謂赤心片片、將錯就錯、源猶自不惺惺、回至中路、又云、和尚快與某甲道、若不道打和尚去也、這漢識什麼好惡、所謂好心不得好報、道吾依舊老婆心切、更向他道、打即任打、道即不道、源便打、雖然如是、卻是他贏得一籌、道吾恁麼血滴滴地爲他、漸源得恁麼不警地、道吾既被他打、遂向漸源云、汝且去、恐院中知事探得、與儞作禍、密遣漸源出去、道吾忒煞傷慈、源後來至

一小院。聞行者誦觀音經。云。應以比丘身得度者。卽現比丘身而爲說法。忽然大悟云。我當時錯怪。先師。爭知此事。不在言句上。古人道。沒量大人。被語脈裹轉卻。有底情解道。道吾云。不道不道。便是道了也。喚作打。背翻筋斗。教人摸索不著。若恁麼會。作麼生得平穩去。若腳踏實地。不隔一絲毫。不見七賢女。遊屍陁林。遂指屍問云。屍在這裹。人在什麼處。大姊云。作麼作麼。一衆齊證無生法忍。且道。有幾箇。千箇萬箇。只是一箇。漸源後到。石霜舉前話。石霜依前云。生也不道。死也不道。源云。爲什麼不道。霜云。不道不道。他便悟去。一日將鍬子。於法堂上。從東過西。從西過東。意欲呈己見解。霜果問云。作什麼。源云。覓先師靈骨。霜便截斷他腳跟云。我這裹洪波浩渺。白浪滔天。覓什麼先師靈骨。他旣是覓先師靈骨。石霜爲什麼卻恁麼道。到這裹。若於生也不道。死也不道處。言下薦得。方知自始至終。全機受用。儞若作道理擬議尋思。直是難見。漸源云。正好著力。看他悟後道得自然奇特。道吾一片頂骨如金色。擊時作銅聲。雪竇著語云。蒼天蒼天。其意落在兩邊。太原孚云。先師靈骨猶在。自然道得穩當。這一落索。一時拈向一邊。且道。作麼生是省要處。作麼生是著力處。不見道一處透。千處萬處一時透。若向不道不道處透得去。便乃坐斷天下人舌頭。若透不得。也須是自參自悟。不可容易過日。可惜許時光。雪竇頌云。

【頌】兎馬有角。斬。可煞奇特。可煞新鮮。牛羊無角。斬。成什麼模樣。瞞別人。卽得。絕毫絕氂。天上天下。惟我獨尊。儞向什麼處。摸索。如山如嶽。在什麼處。平地起波瀾。堅著儞鼻孔。黃金靈骨今猶在。截卻舌頭。塞卻咽喉。拈向一邊。只恐無人識得。白浪滔天何處着。放過一着。踏下跟。過。眼裏耳裏著不得。無處着。果然。却較些子。果然沒溺深坑。隻履西歸曾失卻。組調不了。累及兒孫。打云。爲什麼卻在這裹。

【評唱】雪竇偏會下。注腳。他是雲門下兒孫。凡一句中。具三句底鉗鎚。向難道處。道破。向撥不開處。撥開。去他緊要處。頌出。直道。兎馬有角。牛羊無角。若透得前話。始知雪竇有爲人處。有者錯會道。不道便是道。無句是有句。兎馬無角。卻云有角。牛羊有角。卻云無角。且得沒交涉。殊不知。古人千變萬化。現如此神通。只爲打破儞這精靈鬼窟。若透得去。不消一箇了字。兎馬有角牛羊無角。絕毫絕氂。如山如嶽。這四句。似摩尼寶珠一顆相似。雪竇渾淪地吐在儞面前了也。末後皆是據欵結案。黃金靈骨今猶在。白浪滔天何處着。此頌石霜與大原孚語。爲什麼無處着。雙履西歸曾失卻。靈龜曳尾。此是雪竇轉身爲人處。古人道。他參活句。不參死句。旣是失卻。他一火爲什麼卻競頭爭。

第五十六則

垂示云。諸佛不曾出世。亦無一法與人。祖師不曾西來。未嘗以心傳授。自是時人不了。向外馳求。殊不知自己腳跟下。一段大事因緣。千聖亦摸索不着。只如今見不見。聞不聞。說不說。知不知。從什麼處得來。若未能洞達。且向葛藤窟裹會取。試舉看。

【本則】擧。良禪客問欽山。一鏃破三關時如何。嗔。不妨奇特。不妨是箇猛將。山云。

放出關中主看。劈面來也、也要大家知、主山高按山低。良云、恁麼則知過必改。見機而作、已落第二頭。山云、更待何時。一風有擒有縱、行草隨。良云、好箭放不着所在便出。果然、擬待翻款、那第二棒打人。山云、且來閣黎。呼則易諾、則難、喚得回頭堪作什麼。良回首。果然把不住、由也。山把住云、一鏃破三關即且止、試與欽山發箭看。虎口裏橫身、逆水之波、見義不爲無勇也。良擬議。果然摸索不着、打云、可惜許。山打七棒云、且聽這漢疑三十年。合合恁麼、有始有終、頭正尾正、這箇棒合是欽山喫。

【評唱】良禪客、也不妨是一員戰將、向欽山手裏、左盤右轉、墜鞭閃鐙、末後可惜許、弓折箭盡、雖然如是、李將軍自有嘉聲在、不得封侯、也是閑、這箇公案、一出一入、一擒一縱、當機覿面提、覿面當機、疾、都不落有無得失、謂之玄機、稍虧些子力量、便有顛蹶、這僧亦是箇英靈底衲子、致箇問端、不妨驚群、欽山是作家宗師、便知他問頭落處、鏃者箭鏃也、一箭射透三關時如何、欽山意道、儞射透得則且置、試放出關中主看、良云、恁麼則知過必改、也不妨奇特、欽山云、更待何時、看他恁麼祗對、欽山所問更無些子空缺處、後頭良禪客卻道、好箭放不着所在、拂袖便出、欽山纔見他恁麼道、便喚云、且來閣黎、良禪客果然把不住、便回首、欽山擒住云、一鏃破三關則且止、試與欽山發箭看、良擬議、欽山便打七棒更隨後、與他念一道咒云、且聽這漢疑三十年、如今禪和子、盡道、爲什麼不打八下、又不打六下、只打七下、不然等他問道、試與欽山發箭看、便打、似則也似、是則未是在、這箇公案、須是胷襟裏不懷些子道理計較、超出語言之外、方能有一句下破三關、及有放箭處、若存是之與非、卒摸索不著、當時這僧、若是箇漢、欽山也大嶮、他既不能行此令、不免倒行、且道、關中主畢竟是什麼人、看雪竇頌云。

【頌】與君放出關中主。中也、當頭蹉過、遇後遇後。放箭之徒莫莽鹵。一死不再活、一大誑說、過了。取箇眼兮耳必聾。左眼半斤、放過一着、左邊不前右邊不後。捨箇耳兮目雙瞽。右眼八兩、只得一路、進前則墮、坑落、墮、退後則虎、衝、卻。可憐一鏃破三關。全機恁麼來時如何、道什麼、破也墮也。君不見。彌兄來伴、打去也。見麼。玄沙有言兮。那箇不是玄沙。大丈夫先天爲心祖。一句一載流萬機寢削、鼻孔在我手裏、未有天地世界已前、在什麼處、安身立命。

【評唱】此頌數句、取歸宗頌中語、歸宗昔日因作此頌、號曰歸宗、宗門中謂之宗旨之說、後來同安聞之云、良公善能發箭、要且不解中的、有僧便問、如何得中的、安云、關中主是什麼人、後有僧舉似欽山、山云、良公若恁麼、也未免得欽山口、雖然如是、同安不是好心、雪竇道、與君放出關中主、開眼也着、合眼也着、有形無形盡斬爲三段、放箭之徒莫莽鹵、若善能放箭則不莽鹵、若不善放則莽鹵可知、取箇眼兮耳必聾、捨箇耳兮目雙瞽、且道、取箇眼爲什麼、卻耳聾、捨箇耳爲什麼、卻雙瞽、此語無取捨、方能透得、若有取捨則難見、可憐一鏃破三關、的的分明箭後路、良禪客問、一鏃破三關時如何、欽山云、放出關中主看、乃至末後同安公案、盡是箭後路、畢竟作麼生、君不見、玄沙有言兮、大丈夫先天爲心祖、尋常以心爲祖宗、極則這裏爲什麼、卻

於天地未生已前、猶爲此心之祖、若識破這箇時節、方識得關中主、的的分明箭後路、若要中的、箭後分明有路、且道、作麼生是箭後路、也須是自着精彩始得、大丈夫先天爲心祖、玄沙常以此語示衆、此乃是歸宗有此頌、雪竇誤用爲玄沙語、如今參學者、若以此心爲祖宗、參到彌勒佛下生、也未會在、若是大丈夫漢、心猶是兒孫、天地未分、已是第二頭、且道、正當恁麼時、作麼生是先天地。

第五十七則

垂示云、未透得已前、一似銀山鐵壁、及乎透得了、自己元來是鐵壁銀山、或有人問、且作麼生、但向他道、若向箇裏露得一機看得一境、坐斷要津、不通凡聖、未爲分外、苟或未然、看取古人樣子。

【本則】舉、僧問趙州、至道無難、唯嫌揀擇、如何是不揀擇。這鐵漢、多少人吞不得、大有人疑着在、滿口含霜。州云、天上天下唯我獨尊。平地上起骨堆、衲僧鼻孔一時穿卻、金剛圈鐵券。僧云、此猶是揀擇。果然隨他轉了也、拶着道老漢。州云、田厙奴、什麼處是揀擇。山高石裂。僧無語。故彌三十棒、直得口眼歪斜。（厙式夜切、音舍。）

【評唱】僧問趙州、至道無難、唯嫌揀擇、三祖信心銘劈頭便道、這兩句、有多少人錯會、何故、至道本無難、亦無不難、只是唯嫌揀擇、若恁麼會、一萬年也未夢見在、趙州常以此語問人、這僧將此語、倒去問他、若向語上覓、此僧卻驚天動地、若不在語句上、又且如何、更參三十年、這箇些子關捩子、須是轉得始解、捋虎鬚也須是本分手段始得、這僧也不顧危亡、敢捋虎鬚便道、此猶是揀擇、趙州劈口便塞道、田厙奴、什麼處是揀擇、若問著別底便見腳忙手亂、爭奈這老漢是作家、向動不得處動、向轉不得處轉、彌若透得一切惡毒言句、乃至千差萬狀世間戲論、皆是醍醐上味、若到着實處、方見趙州赤心片片、田厙奴乃福唐人鄉語、罵人似無意智相似、這僧道、此猶是揀擇、趙州道、田厙奴、什麼處是揀擇、宗師眼目、須至恁麼、如金翅鳥擘海直取龍吞、雪竇頌云、

【頌】似海之深。是什麼度量、淵源難測也、未得一半在。如山之固。什麼人鑿得、猶在半途。蚊蝱弄空裏猛風。也有恁麼底、果然不一、料力可煞不自量。蝼蟻撼於鐵柱。同坑無異土、且得沒交涉、闇裏與他同參。揀兮擇兮。增水河頭賣、道什麼、趙州來也。當軒布鼓。已在言前、一坑埋卻、如麻似粟、打云、塞卻儞咽喉。

【評唱】雪竇注兩句云、似海之深、如山之固、僧云、此猶是揀擇、雪竇道、這僧一似蚊蝱弄空裏猛風、蝼蟻撼於鐵柱、雪竇賞他膽大、何故、此是上頭人用底、他敢恁麼道、趙州亦不放他、便云、田厙奴、什麼處是揀擇、豈不是猛風鐵柱、揀兮擇兮、當軒布鼓、雪竇末後提起教活、若識得明白、十分儞自將來了也、何故不見道、欲得親切莫將問來問、是故當軒布鼓。

第五十八則

【本則】舉、僧問趙州、至道無難、唯嫌揀擇、是時人窠窟否。兩重公案、也是疑人處、諸禪師秤鎚硬似鐵、猶有這箇在、莫以己妨人。州云、曾有人問我、直得五年分疎不下。面赤不如語直、胡孫喫毛蟲、蚊子咬鐵牛。

【評唱】趙州平生、不行棒喝、用得過於棒喝、這僧問得來也甚奇怪、若不是趙州、也難答伊、蓋趙州是作家、只向伊道、曾有人問我、直得五年分疎不下、問處壁立千仞、答處亦不輕、他只恁麼會直是當頭、若不會、且莫作道理計較、不見投子宗道者、在雪竇會下、作書記、雪竇令參至道無難、唯嫌揀擇、於此有省、一日雪竇問他、至道無難、唯嫌揀擇、意作麼生、宗云、畜生畜生、後隱居投子、凡去住持、將袈裟裹草鞋、與經文、僧問、如何是道者家風、宗云、袈裟裹草鞋、僧云、未審意旨如何、宗云、赤脚下桐城、所以道、獻佛不在香多、若透得脫去、縱奪在我、既是一問一答、歷歷現成、爲什麼趙州卻道、分疎不下、且道、是時人窠窟否、趙州在窠窟裏答他、在窠窟外答他、須知此事、不在言句上、或有箇漢、徹骨徹髓、信得及去、如龍得水、似虎靠山、頌云、

【頌】象王嚬呻。富貴中之富貴、誰人不慊然、好箇消息。獅子哮吼。作家中作家、百獸腦裂、好箇入路。無味之談。相罵饒伊接、鬻、饑、橫子相似、有什麼咬嚼處、分疎不下五年強、一葉舟中載大唐、渺渺兀然波浪起、誰知別有好思量。塞斷人口。相哮繞、獨淩水、噗、闇黎道甚麼。南北東西。有麼有麼、天上天下、蒼天蒼天。烏飛兎走。自古自今、一時活埋。

【評唱】趙州道、曾有人問我、直得五年分疎不下、似象王嚬呻、獅子哮吼、無味之談、塞斷人口、南北東西、烏飛兎走、雪竇若無末後句、何處更有雪竇來、既是烏飛兎走、且道、趙州雪竇山僧、畢竟落在什麼處、

第五十九則

垂示云、該天括地、越聖超凡、百草頭上指出涅槃妙心、干戈叢裏點定衲僧命脈、且道、承箇什麼人恩力、便得恁麼、試舉看、

【本則】舉、僧問趙州、至道無難、唯嫌揀擇。再運前來、道什麼、三重公案。纔有語言、白拈賊、贓馬、趂、賊。僧云、某甲只念到這裏。兩箇弄泥團漢、逢著一箇賊、捉根贓、敵手。州云、何不引盡這語。賊是小人、智過君子、難、唯嫌揀擇。畢竟由這老漢、發他換卻眼睛、捉賊了也。州云、只這至道無

【評唱】趙州道、只這至道無難、唯嫌揀擇、如擊石火、似閃電光、擒縱殺活、得恁麼自在、諸方皆謂、趙州有逸群之辯、趙州尋常示衆、有此一篇云、至道無難、唯嫌揀擇、纔有語言、是揀擇、是明白、老僧不在明白裏、是汝等還護惜也無、時有僧問云、既不在明白裏、護惜箇什麼、州云、我亦不知、僧云、和尚既不知、爲什麼道不在明白裏、州云、問事卽得、禮拜了退、後來這僧、只拈他靈龕處、去問他、問得也不妨奇特、爭奈只是心行、若是別人奈何他不得、爭奈趙州是作家、便道、何不引盡這語、這僧也會轉身吐氣、便道、某甲只念到這裏、一似安排相似、趙州隨聲拈起、便

答、不須計較、古人謂之相續也、大難、他辨龍蛇、別休咎、還他本分作家、趙州換卻這僧眼睛、不犯鋒鋩、不着計較、自然恰好、儞喚作有句也不得、喚作無句也不得、喚作不有不無句也不得、離四句絕百非、何故若論此事、如擊石火、似閃電光、急着眼看方見、若或擬議躊躇(躊躇上音疇、下音除、猶豫不進也。)不免喪身失命、雪竇頌云。

【頌】水灑不着。(喝什麼、大深遠生、有什麼共語處。)風吹不入。(如虛空相似、硬翻剗地、第空啓告。)虎步龍行。(信家得自在、不妨奇特。)鬼號神泣。(大衆掩耳、草偃風行、闍黎莫是與他同參。)頭長三尺知是誰。(怪底物、何方聖者、見麼見麼。)相對無言獨足立。(咄、縮頭去、放過一着、山魈、放過即不可、便打。)

【評唱】水灑不着風吹不入、虎步龍行、鬼號神泣、無儞陷啄處、此四句、頌趙州答話、大似龍馳虎驟、這僧只得一場懵懂、非但這僧、直得鬼也號神也泣、風行草偃相似、末後兩句可謂一子親得、頭長三尺、知是誰、相對無言獨足立、不見僧問古德、如何是佛、古德云、頭長三尺、頸長二寸、雪竇引用、未審諸人還識麼、山僧也不識、雪竇一時脫體盡卻趙州、眞箇在裏了也、諸人須子細着眼看。

第六十則

雪竇示云、諸佛衆生本來無異、山河自己等差、爲什麼卻渾成兩邊去也、若能撥轉話頭、坐斷要津、放過即不可、若不放過、盡大地不消一揑、且作麼生是撥轉話頭處、試舉看、

【本則】舉、雲門以拄杖示衆云。(點化在臨時、殺人刀活人劍、換卻儞眼睛了也。)拄杖子化爲龍。(何用周遮、用化作什麼。)吞卻乾坤了也。(天下衲僧性命不存、還曾咽麼、闍黎向什麼處安身立命。)山河大地甚處得來。(十方無壁落、四面亦無門、東西南北四維上下、尋奈這箇何。)

【評唱】只如雲門道拄杖子化爲龍、吞卻乾坤了也、山河大地甚處得來、若道有則瞎、若道無則死、還見雲門爲人處麼、還我拄杖子來、如今人不會他雲門獨露處、卻道、卽色明心、附物顯理、且如釋迦老子四十九年說法、不可不知、此議論、何故更用拈花、迦葉微笑、這老漢便探胡道、吾有正法眼藏、涅槃妙心、分付摩訶大迦葉、更何必單傳心印、諸人既是祖師門下客、還明得單傳底心麼、胷中若有一物、山河大地樅然現前、胷中若無一物、外則了無絲毫、說什麼理與智冥、境與神會、何故、一會一切會、一明一切明、長沙道、學道之人不識眞、只爲從前認識神、無量劫來生死本、癡人喚作本來人、忽若打破陰界、身心一如、身外無餘、猶未得一半在、說什麼卽色明心、附物顯理、古人道、一塵纔起大地全收、且道、是那箇一塵、若識得這一塵、便識得拄杖子、纔拈起拄杖子、便見縱橫妙用、恁麼說話、早是葛藤了也、何況更化爲龍、慶藏主云、五千四十八卷、還曾有恁麼說話麼、雲門每向拄杖處拈掇全機大用、活潑潑地爲人、芭蕉示衆云、昔僧巴鼻、盡在拄杖頭上、永嘉亦云、不是標形虛事緻、(緻音馳、)如來寶杖親蹤跡、如來昔於然燈佛時、布髮掩泥、以待彼佛、然燈曰、此處當建梵刹、時有一天子、遂標一莖草云、建梵刹竟、

諸人且道、這箇消息從那裏得來、祖師道、棒頭取證、喝下承當、且道、承當箇什麼、忽有人問、如何是拄杖子、莫是打筋斗麼、莫是撫掌一下麼、總是弄精魂、且喜沒交涉、雪竇頌云、

【頌】拄杖子呑乾坤。道什麼、只一用打狗。徒說桃花浪奔。攙開向上一竅、千聖齊立下風、也不在拏雲攫霧處、說得千徧萬徧、不如手脚羅籠一徧。燒尾者不在拏雲攫霧。左之右之、老僧只管看、也只是一箇乾柴片。曝腮者何必喪膽亡魂。人人鼠字如王、自是個千里萬里、爭奈慄然。(曝音僕、日乾也、通作暴、又薄報切。)拈了也。謝恩悲、老婆心切。聞不聞。不免落草、用聞作什麼。直須灑灑落落。殘羹餿飯、乾坤大地、甚處得來。休更紛紛紜紜。擊令者先犯、相次一到個頭上、打云、放過則不可。七十二棒且輕恕。山僧不曾行此令、諸令而行、頓值得山僧。一百五十難放君。正令當行、豈可只恁麼了、直饒朝打三千、暮打八百、堪作什麼。師驀拈拄杖下座、大衆一時走散。雪竇龍頭蛇尾作什麼。

【評唱】雲門委曲爲人、雪竇截徑爲人、所以攙卻化爲龍、不消恁麼道、只是拄杖子呑乾坤、雪竇大意免人情解、更道、徒說桃花浪奔、更不必化爲龍也、蓋禹門有三級浪、每至三月桃花浪漲、魚能逆水、而躍過浪者、卽化爲龍、雪竇道、縱化爲龍、亦是徒說、燒尾者不在拏雲攫霧、魚過禹門、自有天火燒其尾、拏雲攫霧而去、雪竇意道、縱化爲龍、亦不在拏雲攫霧也、曝腮者何必喪膽亡魂、清涼疏序云、積行菩薩、尙乃曝腮於龍門、大意明華嚴境界、非小德小智之所造詣、獨如魚過龍門、透不過者、點額而回、困於死水沙磧中、曝其腮也、雪竇意道、旣點額而回、必喪膽亡魂、拈了也聞不聞、重下注脚、一時與個掃蕩了也、諸人直須灑灑落落去、休更紛紛紜紜、個若更紛紛紜紜、失卻拄杖子了也、七十二棒且輕恕、雪竇爲個捨重從輕、古人道、七十二棒、翻成一百五十、如今人錯會、卻只算數目、合是七十五棒、爲什麼卻只七十二棒、殊不知、古人意在言外、所以道、此事不在言句中、免後人去穿鑿、雪竇所以引用、直饒眞箇灑灑落落、正好與個七十二棒、猶是輕恕、直饒總不如此、一百五十難放君、一時頌了也、卻更拈拄杖重重相爲、雖然恁麼也無一箇皮下有血。

佛果圜悟禪師碧巖錄卷第六　終

佛果圜悟禪師碧巖錄卷第七

第六十一則

垂示云、建法幢立宗旨、還他本分宗師、定龍蛇別緇素、須是作家知識、劍刃上論殺活、棒頭上別機宜、則且置且道、獨據寰中事、一句作麼生商量、試舉看。

【本則】舉、風穴垂語云。興雲致雨也、要爲主爲賓。若立一塵。我爲法王於法自在、花簇簇錦簇簇。家國興盛。不是他屋裏事。不立一塵。掃蹤滅跡、失卻眼睛、和鼻孔失也。家國喪亡。一切處光明、用家國作什麼、今是他家屋裏事。雪竇拈拄杖云。須是壁立千仞始得、逢磨來也。還有同生同死底衲僧麼。還我話頭來、雖然如是、要平不平之事、須於雪竇、商量始得、還知麼、若知許圜悟自由自在、若不知、莫打三千幕打八百。

【評唱】只如風穴示衆云、若立一塵、家國興盛、不立一塵、家國喪亡、且道、立一塵即是、不立一塵即是、到這裏、須是大用現前始得、所以道、設使言前薦得、猶是滯殼迷封、直饒句下精通、未免觸途狂見、他是臨濟下尊宿、直下用本分草料、若立一塵、家國興盛、野老鑿蹤意在立、國安邦、須藉謀臣猛將、然後麒麟出鳳凰翔、乃太平之祥瑞也、他三家村裏人、爭知有恁麼事、不立一塵、家國喪亡、風颯颯地、野老爲什麼出來謳歌、只爲家國喪亡、洞下謂之轉變處、更無佛無衆生、無是無非、無好無惡、絕音響蹤跡、所以道、金屑雖貴、落眼成翳、又云、金屑眼中翳、衣珠法上塵、已靈猶不重、佛祖是何人、七穿八穴、神通妙用、不爲奇特、到箇裏、衲被蒙頭、萬事休、此時山僧都不會、若更說心說性、說玄說妙、都用不着、何故、他家自有神仙境、南泉示衆云、黃梅七百高僧、盡是會佛法底人、不得他衣鉢、唯有盧行者、不會佛法、所以得他衣鉢、又云、三世諸佛不知、有貍奴白牯卻知、有野老或鑿蹤、或謳歌、且道、作麼生會、且道、他具什麼眼、卻恁麼、須知野老門前、別有條章、雪竇雙提了、卻拈拄杖云、還有同生同死底衲僧麼、當時若有箇漢出來、道得一句、互爲賓主、免得雪竇這老漢後面自點胷。

【頌】野老從教不展眉。三千里外有箇人、美食不中飽人喫。且圖家國立雄基。太平一曲大家知、要行即行、要住即住、盡乾坤大地是箇解脫門、關作麼生立。謀臣猛將今何在。有麼有麼、土曠人稀相逢者少、且莫點胷。萬里清風只自知。旁若無人、教誰歸處、也是雲居羅漢。

【評唱】這裏卻只拈一邊、放一邊、裁長補短、捨重從輕、所以道、野老從教不展眉、我且圖家國立雄基、謀臣猛將今何在、雪竇拈拄杖云、還有同生同死底衲僧麼、一似道還有謀臣猛將麼、一口吞卻一切人了也、所以道、土曠人稀相逢者少、還有相知者麼、出來一坑埋卻、萬里清風只自知、便是雪竇點胷處也。

第六十二則

垂示云、以無師智、發無作妙用、以無緣慈、作不請勝友、向一句下、有殺有活、於一機中、有縱有擒、且道、什麼人會恁麼來、試擧看。

【本則】擧、雲門示衆云、乾坤之內。土曠人稀、六合收不得。宇宙之間。休、向鬼窟裏作活計、趕過了也。拈燈籠向佛殿裏。猶可商量。將中有一寶。在什麼處、光生也、切忌向鬼窟裏覓。祕在形山。拶一點。

【評唱】雲門道、乾坤之內、宇宙之間、中有一寶、祕在形山、且道、雲門意在釣竿頭、意在燈籠上、此乃肇法師寶藏論數句、雲門拈來示衆、肇公時於後秦逍遙園造論、寫維摩經、方知莊老未盡、其妙、肇乃禮羅什爲師、又參瓦棺寺跋陀婆羅菩薩、從西天二十七祖處、傳心印來、肇深造其堂奧、肇一日遭難、臨刑之時、乞七日暇、造寶藏論、雲門便拈論中四句示衆、大意云、如何以無價之寶、隱在陰界之中、論中語言、皆與宗門說話相符合、不見鏡清問曹山、清虛之理、畢竟無身時如何、山云、理卽如、是、事作麼生、清云、如理如事、山云、瞞曹山一人、卽得、爭奈諸聖眼何、清云、若無諸聖眼、爭知、不恁麼、山云、官不容針私通車馬、所以道、乾坤之內、宇宙之間、中有一寶、祕在形山、大意明、人人具足、箇箇圓成、雲門便拈來示衆、已是十分現成、不可更似座主相似、與僧注解去、他慈悲更與僧下注脚、道、拈燈籠向佛殿裏、將三門來燈籠上、且道、雲門恁麼道、意作麼生、不見古人云、無明實性卽佛性、幻化空身卽法身、又云、卽凡心而見佛心、形山卽是四大五蘊也、中有一寶、祕在形山、所以道、諸佛在心頭、迷人向外求、內懷無價寶、不識一生休、又道、佛性堂堂顯現、住相有情難見、若悟衆生無我、我面何殊佛面、心是本來心、面是娘生面、劫石可移動、箇中無改變、有者只認箇昭昭靈靈爲寶、只是不得其用、亦不得其妙、所以動轉不得、開撥不行、古人道、窮則變、變則通、拈燈籠向佛殿裏、若是常情可測度得、將三門來燈籠上、還測度得麼、雲門與僧一時、打破情識意想得失是非了也、雪竇道、我愛韶陽新定機、一生與人抽釘拔楔、又云、曲木據位知幾何、利刃翦卻合人愛、他道、拈燈籠向佛殿裏、這一句、已截斷了也、又將三門來燈籠上、若論此事、如擊石火似閃電光、雲門道、汝若相當去、且覓箇入路、徹塵諸佛、在僧脚跟下、三藏聖教、在僧舌頭上、不如悟去好、和尙子莫妄想、天是天、地是地、山是山、水是水、僧是僧、俗是俗、良久云、與我拈面前按山來看、便有僧出問云、學人見山是山、水是水、時如何、門云、三門爲什麼從這裏過、恐僧死卻、遂以手劃一劃云、識得時、是醍醐上味、若識不得、反爲毒藥也、所以道、了了了了時無可了、玄玄玄玄處直須呵、雪竇又拈云、乾坤之內、宇宙之間、中有一寶、祕在形山、掛在壁上、達磨九年、不敢正眼覷著、而今衲僧要見、劈脊便棒、看佗本分宗師、終不將寶法、繫綴人、玄沙云、羅籠不肯住、呼喚不回頭、雖然恁麼、也是靈龜曳尾、雪竇頌云。

【頌】看看。高著眼、用看作。什麼處、驪龍玩珠。古岸何人把釣竿。孤危甚孤危、壁立甚壁立、賊通後張弓、關後見腮、莫與往來。雲冉冉。炎騰幅子、飄奐布形。水漫漫。左之右之、前遮後擁。明月蘆花君自看。看者則瞎、若識得雲門語、便見雪竇末後句。

【評唱】若識得雲門語、便見雪竇爲人處、他向雲門示衆後面兩句、便與僧下箇注脚云、看看、

儞便作瞪眉瞪眼會、（瞪抽庚切、直視也。）且得沒交涉、古人道、靈光獨耀、迥脫根塵、體露眞常、不拘文字、心性無染、本自圓成、但離妄緣、卽如如佛、若只向瞪眉努眼處、坐殺、豈能脫得根塵、雪竇道、看看、雲門如在古岸把釣竿相似、雲又冉冉、水又漫漫、明月映蘆花、蘆花映明月、正當恁麼時、且道、是何境界、若便直下見得、前後只是一句相似。

第六十三則

垂示云、意路不到、正好提撕、言詮不及、宜急着眼、若也電轉星飛、便可傾湫倒嶽、衆中莫有辨得底麼、試擧看。

【本則】擧、南泉一日東西兩堂、爭貓兒。（不是今日合鬧也、揚漏逗。）南泉見遂提起云、道得卽不斬。（正令當行、十方坐斷、道老漢有定龍蛇手脚。）衆無對。（可惜放過、一除漆桶堪作什麼、杜撰禪和如麻似粟。）泉斬貓兒、爲兩段。（快哉快哉、若不如此、盡是弄泥團漢、喊過後張弓、已是第二頭、未擧起時好打。）

【唱評】宗師家、看他一動一靜、一出一入、且道、意旨如何、這斬猫兒話、天下叢林、商量浩浩地、有者道、提起處便是、有底道、在斬處、且得都沒交涉、他若不提起時、亦匝匝地作盡道理、殊不知、他古人、有定乾坤底眼、有定乾坤底劒、偏且道、畢竟是誰斬猫兒、只如南泉提起云、道得卽不斬、當時忽有人道得、且道、南泉斬不斬、所以道、正令當行、十方坐斷、出頭天外看、誰是箇中人、其實當時元不斬、此話亦不在斬與不斬處、此事軒知、如此分明、不在情塵意見上討、若向情塵意見上討、則辜負南泉去、但向當鋒劒及上看、是有也得、無也得、不有不無也得、所以古人道、窮則變、變則通、而今人不解變通、只管向語句上走、南泉恁麼提起、不可教人合下得甚語、只要教人自薦、各各自用自知、若不恁麼會、卒摸索不着、雪竇當頭頌云、

【頌】兩堂俱是杜禪和。（親言出親口、一句道斷、據款結案。）撥動煙塵不奈何。（看儞作什麼、折合現成公案也。）賴得南泉能擧令。（擧拂子云、一似道箇王老師猫較些子、好箇金剛王寶劒、用切泥去也。）一刀兩段任偏頗。（普禾切、偏也、音坡。）

【評唱】兩堂俱是杜禪和、雪竇不向句下死、亦不認驢前馬後、有撥轉處、便道、撥動煙塵、不奈何、雪竇與南泉把手共行、一句說了也、兩堂首座、沒歇頭處、到處只管撥動煙塵、奈何不得、賴得南泉與他斷、這公案、收得淨盡、他爭奈前不搆村、後不迭店、所以道、賴得南泉能擧令、一刀兩段任偏頗、直下一刀兩段、更不管有偏頗、且道、南泉據什麼令。

第六十四則

【本則】擧、南泉復擧前話問趙州。（也須是同心同意始得、同道者方知。）州便脫草鞋、於頭上戴出。（不免拖泥帶水。）南泉云、子若在、恰救得貓兒。（唱拍相隨、知音者少、將錯就錯。）

【評唱】趙州乃南泉的子、道頭會尾、擧着便知落處、南泉晚間復擧前話問趙州、州是老作家、

便脫草鞋於頭上戴出泉云子若在卻救得猫兒且道眞箇恁麼不恁麼南泉云道得卽不斬如擊石火似閃電光趙州便脫草鞋於頭上戴出佗參活句不參死句日日新時時新千聖移易一絲毫不得須是運出自己家珍方見他全機大用他道我爲法王於法自在人多錯會道趙州權將草鞋作猫兒有者道待他云道得卽不斬便戴草鞋出去自是儞斬猫兒不干我事且得沒交涉只是弄精魂殊不知古人意如天普蓋似地普擎他父子相投機鋒相合那箇是頭他便會尾如今學者不識古人轉處空去意路上卜度若要見但去他南泉趙州轉處便見好頌云

【頌】公案圓來問趙州。言猫在耳不消更斬喪車背後懸藥袋。長安城裏任閑遊。得恁麼快活得恁麼自在信手拈來草不可不教個恁麼去也。草鞋頭戴無人會。也有一箇半箇別是一家風明頭也合暗頭也合。歸到家山卽便休。驀地下好與三十棒且道過在什麼處只爲儞無風起浪彼此放下只恐不恁麼恁麼也大奇。

【評唱】公案圓來問趙州慶藏主道如人結案相似八棒是八棒十三是十三已斷了也卻拈來問趙州州是他屋裏人會南泉意旨他是透徹底人逕著磕著便轉具本分作家眼腦纔開擧着剔起便行雪竇道長安城裏任閑遊漏逗不少古人道長安雖樂不是久居又云長安甚閑我國晏然也須是識機宜別休咎始得草鞋頭戴無人會戴草鞋處這些子雖無許多事所以道唯我能知唯我能證方見得南泉趙州雪竇同得同用處且道而今作麼生會歸到家山卽便休什麼處是家山他若不會必不恁麼道他既會且道家山在什麼處便打。

第六十五則

垂示云無相而形充十虛而方廣無心而應徧刹海而不煩擧一明三目機銖兩直得棒如雨點喝似雷奔也未當得向上人行履在且道作麼生是向上人事試看。

【本則】擧外道問佛不問有言不問無言。雖然如是扁裏人也有些子香氣變飯倚空飛賴是不問。世尊良久。莫謂世尊眞聾如雷坐者立者皆動他不得。外道令我得入。伶俐漢一撥便一轉盤裏明珠。外道去後阿難問佛外道有何所證而言得入。不妨令人疑智也要大家知鋼鑄着生鐵。佛云如世良馬見鞭影而行。且道喚什麼作鞭影打一拂子棒頭有眼明如日要識眞金火裏看拾得口喫飯。

【評唱】此擧若在言句上三乘十二分教豈是無言句或道無言便是又何消祖師西來作什麼只如從上來許多公案畢竟如何見其下落這一則公案話會者不少有底喚作良久有底喚作據坐有底喚作默然不對且喜沒交涉幾曾摸索得着來此事其實不在言句上亦不離言句中若稍有擬議則千里萬里去也看他外道省悟後方知亦不在此亦不在彼亦不在是亦不在不是且道是箇什麼天衣懷和尚頌云維摩不默不良久據坐商量成過咎吹毛匣裏冷光寒外道天魔皆拱手百丈常和尚參法眼眼令看此話法眼一日問儞看什麼因緣常云、

外道問佛話、眼云、儞試舉看、常擬開口、眼云、住住、儞擬向良久處會、那、常於言下、忽然大悟、後示衆云、百丈有三訣、喫茶、珍重、歇、擬議更思量、知君猶未徹、翠巖眞點胷拈云、六合九有、青黃赤白、一一交羅、外道會四維陁典論、自云、我是一切智人、在處索人論議、他致問端、要坐斷釋迦老子舌頭、世尊不費纖毫氣力、他便省去、讚歎云、世尊大慈大悲、開我迷雲、令我得入、且道、作麼生、是大慈大悲處、世尊隻眼通三世、外道雙眸貫五天、潙山眞如拈云、外道懷藏至寶、世尊親爲高提、森羅顯現、萬象歷然、且畢竟外道悟箇什麼、如趂狗逼墻、至極則無路處、他須回來便乃活鱍鱍地、若計較是非、一時放下、情盡見除、自然徹底分明、外道去後阿難問、佛云、外道有何所證而言得入、佛云、如世良馬見鞭影而行、後來諸方便道、又被風吹別調中、又云、龍頭蛇尾、什麼處是世尊鞭影、什麼處是見鞭影處、雪竇云、邪正不分、過由鞭影、眞如云、阿難金鎧再擊、四衆共聞、雖然如是、大似二龍爭珠、長他智者威獰、雪竇頌云。

【頌】機輪曾未轉。（在這裏果然不動一絲毫。）轉必兩頭走。（不落有必落無不東則西左眼半斤右眼八兩。）明鏡忽臨臺。（還見釋迦老子麼、一撥便轉破也破也敗也敗也。）當下分妍醜。（盡大地是箇解脫門好與三十棒還見釋迦老子麼。）妍醜分兮迷雲開。（放一線道許儞有箇轉身處爭奈只是箇外道。）慈門何處生塵埃。（徧界不曾藏退後退後逢磨來也。）因思良馬窺鞭影。（我有拄杖子不消儞興我且道什麼處鞭影處什麼處是良馬處。）千里追風喚得回。（騎佛殿出三門去也轉身即錯放過即不可恨打。）喚得回、鳴指三下。（前不拂付後不迷店拗折拄杖子向什麼處去雪竇雷聲甚大雨點全無。）

【評唱】機輪曾未轉、轉必兩頭走、機乃千聖靈機、輪是從本已來諸人命脈、不見古人道、千聖靈機不易親、龍生龍子、莫因循、趙州奪得連城璧、秦王相如總喪身、外道卻是把得住作得主、未嘗動着、何故、他道不問有言不問無言、豈不是全機處、世尊會看風使帆、應病與藥、所以良久、全機提起、外道全體會去、機輪便阿轆轆地轉、亦不轉向有、亦不轉向無、不落得失、不拘凡聖、二邊一時坐斷、世尊纔良久、他便禮拜、如今人多落在無、不然落在有、只管在有無處、兩頭走、雪竇道、明鏡忽臨臺、當下分妍醜、這箇不曾動着、只消箇良久、如明鏡臨臺相似、萬象不能逃、其形質、外道云、世尊大慈大悲、開我迷雲、令我得入、且道、是什麼處、是外道入處、到這裏、須是箇箇自參自究、自悟自會始得、便於一切處、行住坐臥、不問高低、一時現成、更不移易一絲毫、纔作計較、有一絲毫道理、卽礙塞殺人、更無入作分也、後面頌世尊大慈大悲開我迷雲、令我得入、當下忽然分妍醜、妍醜分兮迷雲開、慈門何處生塵埃、盡大地是世尊大慈大悲門戶、儞若透得不消一揑、此亦是放開底門戶、不見世尊、於三七日中、思惟如是事、我寧不說法、疾入於涅槃、因思良馬窺鞭影、千里追風喚得回、追風之馬、見鞭影而便過千里、教回卽回、雪竇意賞他道、若得後流方可、一撥便轉、一喚便回、若喚得回、便鳴指三下、且道、是點破、是撒沙。

雪示云、當機覿面、提陷虎之機、正按榜提、布擒賊之略、明合暗合、雙放雙收、解弄死蛇、還佗作者。

【本則】舉、巖頭問僧、什麼處來。未開口時納敗缺了也、穿過觸髏、要知來處也不顧。僧云、西京來。果然一箇小賊。頭云、黃巢過後、還收得劍麼。平生不曾做草賊、不懼頭落、便恁麼問、好大膽。僧云、收得。敗也、未識轉身處、茅廣漢如麻似粟。巖頭引頸近前云、囫。也須識機宜、始得陷虎之機、是什麼心行。僧云、師頭落也。只見雖頭利、不見鑿頭方、識甚好惡、著也。巖頭呵呵大笑。盡天下禪僧不奈何、欺殺天下人、尋這老漢頭落處不得。僧後到雪峰。依前顏預慘憺、這僧往往十分納敗缺去。峰問、什麼處來。不可不說來處也要勸過。僧云、巖頭來。果然納敗缺。峰云、有何言句。舉得不免喫棒。僧舉前話。便好一趕出。雪峰打三十棒趕出。雖然斬釘截鐵、因甚只打三十棒、註杖子也未到、折在、且未是本分、何故、朝打三千暮打八百、若不是同參、爭辨、錙的、雖然如是、且道、雪峰巖頭落在什麼處。

【評唱】大凡挑囊負鉢、撥草瞻風、也須是具行腳眼、始得、這僧眼似流星、也被巖頭勘破了一串穿卻、當時若是箇漢、或殺或活、舉着便用、這僧迸郎當、卻道收得、似恁麼行腳、闍羅老子、問儞索飯錢、在、知他踏破多少草鞋、直到雪峯、當時若有些子眼筋、便解瞥地去、豈不快哉、這箇因緣、有節角涌訛處、此事雖然無得失、得失甚大、雖然無揀擇、到這裏、卻要具眼揀擇、看他龍牙行腳時、致箇問端、問德山、學人仗鏌鋣劍、擬取師頭、時如何、德山引頸近前云、囫、龍牙云、師頭落也、山便歸方丈、牙後舉似洞山、洞山云、德山當時道什麼、牙云、他無語、洞山云、佗無語則且置、借我德山落底頭來看、牙於言下大悟、遂焚香遙望德山禮拜懺悔、有僧傳到德山處、德山云、洞山老漢、不識好惡、這漢死來多少時也、救得有什麼用處、這箇公案、與龍牙底一般、德山歸方丈、則暗中最妙、巖頭大笑、他笑中有毒、若有人辨得、天下橫行、這僧當時若辨得出、千古之下、免得檢責、於巖頭門下、已是一場蹉過、看他雪峯老人、是同參便知落處、也不與他說破、只打三十棒趕出院、可以光前絕後、這箇是拈作家衲僧鼻孔、爲人底手段、更不與他如之若何、教他自悟去、本分宗師爲人、有時籠罩、不教伊出頭、有時放令死郎當地、卻須有出身處、大小大、巖頭雪峰、到被箇喫飯禪和勘破、只如巖頭道、黃巢過後、還收得劍麼、諸人且道、這裏合下得什麼語、免得他笑、又免得雪峰行棒趕出、這裏誦訛、若不曾親證親悟、縱使口頭快利、至究竟、透脫生死不得、山僧尋常教人覷這機關轉處、若擬議則遠之遠矣、不見投子問鹽平僧云、黃巢過後、收得劍麼、僧以手指地、投子云、三十年弄馬騎、今日卻被驢子撲、看這僧也不妨、是箇作家、也不道收得、也不道收不得、與西京僧、如隔海在、眞如拈云、他古人、一箇做頭、一箇做尾、定也、雪竇頌云、

【頌】黃巢過後曾收劍。孟八郎漢有什麼用處、只是錫刀子一口。大笑還應作者知。一子親得、一能有殺機。不是梁儘爭得自由。三十山藤且輕恕。同條生同條死、朝三千暮八百、東家人死西家人助哀、卻與教得活。得便宜是落便宜。據款結案、悔不慎當初也有些子。

【評唱】黃巢過後曾收劍、大笑還應作者知、雪竇便頌、這僧與巖頭大笑處、這箇些子、天下人摸索不着、且道、他笑箇什麼、須是作家方知、這笑中有權有實、有照有用、有殺有活、三十山藤且輕恕、頌、這僧後到雪峰面前、這僧依舊莽鹵、峰便據令而行、打三十棒趕出、且道、爲什麼、卻

如此、儞要盡情會這話麽、得便宜是落便宜。

第六十七則

【本則】舉、梁武帝、請傅大士、講金剛經。逢磨兄弟來也、魚行酒肆卽不無、南僧門下卽不可、道老漢老老大大、作這般是則未是、不煩打葛藤。武帝愕然。直得火星迸散、似則似、去就。大士便於座上、揮案一下、便下座。兩回三度被人瞞、也教他摸索不著。誌公問、陛下還會麽。爲理不爲情、乾脆不向外、也好與三十棒。帝云、不會。可惜許。誌公云、大士講經竟。也須逐出國始得、當時和誌公一時與經出國始是作家、兩箇漢同坑無異土。

【評唱】梁高祖武帝、蕭氏諱衍、字叔達、立功業、以至受齊禪、卽位後、別註五經、講議、奉黃老、甚篤、而性至孝、一日思得出世之法、以報劬勞、於是捨道事佛、廼受菩薩戒於婁約法師處、披佛袈裟、自講放光般若經、以報父母、時誌公大士、以顯異惑衆、繫於獄中、誌公乃分身、遊化城邑、帝一日知之感悟、極推重之、誌公數行遮護、隱顯逮不可測、時婺州有大士者、居雲黃山、手栽二樹、謂之雙林、自稱當來善慧大士、一日修書、命弟子上表聞於帝、時朝廷以其無君臣之禮不受、傳大士將入金陵城中賣魚、時武帝或請誌公講金剛經、誌公曰、貧道不能講、市中有傳大士者、能講此經、帝下詔、召之入禁中、傳大士既至、於講座上、揮案一下、便下座、當時便與推轉、免見一場狼藉、卻被誌公云、陛下還會麽、帝云、不會、誌公云、大士講經竟、也是一人作頭、一人作尾、誌公恁麽道、還夢見傳大士麽、一等是弄精魂、這箇就中奇特、雖是死蛇解弄也活、既是講經竟、甚卻不大分爲二、一如尋常座主道、金剛之體堅固、物物不能壞、利用故能攝萬物、如此講說、方喚作講經、雖然如是、諸人殊不知、傳大士只拈向上關楔子、略露鋒鋩、教人知落處、直截與儞壁立萬仞、恰好被誌公不識好惡、卻云、大士講經竟、正是好心不得好報、如美酒一盞、卻被誌公以水攪過、如一釜羹、被誌公將一顆鼠糞污了、且道、既不是講經、畢竟喚作什麽、頌云、

【頌】不向雙林寄此身。只爲他把不住、作賊不須本、有糞裏堂可藏鍾。卻於梁土惹埃塵。若不入草爭見端的、不風流處也風流。當時不得誌公老。奉伴底瀉兒。也是栖栖去國人。正好一狀領過、便打。

【評唱】不向雙林寄此身、卻於梁土惹埃塵、傳大士與沒板齒老漢、一般相逢、達磨初到金陵、見武帝、帝問、如何是聖諦第一義、磨云、廓然無聖、帝云、對朕者誰、磨云、不識、帝不契、遂渡江至魏、武帝舉問誌公、公云、陛下還識此人否、帝云、不識、誌公云、此是觀音大士、傳佛心印、帝悔遂遣使去取、誌公云、莫道陛下、發使去取、合國人去、他亦不回、所以雪竇道、當時不得誌公老、也是栖栖去國人、當時若不是誌公、爲傳大士出氣、也須是超出國去、誌公既饒舌、武帝卻被他熱瞞一上、雪竇大意道、不須他來梁土、講經揮案、所以道、何不向雙林寄此身、喫粥喫飯、隨分過時、卻來梁土恁麽指注、揮案一下、便下座、便是他惹埃塵處、既是要殊勝、則目視雲霄、上不見有佛、下不見有衆生、若論出世邊事、不免灰頭土面、將無作有、將有作無、將是作非、將麤作細、魚行酒肆、橫拈倒用、教一切人、明此箇事、若不恁麽放行、直到彌勒下生、也無一箇半箇、傳

大士既是拖泥帶水、賴是有知音、若不得誌公老、幾乎起出國了、且道、卽今在什麼處、

第六十八則

垂示云、掀天關、翻地軸、擒虎兕、辨龍蛇、須是箇活鰕鰕漢始得、句句相投、機機相應、且從上來什麼人合恁麼、請舉看、

【本則】舉、仰山問三聖、汝名什麼。名實相奪、句賊破家。聖云、惠寂。坐斷舌頭、撥旗奪鼓。仰山云、惠寂是我。各自守封疆。聖云、我名惠然。閑市裏奪去、彼此卻守本分。仰山呵呵大笑。可謂是箇時節、錦上鋪花、天下人不知落處、何故土曠人稀相逢者少、一似巖頭笑、又非巖頭笑、一等是笑、爲什麼卻作兩段、具眼者始定當看、

【評唱】三聖是臨濟下尊宿、少具出群作略、有大機有大用、在衆中、昂昂藏藏、名聞諸方、後辭臨濟、徧遊淮海、到處叢林、皆以高賓待之、自向北至南方、先造雪峰、便問、透網金鱗、未審以何爲食、峰云、待汝出網來、卽向汝道、聖云、一千五百人、善知識、話頭也不識、峰云、老僧住持事繁、峰往寺莊、路逢獼猴、乃云、這獼猴各各佩一面古鏡、聖云、歷劫無名、何以彰爲古鏡、峰云、瑕生也、聖云、一千五百人善知識、話頭也不識、峰云、罪過、老僧住持事繁、後至仰山、山極愛其俊利、待之於明窓下、一日有官人來、參仰山、山問、官居何位、云、推官、山竪起拂子云、還推得這箇麼、官人無語、衆人下語、俱不契、仰山意、時三聖病在延壽堂、仰山令侍者持此語問之、聖云、和尚有事也、再令侍者問、未審有什麼事、聖云、再犯不容、仰山深肯之、百丈當時、以禪板蒲團付黃檗、拄杖拂子付潙山、潙山後付仰山、仰山既大肯、三聖、聖一日辭去、仰山以拄杖拂子付三聖、聖云、某甲已有師、仰山詰其由、乃臨濟的子也、只如仰山問三聖、汝名什麼、佗不可不知其名、何故更恁麼問、所以作家要驗人得知子細、只似等閑、問云、汝名什麼、更道、無計較、何故、三聖不云惠然、卻道惠寂、看佗具眼漢、自然不同、三聖恁麼又不是頭、一向攙旗奪鼓、意在仰山語外、此語不墮常情、難爲摸索、這般漢手段卻活得人、所以道、佗參活句、不參死句、若順常情、則歇人不得、看佗古人念道如此、用盡精神、始能大悟、既悟了用時、還同未悟時人、相似隨分一言半句、不得落常情、三聖知佗仰山落處、便向佗道、我名惠寂、仰山要收三聖、三聖倒收仰山、仰山只得就身打劫、道惠寂是我、是放行處、三聖云、我名惠然、亦是放行、所以雪竇後面頌云、雙收雙放若爲宗、只一句內、一時頭了、仰山呵呵大笑、也有權有實、也有照有用、爲佗八面玲瓏、所以用處得大自在、這箇笑與巖頭笑不同、巖頭笑有毒藥、這箇笑、千古萬古清風凜凜地、雪竇頌云、

【頌】雙收雙放若爲宗。知他有幾人、八面玲瓏、將謂眞箇有恁麼事。騎虎由來要絕功。若不是頂門上有眼、肘腋下有符、爭得到這裏、騎則不妨、只恐彌下不得、不是恁麼人、爭明恁麼事。笑罷不知何處去。盡四百軍州、覓恁麼人也難得、言猶在耳、千古萬古有清風。只應千古動悲風。如今在什麼處、喘、既是大笑、爲什麼卻動悲風、大地黑漫漫。

【評唱】雙收雙放若爲宗、放行互爲賓主、仰山云、汝名什麼、聖云、我名惠寂、是雙放、仰山云、惠寂是我、聖云、我名惠然、是雙收、其實是互換之機、收則大家收、放則大家放、雪竇一時頌盡了

也、佗意道、若不放收、若不互換、爾是爾我是我、都來只四箇字、因甚卻於裏頭、出沒卷舒、古人道、爾若立我便坐、爾若坐我便立、若也同坐同立、二俱瞎漢、此是雙收雙放可以爲宗要、騎虎由來要絕功、有如此之高風、最上之機要、要騎便騎、要下便下、據虎頭亦得、收虎尾亦得、三聖仰山、二俱有此之風、笑罷不知何處去、且道、佗笑箇什麼、直得清風凜凜、爲什麼末後卻道、只應千古動悲風、也是死而不弔、一時與爾注解了也、爭奈天下人、啗啄不入、不知落處、諸人還知麼、

第六十九則

垂示云、無啗啄處、祖師心印、狀似鐵牛之機、透荊棘林、衲僧家、如紅爐上一點雪、平地上七穿八穴、則且止、不落貧絲、又作麼生、試舉看、

【本則】舉、南泉歸宗麻谷、同去禮拜忠國師、至中路。（三人同行必有我師、有什麼奇特、也要辨端的。）南泉於地上畫一圓相云、道得卽去。（無風起浪、也要人知、卻陸沉船、若不識過、爭辨端的。）歸宗於圓相中坐。（一人打鼓、一人抽身、是好人、好一場曲調、作家作家。同道方知。）麻谷便作女人拜。（一人打鼓、三箇也得。）泉云、恁麼則不去也。（得識破、當時好與一掌、孟八郎漢。）歸宗云、是什麼心行。

【評唱】當時馬祖、盛化於江西、石頭道行於湖湘、忠國師道化於長安、他親見六祖來、是時南方擊頭帶角者、無有不欲升其堂入其室、若不爾爲人所恥、這老漢三箇、欲去禮拜忠國師、至中路、做這一場敗缺、南泉云、恁麼則不去也、既是一一道得、爲什麼卻道不去、且道、古人意作麼生、當時待他道恁麼則不去也、劈耳便掌、看他作什麼伎倆、萬古振綱宗、只是這些子機要、所以慈明道、要牽只在索頭邊、撥着點着便轉、如水上捺葫蘆子、相似、人多喚作不相肯語、殊不知、此事到極則處、須離泥離水、拔楔抽釘、爾若作心行會、則沒交涉、古人轉變得好、到這裏、不得不恁麼、須是有殺有活、看他一人去圓相中坐、一人作女人拜、也甚好、南泉云、恁麼則不去也、歸宗云、是什麼心行、孟八郎漢、又恁麼去也、他恁麼道大意、要驗南泉、南泉尋常道、喚作如如、早是變了也、南泉歸宗麻谷、卻是一家裏人、一擒一縱、一殺一活、不妨奇特、雪竇頌云、

【頌】由基箭射猿。（當頭一路、誰敢向前、觸處得妙、未發先中。）遶樹何太直。（若不承當、爭敢恁麼、東西南北一家風、已周遍多時也。）千箇與萬箇。（如麻似粟、野狐精一隊、弄泥團漢、不如歸去好、卻較些子。）是誰曾中的。（一箇半箇、更沒一箇也用不得。）相呼相喚歸去來。（一隊、爭奈得南泉何。）曹溪路上休登陟。（大勞生、相料不是曹溪門下客、低一低處平、之有餘、高高處觀、之不足。）復云、曹溪路坦平、爲什麼休登陟。（不唯南泉半路抽身、雪竇亦乃半路抽身、好事不如無、雪竇也恁這般病痛。）

【評唱】由基箭射猿、遶樹何太直、由基乃是楚時人、姓養、名叔、字由基、時楚莊王出獵、見一白猿、使人射之、其猿捉箭而戲、勅群臣射之、莫有中者、王遂問群臣、群臣奏曰、由基者善射、遂令射之、由基方彎弓、猿乃抱樹悲號、至箭發時、猿遶樹避之、其箭亦遶樹中殺、此乃神箭也、雪竇何故卻言太直、若是太直則不中、既是遶樹、何故卻云、太直、雪竇借其意、不妨用得好、此事出

春秋、有者道、遠、樹是圓相、若眞箇如此、蓋不識語之宗旨、不知太直處、三箇老漢、殊途而同歸、一揆、一齊太直、若是識得他去處、七縱八橫、不離方寸、百川異流、同歸大海、所以南泉道、恁麼則不去也、若是禪僧正眼覷着、只是弄精魂、若喚作弄精魂、卻不是弄精魂、五祖先師道、他三人是慧炬三昧、莊嚴王三昧、雖然如此作女人拜、他終不作女人拜、會雖畫圓相、他終不作圓相會、既不恁麼會、又作麼生會、雪竇道、千箇與萬箇、是誰會中的、能有幾箇、百發百中、相呼相喚歸去來、頌南泉道、恁麼則不去也、南泉從此不去、故云、曹溪路上休登陟、滅卻荊棘林、雪竇把不定復云、曹溪路坦平、爲什麼休登陟、曹溪路絕塵絕迹、露躶躶赤灑灑、平坦坦儻然地、爲什麼卻休登陟、各自看腳下。

第七十則

垂示云、快人一言、快馬一鞭、萬年一念、一念萬年、要知直截、未舉已前、且道、未舉已前、作麼生摸索、請舉看。

【本則】舉、潙山・五峯・雲巖、同侍立百丈。（阿呵呵、終始誑訛、會向西秦、我之東魯。）百丈問潙山、併卻咽喉唇吻、作麼生道。（一將難求。）潙山云、卻請和尚道。（借路經過。）丈云、我不辭向汝道、恐已後喪我兒孫。（不免老婆心切、面皮厚三寸、和泥合水、就身打劫。）

【評唱】潙山・五峯・雲巖、同侍立百丈、百丈問潙山、併卻咽喉唇吻、作麼生道、山云、卻請和尚道、丈云、我不辭向汝道、恐已後喪我兒孫、百丈雖然如此、鍋子已被別人奪去了也、丈復問五峯、峯云、和尚也須併卻、丈云、無人處斫額望汝、又問雲巖、巖云、和尚有也未、丈云、喪我兒孫、三人各是一家、古人道、平地上死人無數、過得荊棘林者、是好手、所以宗師家、以荊棘林驗人、何故若於常情句下、驗人不得、禪僧家須是句裏呈機言中辨的、若是擔板漢、多向句中死卻便道、併卻咽喉唇吻、更無下口處、若是變通底人、有逆水之波、只向問頭上、有一條路、不傷鋒犯手、潙山云、卻請和尚道、且道、他意作麼生、向箇裏如擊石火、似閃電光、相似、撈他問處便答、自有出身之路、不費纖毫氣力、所以道、他參活句、不參死句、百丈卻不采他、只云、不辭向汝道、恐已後喪我兒孫、大凡宗師爲人抽釘拔楔、若是如今人、便道、此答不肯他、不領話、殊不知、箇裏一路生機處、壁立千仞、賓主互換活鰕鰕地、雪竇愛他此語風措、宛轉自在、又能把定封疆、所以頌云、

【頌】卻請和尚道。（蓋乾坤已是傷鋒犯手。）虎頭生角出荒草。（可煞驚羣、不妨奇特。）十洲春盡花凋殘。（瞞處清涼、讀數也不及。）珊瑚樹林日呆呆。（千重百匝、爭奈百草頭上、尋他不得、答處蓋天蓋地。）

【評唱】此三人答處、各各不同、也有壁立千仞、也有照用同時、也有自救不了、卻請和尚道、雪竇便向此一句中、呈機了也、更就中輕輕拶令人易見云、虎頭生角出荒草、潙山答處、一似猛虎頭上安角、有什麼近傍處、不見僧問羅山、同生不同死時如何、山云、如牛無角、僧云、同生亦同死時如何、山云、如虎戴角、雪竇只一句頌了也、佗有轉變餘才、更云、十洲春盡花凋殘、海上

有三山十洲、以百年爲一春、雪竇語帶風措、宛轉盤礴、春盡之際、百千萬株花一時凋殘、獨有珊瑚樹林、不解凋落、與太陽相奪、其光交映、正當恁麼時、不妨奇特、雪竇用此、明佗卻請和尚道、十洲皆海外諸國之所附、一祖洲出反魂香、二瀛洲、生芝草、玉石、泉如酒味、三玄洲、出僊藥、服之長生、四長洲、出木瓜、玉英、五炎洲、出火浣布、六元洲、出靈泉如蜜、七生洲、有山川無寒暑、八鳳麟洲、人取鳳喙麟角、煎續弦膠、九聚窟洲、出獅子銅頭鐵額之獸、十檀洲、(一作流洲)出琨吾石、作劍切玉如泥、珊瑚外國雜傳云、大秦西南、漲海中、可七八百里、到珊瑚洲、洲底盤石、珊瑚生其石上、人以鐵網取之、又十洲記云、珊瑚生南海底、如樹高三二尺、有枝無皮、似玉而紅潤、感月而生、凡枝頭皆有月暈。(此一則與八卷首公案同看。)

佛果圜悟禪師碧巖錄卷第七　終

佛果圜悟禪師碧巖錄卷第八

第七十一則

【本則】舉、百丈復問五峯、倂卻咽喉唇吻、作麼生道。(阿呵呵、箭過新羅國。)峯云、和尚也須倂卻。(攙旗奪鼓、一句截流萬機寢削。)丈云、無人處斫額望汝。(土曠人稀相逢者少。(此一則與七卷末公案同看。))

【評唱】溈山把定封疆、五峯截斷衆流、這些子、要是箇漢當面提撕、如馬前相撲、不容擬議、直下便用緊迅危峭、不似溈山盤礴滔滔地、如今禪和子、只向架下行、不能出他一頭地、所以道、欲得親切、莫將問來問、五峯答處、當頭坐斷、不妨快俊、百丈云、無人處斫額望汝、且道、是背他、是不背他、是殺是活、見他阿轆轆地、只與他一點雪竇頌云。

【頌】和尚也倂卻。(已在言前了、截斷衆流。)龍蛇陣上看謀略。(須是金牙始解、七事隨身、慣戰作家。)令人長憶李將軍。(妙手無多子、疋馬單鎗、千里萬里、千人萬人。)萬里天邊飛一鶚。(大衆見麼、且道、落在什麼處、中也、打云、飛過去也。)

【評唱】和尚也倂卻、雪竇於一句中、撥一撥云、龍蛇陣上看謀略、如排兩陣、突出突入、七縱八橫、有關將底手腳、有大謀略底人、疋馬單鎗、向龍蛇陣上、出沒自在、儞作麼生、圜繞得他、若不

是這箇人、爭知有。如此謀略、雪竇此三頌、皆就裏頭狀出底語、如此、大似李廣神箭、萬里天邊飛、一鶚、一箭落、一鵰、定也、更不放過、雪竇頌、百丈問處如一鶚、五峯答處如一箭、相似、山僧只管讚歎五峯、不覺渾身入泥水了也。

第七十二則

【本則】舉、百丈又問雲巖、倂卻咽喉唇吻、作麼生道。嚴曰、道什麼。嚴云、和尚有也未。粘皮著骨、拖泥帶水、前不搆村、後不迭店。丈云、喪我兒孫。灼然有此答、得半前落後。

【評唱】雲巖在百丈二十年作侍者、後同道吾至藥山、山問云、子在百丈會下、爲箇什麼事、巖云、透脫生死、山云、還透脫也未、巖云、渠無生死、山云、二十年在百丈習氣也未除、巖辭去見南泉、後復歸藥山、方契悟、看他古人、二十年參究、猶自半青半黃、粘皮着骨、不能頓脫、是則也是、只是前不搆村、後不迭店、不見道、語不離窠臼、焉能出蓋纏、白雲橫谷口、迷卻幾人源、洞下謂之觸破、故云、躍開山仗鳳凰樓、時人嫌觸當今號、所以道、荊棘林須是透過始得、若不透過、終始涉廉纖、斬不斷、適來道、前不搆村後不迭店、雲巖只管去點檢他人底、百丈見他如此、一時把來、打殺了也、雪竇頌云、

【頌】和尚有也未。公案現成、隨波逐浪、和泥合水。金毛獅子不踞地。灼然、有什麼用處、可惜許。兩兩三三舊路行。併卻咽喉唇吻、作麼生道、鶴鳥吐氣、鄧跟下腰過了也。大雄山下空彈指。一夜更不再活、可悲可痛、蒼天中更添怨者。

【評唱】和尚有也未、雪竇據、欵結案、是則是、只是金毛獅子、爭奈不踞地、獅子提物藏牙伏爪、踞地返擲、物無大小、皆以全威、要全其功、雲巖云、和尚有也未、只是向舊路上行、所以雪竇云、百丈向大雄山下空彈指、

第七十三則

垂示云、夫說法者、無說無示、其聽法者、無聞無得、說既無說無示、爭如不說、聽既無聞無得、爭如不聽、而無說又無聽、卻較些子、只如今諸人、聽山僧在這裏說、作麼生免得此過、具透關眼者、試舉看、

【本則】舉、僧問馬大師、離四句絕百非、請師直指某甲西來意。什麼處得這話頭來、那裏得這消息。馬師云、我今日勞倦、不能爲汝說、問取智藏去。退身三步、疑過也不知、露影、不妨是這老漢推過與別人。僧問智藏。也須與他一拶、疑過也不知。藏云、何不問和尚。草裏漢、一尾大蟲、出來也、這什麼、直得草編自縛、去死十分。僧云、和尚教來問。猶輕後箭深。藏云、我今日頭痛、不能爲汝說、問取海兄去。不妨是八十四員善知識、一樣愚、這較病痛。僧問海兄。嘿與別人、一抱、驀叫屈。海云、我到這裏、卻不會。不用忉忉、從教千古萬古黑漫漫。僧舉似馬大師。這僧卻有些子眼睛。馬師云、藏頭白海頭黑。寰中天子勅、塞外將軍令。

【評唱】這箇公案，山僧舊日，在成都參眞覺，覺云，只消看馬祖第一句，自然一時理會得，且道，這僧是會來問，不會來問，此問不妨深遠，離四句絕百非，只管作道理，不識話頭，討頭腦，不見若是山僧待馬祖道了也，便與展坐具禮三拜，看他作麼生道，當時馬祖若見這僧來，問離四句絕百非，請師直指某甲西來意，以拄杖劈脊便棒趕出，看他省不省，馬大師只管與他打葛藤，以至這漢當面蹉過，更令去問智藏，殊不知馬大師來風深辨，這僧懞懂走去問智藏，藏云，何不問和尚，僧云，和尚教來問，看他這些子拶著便轉，更無閑暇處，智藏云，我今日頭痛，不能爲汝說得，問取海兄去，這僧又去問海兄，海兄云，我到這裏卻不會，且道爲什麼，一人道頭痛，一人云不會，畢竟作麼生，這僧卻回來，舉似馬大師，師云，藏頭白海頭黑，若以解路卜度，卻謂之相瞞，有者道，只是相推過，有者道，三箇總識他問頭，所以不答，總是拍盲地，一時將古人醍醐上味，着毒藥在裏許，所以馬祖道，待汝一口吸盡西江水，卽向汝道，與此公案一般，若會得藏頭白海頭黑，便會西江水話，這僧將一擔懞懂換得箇不安樂，更勞他三人尋宿，入泥入水，畢竟這僧不瞥地，雖然一恁麼，這三箇宗師，卻被箇擔板漢勘破，如今人，只管去語言上作活計，云，白是明頭合，黑是暗頭合，只管鑽研計較，殊不知古人一句截斷意根，須是向正脈裏，自看始得，穩當，所以道，末後一句，始到牢關，把斷要津，不通凡聖，若論此事，如當門按一口劍，相似，擬議則喪身失命，又道，譬如擲劍揮空，莫論及之不及，但向八面玲瓏處，會取，不見古人道，這漆桶，或云，野狐精，或云，瞎漢，且道，與一棒一喝，是同是別，若知千差萬別，只是一般，自然八面受敵，要會藏頭白海頭黑麼，五祖先師道，封后先生，雪竇頌云，

【頌】藏頭白海頭黑。半合半開，一手撿一手擔，金聲玉振。明眼衲僧會不得。更行腳三十年，終是統，人穿卻鼻孔，山僧故是口似匾擔。馬駒踏殺天下人。義林中也須是道老漢，始得，放出道老漢。臨濟未是白拈賊。癡兒奉拜，直饒好手也被人捉了也。離四句絕百非。道什麼，也須是自點檢看，阿爺似阿爹。天上人間唯我知。用我作什麼，奪卻拄杖了，或若無人無我無得無失，奈什麼知。

【評唱】藏頭白海頭黑，且道，意作麼生，這些子，天下衲僧跳不出，看他雪竇後面合殺得好，道直饒是明眼衲僧也會不得，這箇些子消息，謂之神仙祕訣父子不傳，釋迦老子說一代時教，末後單傳心印，喚作金剛王寶劍，喚作正位，恁麼葛藤，早是事不獲已，古人略露些子鋒鋩，若是透得底人，便乃七穿八穴，得大自在，若透不得，從前無悟入處，轉說轉遠也，馬駒踏殺天下人，西天般若多羅讖，達磨云，震旦雖闊無別路，要假兒孫腳下行，金雞解銜一粒粟，供養十方羅漢僧，又六祖謂讓和尚曰，向後佛法從汝邊去，已後出一馬駒踏殺天下人，厥後江西法嗣，布於天下，時號馬祖焉，達磨六祖皆先讖馬祖，看他作略，果然別，只道，藏頭白海頭黑，便見踏殺天下人處，只這一句黑白語，千人萬人咬不破，臨濟未是白拈賊，臨濟一日示衆云，赤肉團上，有一無位眞人，常向汝等諸人面門出入，未證據者看看，時有僧出問，如何是無位眞人，臨濟下禪牀拶住云，(拶初尤切，拘也，逼迫，僧無語，濟托開云，無位眞人，是什麼乾屎橛，雪峯後聞

云、臨濟大似白拈賊、雪竇要與他臨濟相見、觀馬祖機鋒、光過於臨濟、此正是白拈賊、臨濟未是白拈賊也、雪竇一時穿卻了也、卻頌這僧道、離四句絕百非、天上人間唯我知、且莫向鬼窟裏作活計、古人云、問在答處、答在問處、早是奇特、爾作麼生、離得四句絕得百非、雪竇道、此事唯我能知、直饒三世諸佛、也覷不見、既是獨自箇知、諸人更上來求箇什麼、大溈眞如拈云、這僧恁麼問、馬祖恁麼答、離四句絕百非、智藏海兄都不知、要會麼、不見道、馬駒踏殺天下人。

第七十四則

垂示云、鎖鄉橫按、鋒前翦斷葛藤、窠臼明銳高懸、句中引出毘盧印、田地穩密處、着衣喫飯、神通遊戲處、如何湊泊、還委悉麼、看取下文。

【本則】舉、金牛和尚每至齋時、自將飯桶於僧堂前作舞、呵呵大笑云、菩薩子喫飯來。竿頭絲線從書弄、不犯清波意自殊、醍醐毒藥一時行、是則是七珍八寶、一時羅列、爭奈相逢者少。雪竇云、雖然如此、金牛不是好心。是賊識賊、賊是精識精、來說是非者便是是非人。僧問長慶、古人道、菩薩子喫飯來、意旨如何。不妨疑着、元來不知落處、長慶道、什麼。慶云、大似因齋慶讚。相打令、據款結案。

【評唱】金牛乃馬祖下尊宿、每至齋時、自將飯桶於僧堂前作舞、呵呵大笑云、菩薩子喫飯來、如此者二十年、且道、他意在什麼處、若只喚作喫飯、尋常敲魚擊鼓、亦自告報矣、又何須更自將飯桶來作、許多伎倆、莫是他顛麼、莫是提唱建立麼、若是提唱此事、何不去寶華王座上、敲床豎拂、須要如此作、什麼、今人殊不知、古人意在言外、何不且看祖師當時、初來底題目道、什麼、分明說道、教外別傳、單傳心印、古人方便、也只教爾直截承當去、後來人妄自卜度、便道、那裏有許多事、寒則向火、熱則乘涼、飢則喫飯、困則打眠、若恁麼、以常情義解詮註、遂磨一宗播土而喪、不知古人向二六時中、念念不捨要明此事、雪竇云、雖然如此、金牛不是好心、只這一句、多少人錯會、所謂醍醐上味、爲世所珍、遇斯等人、翻成毒藥、金牛既是落草爲人、雪竇爲什麼道、不是好心、因什麼、卻恁麼道、祇僧家須是有生機、始得、今人不到古人田地、只管道、見什麼心、有什麼佛、若作這見解、壞卻金牛老作家了也、須是子細看始得、若只今日明日、口快些子無有了期、後來長慶上堂、僧問、古人道、菩薩子喫飯來、意旨如何、慶云、大似因齋慶讚、尊宿家忒慈悲、瀉逗不少、是則是、因齋慶讚、爾且道、慶讚箇什麼、看他雪竇頌云。

【頌】白雲影裏笑呵呵。笑中有刀、熱發作冰、天下祇僧不知落處。兩手持來付與他。豈有恁麼事、其他具眼、只恐眼不正。三千里外見誦訛。不直半文錢、二鼎鬧逗、誦訛在什麼處、諸漢。

【評唱】白雲影裏笑呵呵、長慶道、因齋慶讚、雪竇道、兩手持來付與他、且道、只是與他喫飯、爲當別有奇特、若向箇裏知得端的、便是箇金毛獅子子、若是金毛獅子子、更不必金牛將飯桶來付與他、且道、只是與他喫飯、爲

來作舞大笑直向三千里外便知他敗缺處古人道鑒在機先不消一捉所以衲僧家尋常須是向格外用始得稱本分宗師若只據語言未免漏逗。

第七十五則

垂示云靈鋒寶劍常露現前亦能殺人亦能活人在彼在此同得同失若要提持一任提持若要平展一任平展且道不落賓主不拘回互時如何試舉看。

【本則】舉僧從定州和尚會裏來到烏臼烏臼問定州法道何似這裏。言中有要要鉗錘深探竿影草太煞痛人。僧云不別。死漢中有活底一箇半箇微涉子一般踏着實地。臼云若不別更轉彼中去便打。灼然正令當行。僧云棒頭有眼不得草草打人。也是這作家始得得卻是獅子兒。臼云今日打着一箇也又打三下。說什麼一箇千箇萬箇。僧便出去。元來是屋裏人只得受屈只是見機而作。臼云屈棒元來有人喫在。啞子喫苦瓜放去又收來點得回來堪作何用。僧轉身云爭奈杓柄在和尚手裏。依前三百六十日卻是箇伶俐衲僧。臼云汝若要山僧回與汝。知他阿誰是君阿誰是臣敢向虎口橫身忒煞不識好惡。僧近前奪臼手中棒打臼三下。也是一箇作家禪客始得賓主互換縱奪臨時。臼云屈棒屈棒。點這老漢着什麼死急。僧云有人喫在。呵呵是幾箇杓柄卻在這僧手裏。臼云草

草打着箇漢。不落兩邊知他是阿誰。僧便禮拜。臨危不變方是丈夫兒。臼云和尚卻恁麼去也。點。僧大笑而出。作家禪客天然有在猛虎須得清風隨方知處始終天下人摸索不着。臼云消得恁麼消得恁麼。可惜放過何不劈脊便棒將趕走到什麼處去。

【評唱】僧從定州和尚會裏來到烏臼臼亦是作家藉人若向這裏識得此二人一出一入千箇萬箇只是一箇作主也恁麼作賓也恁麼二人畢竟合成一家一期勘辨賓主問答始終作家看烏臼問這僧云定州法道何似這裏僧便云不別當時若不是烏臼難奈這僧何臼云若不別更轉彼中去便打爭奈這僧是作家漢便云棒頭有眼不得草草打人臼一向行令云今日打着一箇也又打三下其僧便出去看他兩箇轉轆轆地俱是作家了這一事須要分緇素別休咎這僧雖出去這公案卻未了在烏臼始終要驗他實處看他如何這僧卻似撩門拄戶所以未見得他烏臼卻云屈棒元來有人喫在這僧要轉身吐氣卻不與他爭輕輕轉云爭奈杓柄在和尚手裏烏臼是頂門具眼底宗師敢向猛虎口裏橫身云汝若要山僧回與汝這箇漢是箇肘下有符底漢所謂見義不爲無勇也更不擬議近前奪烏臼手中棒打臼三下臼云屈棒屈棒儞且道意作麼生頭上道屈棒元來有人喫在及乎到這僧打他卻道屈棒屈棒僧云有人喫在臼云草草打着一箇也到末後自喫棒爲什麼亦道草草打着箇漢當時若不是這僧卓朔地也不奈他何這僧便禮拜這箇禮拜最毒也不是好心若不是烏臼也識他不破烏臼云卻恁麼去也其僧大笑而出烏臼云消得恁麼消得恁麼看他作

家相見，始終賓主分明，斷而能續，其實也只是互換之機，他到這裏，亦不道有箇互換處，自是他古人絕情塵意想，彼此作家，亦不道有得有失，雖是一期間語言，兩箇活鱍鱍地，都有血脈針線，若能於此見得，亦乃向十二時中歷歷分明，其僧便出，是雙放，已下是雙收，謂之互換也。雪竇正恁麼地頌出。

【頌】呼卽易。天下人總疑著，臭肉引來蠅，天下衲僧總不知落處。遣卽難。不妨勦絕，海上明公秀。互換機鋒子細看。一山一入，二俱作家，一條拄杖關人扶，且道在阿誰邊。劫石固來猶可壞。袖裏金鎚如何執取，千聖不得。滄溟深處立須乾。向什麼處安排，棒頭有眼，瞎許他親得。烏白老烏白老。可惜許，這老漢不識好惡。幾何般。也是箇無端漢，百千萬事。與他杓柄太無端。已在言前，沿合打破蔡州，好與三十棒，且道過在什麼處。

【評唱】呼卽易，遣卽難，一等是落草，雪竇忒煞慈悲，尋常道，呼蛇易，遣蛇難，如今將箇瓢子吹來，喚蛇卽易，要遣時卽難，一似將棒與他卻易，復奪他棒，遣去卻難，須是有本分手脚，方能遣得他去，烏白是作家，有呼蛇底手脚，亦有遣蛇底手段，這僧也不是瞌睡底烏白問，定州法道，何似這裏，便是呼他，烏白便打，是遣他，僧云，棒頭有眼不得草草打人，卻轉在這僧處，便是呼來，烏白云，汝若要，山僧回與汝，僧便近前奪棒，也打三下，卻是這僧遣去，乃至這僧大笑而出，烏白云，消得恁麼，消得恁麼，此分明是遣得他，恰好，看他兩箇，機鋒互換，絲來線去，打成一片，始終賓主分明，有時主卻作賓，有時賓卻作主，雪竇也讚歎不及，所以道，互換之機，敎人且子細看，劫石固來猶可壞，謂此劫石，長四十里，廣八萬四千由旬，厚八萬四千由旬，凡五百年，乃有天人下來，以六銖衣袖，拂一下，又去至五百年，又來如此拂，拂盡此石，乃爲一劫，謂之輕衣拂石劫，雪竇道，劫石固來猶可壞，石雖堅固，尙爾可消磨盡，此二人機鋒，千古萬古，更無有窮盡，滄溟深處立須乾，任是滄溟，洪波浩渺，白浪滔天，若敎此二人向內立地，此滄溟也須乾竭，雪竇到此，一時頌了，末後更道，烏白老烏白老，幾何般，或擒或縱，或殺或活，畢竟是幾何般，與他杓柄太無端，這箇拄杖子，三世諸佛也用，歷代祖師也用，宗師家也用，與人抽釘拔楔，解粘去縛，爭得輕易分付與人，雪竇意要獨用，賴值這僧，當時只與他平展，忽若旱地起雷，看他如何當抵，烏白過杓柄與人去，豈不是太無端。

第七十六則

垂示云，細如米末，冷似氷霜，富塞乾坤，（富拍滿也。切）離明絕暗，低低處觀之有餘，高高處平之不足，把住放行，總在這裏許，還有出身處也無，試擧看。

【本則】擧，丹霞問僧，甚處來。正是不可總沒來處也，要知來處也不難。僧云，山下來。著草鞋入彌陀肚裏過也，只是不合來，知他是黃是絲。霞云，喫飯了也未。第一杓惡水澆何必定盤星，要知端的。僧云，喫飯了。果然撞著箇露柱，卻被旁人穿卻鼻孔，元來是箇無孔鐵鎚。霞云，將飯來與汝喫，底人，還具眼麼。雖然是倚勢欺人，也是狐假虎威，款結案，當時好掀倒禪床，無端作什麼。僧無語。果然走不得，這僧若是作家向他道，與和尙眼一般。長慶問保福，將飯與人

喫報恩有分爲什麼不具眼。也只道得一半、通身是運身是、一刀兩段、一手擡一手搦。福云、施者受者、二俱瞎漢。據令而行、一句道盡、學人遇其人。長慶云、盡其機來、還成瞎否。識甚好惡、箭白未肯、討什麼碗。福云、道我瞎得麼。兩箇俱是草裏漢、龍頭蛇尾、當時待他道盡其機來、還成瞎否、只向他道瞎也、只道得一半、一等是作家、爲什麼前不攜村後不迭店。

【評唱】鄧州丹霞天然禪師、不知何許人、初習儒學、將入長安應舉、方宿於逆旅、忽夢白光滿室、占者曰、解空之祥、偶一禪客、問曰、仁者何往、曰、選官去、禪客曰、選官何如選佛、霞云、選佛當往何所、禪客曰、今江西馬大師出世、是選佛之場、仁者可往、遂直造江西、才見馬大師、以兩手托幞頭脚(一作額)、馬師顧視云、吾非汝師、南嶽石頭處去、遽抵南嶽、還以前意投之、石頭云、着禮廠去、(廠齒兩切、馬屋無壁也)師禮謝、入行者堂、隨衆作務、凡三年、石頭一日告衆云、來日剗佛殿前草、至來日、大衆各備鍬鋤、剗草、丹霞獨以盆盛水淨頭、於師前跪膝、石頭見而笑之、便與剃髮、又爲說戒、丹霞掩耳而出、便往江西、再謁馬祖、未參禮、便去僧堂內騎聖僧頸而坐、時大衆驚愕、急報馬祖、祖躬入堂、視之曰、我子天然、霞便下禮拜曰、謝師賜法號、因名天然、他古人天然、如此穎脫、所謂選官不如選佛也、傳燈錄中、載其語句、直是壁立千仞、句句有與人抽釘拔楔底手脚、似問這僧道、什麼處來、僧云、山下來、這僧卻不通來處、一如具眼倒去勘主家相似、當時若不是丹霞、也難爲收拾、丹霞卻云、喫飯了也未、頭邊總未見得、此是第二回勘他、僧云、喫飯了也、憧憧漢、元來不會、霞云、將飯與汝喫底人、還具眼麼、僧無語、丹霞意道、與爾這般漢、飯喫堪作什麼、這僧若是箇漢、試與他一箭、看他如何、雖然如是、丹霞也未放爾在、這僧便眼眨眨地無語、眨側洽切、目動也、)保福長慶、同在雪峯會下、常舉古人公案、商量、長慶問保福、將飯與人喫、報恩有分、爲什麼不具眼、不必盡問公案中事、大綱借此語作話頭、要驗他諦當處、保福云、施者受者、二俱瞎漢、快哉到這裏、只論當機事、家裏有出身之路、長慶云、盡其機來、還成瞎否、保福云、道我瞎得麼、保福意謂、我恁麼具眼、與爾道了也、還道我瞎得麼、雖然如是、半合半開、當時若是山僧、等他道盡其機來、還成瞎否、只向他道瞎、可惜許、保福當時若下得這箇瞎字、免得雪竇許多葛藤、雪竇亦只用此意頌。

【頌】盡機不成瞎。只道得一半、也要驗他過、言猶在耳。按牛頭喫草。失錢遭罰、牛河南牛河北、殊不如傷鋒犯手。四七二三諸祖師。有條攀條、帶累先聖、不唯只帶累一人。寶器持來成過咎。可煞深、天下納僧跳不出、且道、深多少。無處尋。在爾脚跟下、摸索不着。天上人間同陸沉。天下納僧一坑埋卻、還有活底人麼、放過一着、着天着天。

【評唱】盡機不成瞎、長慶云、盡其機來、還成瞎否、保福云、道我瞎得麼、一似、按牛頭喫草、須是等他自喫、始得、那裏按他頭教喫、雪竇恁麼頌、自然見得丹霞意、四七二三諸祖師、寶器持來成過咎、不唯只帶累長慶、乃至西天二十八祖、此土六祖、一時埋沒、釋迦老子、四十九年、說一大藏教、末後唯傳這箇寶器、永嘉道、不是標形虛事、如來寶杖親蹤跡、若作保福見解、寶器持來、都成過咎、過咎深、無處尋、這箇與爾說不得、但去靜坐、句句他句中、點檢看、既是過咎深、因什麼卻無處尋、此非小過也、將祖師大事、一齊於陸地上平沈卻、所以雪竇道、天上人間同陸

沈。

第七十七則

垂示云。向上轉去。可以穿天下人鼻孔。似鶻捉鴉。向下轉去。自己鼻孔在別人手裏。如龜藏殼。箇中忽有箇出來道。本來無。向上向下。用轉作什麼。只向伊道。我也知。儞向鬼窟裏作活計。且道。作麼生。辨箇緇素。良久云。有條攀條。無條攀例。試舉看。

【本則】舉。僧問雲門。如何是超佛越祖之談。（問。學地忽雷拶。）門云。餬餅。（舌拄上顎。過也。）

【評唱】這僧問雲門。如何是超佛越祖之談。門云。餬餅。還覺寒毛卓豎麼。衲僧家問佛問祖。問禪問道。問向上向下了。更無可得問。卻致箇問端。問超佛越祖之談。雲門是作家。便水長船高。泥多佛大。便答道。餬餅。可謂道不虛行。功不浪施。雲門復示衆云。儞勿可作了見人道。着祖師意。便問。超佛越祖之談。道理。儞且喚什麼作佛。喚什麼作祖。卽說超佛越祖之談。便問箇出三界。儞把三界來看。有什麼見聞覺知。隔礙著儞。有什麼聲色佛法。與汝可了了。箇什麼碗。以那箇爲差殊之見。他古聖。勿奈儞何。橫身爲物道。箇舉體全眞。物物覿體。不可得。我向汝道。直下有什麼事。早是埋沒了也。會得此語。便識得餬餅。五祖云。驢屎比麝香。（一作馬糞。）所謂直截根源佛所印。摘葉尋枝我不能。到這裏。欲得親切。莫將問來問。看這僧問。如何是超佛越祖之談門云。餬餅。還識羞慚麼。還覺漏逗麼。有一般人。杜撰道。雲門見兎放鷹。便道。餬餅。若恁麼。將餬餅。便是超佛越祖之談。見去。豈有活路。莫作餬餅會。又不作超佛越祖會。便是活路也。與麻三斤。解打鼓。一般。雖然只道餬餅。其實難見。後人多作道理云。龜言及細語皆歸。第一義。若恁麼會。且去作座主。一生贏得多知多解。如今禪和子道。超佛越祖之時。諸佛也踏在腳跟下。祖師也踏在腳跟下。所以雲門。只向他道餬餅。既是餬餅。豈解超佛越祖。試去參詳看。諸方頌極多。盡向問頭邊作言語。唯雪竇頌得最好。試舉看。頌云。

【頌】超談禪客問偏多。（箇箇出來便作這般見解。如麻似粟。）縫罅披離見也麼。（已在言前。開也。自屎不覺臭。）餬餅堅來猶不住。（將木楗子換卻餬眼睛了也。）（祝。反六切。塞也。）至今天下有譏訛。（盡箇圓相。）

（評唱）超談禪客問偏多。此語禪和家偏愛。問。不見雲門道。儞諸人橫擔拄杖。道我參禪學道。便覺箇超佛越祖道理。我且問儞。十二時中。行住坐臥。屙屎放尿。至於茅坑裏蟲子。市肆買賣羊肉案頭。還有超佛越祖底道理麼。道得底出來。若無。莫妨我東行西行。便下座。有者更不識好惡。作圓相。土上加泥。添枷帶鎖。縫罅披離。見也麼。他致問處。有大小大縫罅。雲門見他問處披離。所以將餬餅。擱縫塞定。這僧猶自不肯住。卻更問。是故雪竇道。餬餅堅來猶不住。至今天下有譏訛。如今禪和子。只管去餬餅上解會。不然去超佛越祖處作道理。既不在這兩頭。舉竟在什麼處。三十年後。待山僧換骨出來。卻向儞道。

第七十八則

【本則】擧、古有十六開士。成群作隊、有什麼用、一隊不唧𠺕漢。於浴僧時隨例入浴。撞着露柱、漆桶作什麼。忽悟水因。惡水驀頭澆。諸禪德作麼生會他道妙觸宣明。更不干別人事、作麼生會他、撲落非他物。成佛子住。天下衲僧到這裏摸索不着、兩頭三面作什麼。也須七穿八穴始得。一棒一條痕、莫辜負山僧好、撞着磕着、還曾見德山臨濟麼。

【評唱】楞嚴會上、跋陀婆羅菩薩、與十六開士、各修梵行、乃各說所證圓通法門之因、此亦二十五圓通之一數也、他因浴僧時、隨例入浴、忽悟水因云、既不洗塵、亦不洗體、且道、洗箇什麼、若會得去、中間安然、得無所有、千箇萬箇、更近傍不得、所謂以無所得是眞般若、若有所得、是相似般若、不見達磨謂二祖云、將心來與汝安、二祖云、覓心了不可得、這裏些子、是衲僧性命根本、更總不消得如許多葛藤、只消道箇忽悟水因、自然了當、既不洗塵亦不洗體、且道、悟箇什麼、到這般田地、一點也着不得、道箇佛字也須諱卻、他道、妙觸宣明成佛子住、宣則是顯也、妙觸是明也、既悟妙觸、成佛子住、卽住佛地也、如今人亦入浴亦洗水、也恁麼觸、因甚卻不悟、皆被塵境惑障、粘皮着骨、所以不能便惺惺去、若向這裏洗亦無所得、觸亦無所得、水因亦無所得、且道、是妙觸宣明、不是妙觸宣明、若向箇裏直下見得、便是妙觸宣明、成佛子住、如今人亦觸、還見妙處麼、妙觸非常觸與觸者合則爲觸、離則非也、玄沙過嶺、磕着脚指頭、以至德山棒、豈不是妙觸、雖然恁麼、也須是七穿八穴始得、若只向身上摸索、有什麼交涉、儞若七穿八穴去、何須入浴、便於一毫端上、現寶王刹、向微塵裏、轉大法輪、一處透得、千處萬處一時透、莫只守一窠一窟、一切處都是觀音入理之門、古人亦有聞聲悟道、見色明心、若一人悟去則故是、因甚十六開士、同時悟去、是故古人、同修同證、同悟同解、雪竇拈他數意、令人去妙觸處會取、出他數眼頌、免得人去教網裏籠罩半醉半醒、要令人直下灑灑落落、頌云、

【頌】了事衲僧消一箇。現有一箇、朝打三千暮打八百、跳出金剛圈、一箇也不消得。長連床上展脚臥。果然。是箇瞌睡漢、論劫不論禪。夢中曾說悟圓通。早是瞌睡更說夢、卻許儞參見、寐語作什麼。香水洗來驀面唾。咄、土上加泥又一重、莫來淨地上屙。

【評唱】了事衲僧消一箇、且道、了得箇什麼事、作家禪客、聊聞擧着、剔起便行、似恁麼衲僧、只消得一箇、何用成群作隊、長連床上展脚臥、古人道、明明無悟法、悟了卻迷人、長舒兩脚睡、無僞亦無眞、所以胸中無一事、飢來喫飯困來眠、雪竇意道、儞若說入浴悟得妙觸宣明、在這般無事衲僧分上、只似夢中說夢、所以道、夢中曾說悟圓通、香水洗來驀面唾、只是惡水驀頭澆、更說箇什麼圓通、雪竇道、似這般漢、正好驀頭驀面唾、山僧道、土上加泥又一重。

第七十九則

垂示云、大用現前、不存軌則、活捉生擒、不勞餘力、且道、是什麼人、曾恁麼來、試擧看。

【本則】舉、僧問投子、一切聲是佛聲、是否。也解、捋虎鬚、霄天蠹露、自屎不覺臭。投子云、是。儼、設一給人、食、與、儞了也、拈、放一邊、是什麼心行。僧云、和尚莫屎沸碗鳴聲。只見、錐頭利、不見、鑿頭方、道、什麼、果然納、敗缺。又問、麁言及細語、皆歸第一義、是否。家、都水切、習也。）投子便打。若、好打放過、則不可。又問、投子云、是。又是、賓、身與、儞了也、陷虎之機、也是什麼心行。僧云、喚和尚作一頭驢、得麼。只見、錐頭利、不見、鑿頭方、道、有、逆水之波、只是頭上無角、含血噴人。投子便打。著、不可、放過、好打拄杖未、到、折、因、什麼、便休去。第二、同捋、虎鬚、抱、臟叫、風作、什麼、東西南北、貓有、影、響在。投子便打。

【評唱】投子朴實頭、得、逸群之辯、凡有、致、問、開口便見、膽、不費、餘力、便坐斷他舌頭、可、謂運籌帷幄之中、決勝千里之外、這僧將、聲色佛法見解、貼、在他額頭上、逢、人便問、投子作家、來風深辨、這僧知、投子實頭、合下做、箇圈纏子、教、投子入來、所以有、後語、投子卻使、陷虎之機、釣他後語、出來、這僧接、他答處、道、和尚莫、屎沸碗鳴聲、果然一釣便上、若是別人則不、奈、這僧何、投子具眼、隨、後便打、咬豬狗底手腳、須、還、作家、始得、左轉也隨、他阿轆轆地、右轉也隨、他阿轆轆地、這僧既是、做、箇圈纏子、要、來捋、虎鬚、殊不、知投子、更在、他圈纏頭上、投子便打、這僧可惜許、有頭無尾、當時等、他拈、棒、便與、掀、倒禪床、直饒投子全機、也須、倒退三千里、又問、麁言及細語、皆歸、第一義、是否、投子亦云、是、一似、前頭語、無、異、僧云、喚、和尚、作、一頭驢、得麼、投子又打、這僧雖、然作、窠窟、也不、妨奇特、若是曲彔木床上老漢、頂門無眼也難、折、挫他、投子有、轉身處、這僧既做、箇道理、要、攙、他行市、到了依、舊不、奈、投子老漢何、不、見、巖頭道、若論、戰也箇箇立、在轉處、投子放去太遲、收來太急、這僧當時若解、轉、身吐、氣、豈不作、得箇口似、血盆、底漢、諸僧家一不做二不、休、這僧既不能、擲、卻、被、投子穿、了鼻孔、頌云。

【頌】投子投子。灼然、天下無、這、買、賣、老漢、教、領、人家男女。機輪無阻。有什麼、奈何、他、處、也有、些子。放一得二。換、卻、儞眼睛、什麼、處見、投子。同彼同此。恁麼來也、喫、棒、不恁麼來也、喫、棒、閻羅、替、他、便打。可憐無限弄潮人。當、林中、放出、一箇半箇、放、出、這兩箇漢、天下、礙、僧、恁麼去。畢竟還落湖中死。可惜、許、爭、奈、出、這、回、纏、不、得、恁、人、莫、向、恁、人、說。忽然活。禪床震動、驚、殺、山僧、也倒退三千里。百川倒流鬧澌澌。蹔、徒、勞、行、思、山僧不、敢、開、口、投、子老漢也須、是、拗、折、拄杖、始、得。（澌、古活切、水流聲。）

【評唱】投子投子、機輪無阻、投子尋常道、儞總道、投子實頭、忽然下、山三步、有、人問、儞道、如何是投子實頭處、儞作麼生抵對、古人道、機輪轉處、作者猶迷、他機輪轉轆轆地、全無阻隔、所以雪竇道、放一得二、不見、僧問、如何是佛、投子云、佛、又問、如何是道、投子云、道、又問、如何是禪、投子云、禪、又問、月未圓時如何、投子云、吞卻三箇四箇、圓後如何、吐卻七箇八箇、投子接、人、常用、此機、答、這僧、只是一箇是字、這僧兩回被、打、所以雪竇道、同彼同此、四句一時、頌、投子了也、末後頌、這僧道、可、憐無限弄潮人、這僧敢攙、旗奪、鼓道、和尚莫、屎沸碗鳴聲、又道、喚、和尚、作、一頭驢、得麼、此便是弄潮處、這僧做、盡伎倆、依前死、在投子句中、投子便打、此僧便是畢竟還落湖中死、雪竇出、這僧云、忽然活、便與、掀、倒禪床、投子也須、倒退三千里、直得百川倒流鬧澌澌、非唯禪床震動、亦乃山川岌嶪、（岌、逆及切、嶪、逆各切。）天地陡暗、苟或箇箇如、此、山僧目打、退鼓、諸人

向什麼處安身立命。

第八十則

【本則】學僧問趙州初生孩子還具六識也無。（閃電之機、恐二什麼初生孩兒子。）趙州云、急水上打毬子。（過也、後鵝鈔不過、又也要驗過。）僧復問投子、急水上打毬子意旨如何。（也是作家同驗過、還會麼、過也。）子云、念念不停流。（打葛藤漢。）

【評唱】此六識、教家立爲正本、山河大地、日月星辰、因其所以生、來爲先鋒、去爲殿後、古人道、三界唯心、萬法唯識、若證佛地、以八識轉爲四智、教家謂之改名不改體、根塵識是三、前塵元不會分別、勝義根能發生識、識能顯色分別、卽是第六意識、第七識末那識、能去執持世間一切影事、令人煩惱不得自由自在、皆是第七識、到第八識、亦謂之阿賴耶識、亦謂之含藏識、含藏一切善惡種子、這僧知敎意、故將來問趙州道、初生孩子還具六識也無、初生孩兒、雖具六識、眼能見耳能聞、然未曾分別六塵、好惡長短、是非得失、他恁麼時總不知、學道之人、要復如嬰孩、榮辱功名、逆情順境、都動他不得、眼見色與盲等、耳聞聲與聾等、如癡似兀、其心不動如須彌山、這箇是衲僧家眞實得力處、古人道、衲被蒙頭萬事休、此時山僧都不會、若能如此、方有少分相應、雖然如此、爭奈一點也瞞他不得、山依舊是山、水依舊是水、無造作、無緣慮、如日月運於大虛、未嘗暫止、亦不道我有許多名相、如天普蓋、似地普擎、爲無心故、所以長養萬物、亦不道我有許多功行、天地爲無心故、所以長久、若有心則有限齊、得道之人亦復如是、於無功用中施功用、一切逢情順境、皆以慈心攝受、到這裏、古人尙自呵責道、了了了了時無、可了了、玄玄玄處直須呵、又道、事事通兮物物明、達者聞之暗裏驚、又云、入聖超凡不作聲、臥龍長怖碧潭清、人生若得長如此、大地那能留一名、然雖恁麼、更須跳出窠窟、始得、豈不見敎中道、第八不動地菩薩、以無功用智、於一微塵中、轉大法輪、於一切時中、行住坐臥、不拘得失、任運流入薩婆若海、衲僧家到這裏、亦不可執着、但隨時自在、遇茶喫茶、遇飯喫飯、這箇向上事、着箇定字也不得、着箇不定字也不得、石室善道和尙示衆云、汝不見小兒出胎時、何曾道我會看敎、當恁麼時、亦不知有佛性義無佛性義、及至長大便學種種知解、出來便道、我能我解、不知是客塵煩惱、十六觀行中、嬰兒行爲最、哆哆啊啊時、喻學道之人、離分別取捨心、故讚歎嬰兒可況喻取之、若謂嬰兒是道、今時人錯會、南泉云、我十八上、解作活計、趙州道、我十八上解破家散宅、又道、我在南方二十年除粥飯二時、是雜用心處、曹山問僧、菩薩定中、聞香象渡河、歷歷地、出什麼經、僧云、涅槃經、山云、定前聞定後聞、僧云、和尙流也、山云、灘下接取、又楞嚴經云、湛入合湛入識邊際、又楞伽經云、相生執礙、想生妄想、流注生則逐妄流轉、若到無功用地、猶在流注相中、須是出得第三流注生相、方始快活自在、所以溈山問仰山云、寂子如何、仰山云、和尙問他見解、問他行解、若問他行解、某甲不知、若是見解如一瓶水注一餅水、若得如此、皆可以爲一方之師、趙州云、急水上打毬子、早是轉轆轆地、更向急水上打時、眨眼便過、譬如楞嚴經云、如急流水望爲恬靜、古人云、譬如駛流水、（駛音史、疾也。）水流無定止、各各不相知、諸法亦

如是趙州答處意渾類此其僧又問投子急水上打毬子意旨如何子云念念不停流自然與他問處恰好古人行履綿密答得只似一箇更不消計較儞纔問他早知儞落處了也孩子六識雖然無功用爭奈念念不停如密水流投子恁麼答可謂深辨來風雪竇頌云

【頌】六識無功伸一問。有眼如盲有耳如聾明珠在掌一句道盡。作家曾共辨來端。何必要辨箇端緒唯證乃知。茫茫急水打毬子。始終一貫過也道什麼。落處不停誰解看。看即瞎瞎也難下接取。

【評唱】六識無功伸一問古人學道養到這裏謂之無功之功與嬰兒一般雖有眼耳鼻舌身意而不能分別六塵蓋無功用也既到這般田地便乃降龍伏虎坐脫立亡如今人但將目前萬境一時歇卻何必八地以上方乃如是雖然無功用處依舊山是山水是水雪竇前面頌云活中有眼還同死藥忌何須鑒作家蓋爲趙州投子是作家故云作家曾共辨來端茫茫急水打毬子投子道念念不停流諸人還知落處麼雪竇末後教人自着眼看是故云落處不停誰解看此是雪竇活句且道落在什麼處

佛果圜悟禪師碧巖錄卷第八　終

佛果圜悟禪師碧巖錄卷第九

第八十一則

垂示云攙旗奪鼓千聖莫窮坐斷誦訛萬機不到不是神通妙用亦非本體如然且道憑箇什麼得恁麼奇特

【本則】舉僧問藥山平田淺草麋鹿成羣如何射得麋中麋。把鬚投衙云侍者拖出這死漢。擊頭帶角出來腦後拔箭。(主。音)山云看箭。就身打劫下坡不走快便難逢着。僧放身便倒。灼然不同一死更不再活弄精魂漢。山云弄泥團漢有什麼限。可惜許放過據令而行不勢再勁前箭猶輕後箭深。僧便走。箭木喜瞪眼死中得活猶有氣息在。山云弄一手攜一手搦直饒走百步也須喪身失命復云看箭且道雪竇意落在什麼處若是同死同生藥山直得目瞪口呆一向似無孔鐵鎚堪作何用。(瞪直耕切怒目直視也。呆逮立伽二切張口貌。)

【評唱】這公案洞下謂之借事問亦謂之辨主問用明當機鹿與麋尋常易射唯有麋中麋是鹿中之王最是難射此麋鹿常於崖石上利其角如鋒鋩頻利以身護惜群鹿虎亦不能近傍這僧亦似惺惺引來問藥山用明第一機山云看箭作家宗師不妨奇特如擊石火似閃電光

豈不見三平初參石鞏鞏才見來便作彎弓勢云看箭三平撥開胸云此是殺人箭活人箭鞏彈弓弦三下三平便禮拜鞏云三十年一張弓兩隻箭今日只射得半箇聖人便拗折弓箭三平後舉似大顛顛云既是活人箭爲什麼向弓弦上辨三平無語顛云三十年後要人舉此話也難得法燈有頌云古有石鞏師架弓矢而坐如是三十年知音無一箇三平中的來父子相投和子細返思量元伊是射捎石鞏作略與藥山一般三平頂門具眼向一句下便中的一似藥山道看箭其僧便作麼放身倒這僧也似作家只是有頭無尾既做圈續要陷藥山爭奈藥山是作家一向逼將去山云侍者拖出這死漢如展陣向前相似其僧便走也好是則是爭奈不脫灑粘柳粘手所以藥山云弄泥團漢有什麼限藥山當時若無後語千古之下遭人檢點山云看箭這僧便倒且道是會是不會若道是會藥山因什麼卻恁麼道弄泥團漢這箇最惡正似僧問德山學人仗鏌鋣劍擬取師頭時如何山引頸近前云囫囵僧云師頭落也德山低頭歸方丈又巖頭問僧什麼處來僧云西京來巖頭云黃巢過後曾收得劍麼僧云收得巖頭引頸近前云囫囵僧云師頭落也巖頭呵呵大笑這般公案都是陷虎之機正類此恰是藥山不管他只爲識得破只管逼將去雪竇云這僧三步雖活五步須死這僧雖甚解看箭便放身倒山云侍者拖出這死漢僧便走雪竇道只恐三步外不活當時若跳出五步外天下人便不奈他何作家相見須是賓主始終互換無有間斷方有自由自在分這僧當時既不能始終所以遭雪竇檢點後面亦自用他語頌云

【頌】塵中塵。高着眼看擎頭戴角去也。君看取。何似生第二頭走要射便射看作什麼。下一箭。中也須知藥山好手。走三步。活鼠鼠地只得三步死了多時。五步若活。作什麼跳百步忽有箇死中得活時如何。成羣趂虎。二俱並照須與他倒退始得天下納僧放他出頭也只在草窠裏。正眼從來付獵人。爭奈藥山未肯承當這話藥山則故是雪竇又作麼生一也不干藥山事也不干雪竇事也不干山僧事也不干上座事。雪竇高聲云看箭。一狀領過也須與他倒退始得打云已寨卻僵咽喉了也。

【評唱】塵中塵君看取納僧家須是具塵中塵底眼有塵中塵底頭角有機關有作略任是插翼猛虎戴角大蟲也只得全身遠害這僧當時放身便倒自道我是塵下一箭走三步山云看箭僧便倒山云侍者拖出這死漢這僧便走也甚好爭奈只走得三步五步若活成群趂虎雪竇道只恐五步須死當時若跳得出五步外活時便能成群去趂虎其塵中塵角利如鎗虎見亦畏之而走塵爲鹿中王常引群鹿趂虎入別山雪竇後面頌藥山亦有當機出身處正眼從來付獵人藥山如能射獵人其僧如塵雪竇是時因上堂舉此語束爲一團話高聲道一句云看箭坐者立者一時起不得。

第八十二則

垂示云竿頭絲線具眼方知格外之機作家方辨且道作麼生是竿頭絲線格外之機試舉看。

【本則】舉僧問大龍色身敗壞如何是堅固法身。話作兩橫分開也好。龍云山花開似錦澗水湛如藍。無孔笛子撞着氈拍板渾崙擊不破人從陳州來卻往許州去。

【評唱】此事若向言語上覓、一如掉棒打月、且得沒交涉、古人分明道、欲得親切、莫將問來問、何故、問在答處、答在問處、這僧擔一擔莽鹵、換一擔鶻突、致箇問端、敗缺不少、若不是大龍、爭得蓋天蓋地、他恁麼問、大龍恁麼答、一合相、更不移易一絲毫頭、一似見兎放鷹看、孔着楔、三乘十二分教、還有這箇時節麼、也不妨奇特、只是言語無味、杜塞人口、是故道、一片白雲橫谷口、幾多歸鳥夜迷巢、有者道、只是信口答將去、若恁麼會、盡是滅胡種族漢、殊不知、古人一機一境、敲枷打鎖、一句一言、渾金璞玉、若是衲僧眼腦、有時把住、有時放行、照用同時、人境俱奪、雙放雙收、臨時通變、若無大用大機、爭解恁麼籠天罩地、大似明鏡當臺、胡來胡現、漢來漢現、此公案與花藥欄話一般、然意卻不同、這僧問處不明、大龍答處恰好、不見僧問雲門樹凋葉落時如何、門云、體露金風、此謂之箭鋒相拄、這僧問大龍、色身敗壞、如何是堅固法身、大龍云、山花開似錦、澗水湛如藍、一如君向西秦、我之東魯、他既恁麼行、我卻不恁麼行、與他雲門一倍相返、那箇恁麼行卻易見、這箇卻不恁麼行卻難見、大龍不妨三寸甚密、雪竇頌云。

【頌】問曾不知。東西不辨、弄物不知名、實帽相頭。答還不會。南北不分、換卻鼎鑊、江南江北。月冷風高。何似生、今日正當這時節、天下人有眼不會見、有耳不會聞。古巖寒檜。不雨時更好、無孔笛子、撞着氈拍板。堪笑路逢達道人。也須是親到這裏、始得、還我拄杖子來、成一軍作隊、恁麼來。不將語默對。向什麼處見大龍、將箇什麼對他好。手把白玉鞭。一至七、拗折了也。驪珠盡擊碎。留與後人看、可惜許。不擊碎。故過一著、又恁麼去。增瑕纇。弄泥團作什麼、傳見郎當、過犯彌天。國有憲章。論法者體、朝打三千、暮打八百。三千條罪。只道得一半、在、八萬四千、無量劫來、墮無間業、也未還得一半在。

【評唱】雪竇頌得、最有工夫、前來頌雲門話、卻云、問卽有宗、答亦攸同、這箇卻不恁麼、卻云、問曾不知、答還不會、大龍答處傍瞥、直是奇特、分明是誰恁麼問、未問已前、早納敗缺了也、他答處俯能恰好、應機宜道、山花開似錦、澗水湛如藍、儞諸人如今作麼生、會大龍意、答處傍瞥、直是奇特、所以雪竇頌出、教人知道、月冷風高更撞着古巖寒檜、且道、他意麼作生會、所以適來道、無孔笛子、撞着氈拍板、只這四句頌了也、雪竇又怕人作道理、卻云、堪笑路逢達道人、不將語默對、此是香嚴頌、雪竇引用也、不見僧問趙州、不將語默對、未審將什麼對、州云、呈漆器、這箇便同適來話、不落儞情塵意想、一似什麼、手把白玉鞭、驪珠盡擊碎、是故祖令當行十方坐斷、此是劒及上事、須是有恁麼作略、若不恁麼、總辜負從上諸聖、到這裏要無些子事、自有好處、便是向上人行履處也、既不擊碎、必增瑕纇、便見漏逗、畢竟是作麼生得、是國有憲章、三千條罪、五刑之屬三千、莫大於不孝、憲是法章、是條三千條罪、一時犯了也、何故、如此、只爲不以本分事接人、若是大龍必不恁麼也。

第八十三則

【本則】舉、雲門示衆云、古佛與露柱相交、是第幾機。三千里外沒交涉、七花八裂。自

代云。東家人死、西家人助哀、一合相不可得。南山起雲。乾坤莫覩、刀斫不入。北山下雨。點滴不施、牛河南牛河北。

【評唱】雲門大師、出八十餘員善知識、遷化後、七十餘年開塔觀之、儼然如故、他見地明白、機境迅速、大凡垂語別語代語、直下孤峻、只這公案、如擊石火似閃電光、直是神出鬼沒、慶藏主云、一大藏教、還有這般說話麼、如今人多向情解上作活計道、佛是三界導師四生慈父、既是古佛、爲什麼卻與露柱相交、若恁麼會、卒摸索不着、有者喚作無中唱出、殊不知宗師家說話、絕意識絕情量、絕生死絕法塵、入正位更不存一法、儞纔作道理計較、便經腳經手、且道、他古人意作麼生、但只使心境一如、好惡是非、擬動他不得、便說有也得、無也得、有機也得、無機也得、到這裏拍拍是令、五祖先師道、大小雲門元來膽小、若是山僧、只向他道、第八機、他道、古佛與露柱相交、是第幾機、一時間且向目前包裹、僧問、未審意旨如何、門云、一條絲三十文買、他有定乾坤底眼、既無人會、後來自代云、南山起雲、北山下雨、且與後學通箇入路、所以雪竇、只拈他定乾坤處、教人見、若纔犯計較、露箇鋒鋩、則當面蹉過、只要原他雲門宗旨明、他峻機、所以頌出云、

【頌】南山雲。乾坤莫覩、刀斫不入。北山雨。點滴不施、牛河南牛河北。四七二三面相覩。幾處覓不見、帶累徐行利、那裏得道消息來。大唐國裏未打鼓。還一回、還人、露柱掛燈籠。新羅國裏曾上堂。東湧西沒東行不見四我話頭來、先行不到未後太過。苦中樂。教阿誰知。樂中苦。兩重公案、使誰舉、苦便苦樂便樂、那裏有兩頭三面來。誰道黃金如糞土。具眼者鑑、試拂拭看、阿剌剌、可惜許、且道、是古佛是露柱。

【評唱】南山雲、北山雨、雪竇買帽相頭看、風使帆、向劍刃上、與儞下箇注腳、直得四七二三面相覩、也莫錯會、此只頌古佛與露柱相交、是第幾機了也、後面劈開路打葛藤、要見他意、新羅國裏曾上堂、大唐國裏未打鼓、雪竇向雷轉星飛處、便道、苦中樂、樂中苦、雪竇似堆一堆七珍八寶在這裏了、所以末後有這一句子云、誰道黃金如糞土、此一句、是禪月行路難詩、雪竇引來用、禪月云、山高海深人不測、古往今來轉青碧、淺近輕浮莫與交、地卑只解生荊棘、誰道黃金如糞土、張耳陳餘斷消息、行路難行路難、君自看、且莫土曠人稀、雲居羅漢、

第八十四則

垂示云、道是是無可是、言非非無可非、是非已去得失兩忘、淨裸裸赤灑灑、且道、面前背後是箇什麼、或有箇衲僧出來道、面前是佛殿三門、背後是寢堂方丈、且道、此人還具眼也無、若辨得此人、許儞親見古人來、

【本則】舉、維摩詰問文殊師利。道、汝太煞合閻一場、合取口。何等是菩薩入不二法門。知而故犯。文殊曰、如我意者。道什麼、直得分疎不下、擔枷過狀、把鬼投衙。於一切法。喚什麼作一切法。無言無說。道什麼。無示無識。驀別人、即得。離諸問答。道什麼。是爲入不二法門。

用入作什麼、用許多高蹤作什麼。於是文殊師利問維摩詰、我等各自說已、仁者當說、何等是菩薩入不二法門。這一轉莫道金粟如來、設使三世諸佛也開口不得、倒轉鉗頭來也、剌殺一人、中箭還似射人時。雪竇云、維摩道什麼。咄、萬箭攢心、爭奈禍出私門、且道、雪竇還見得落處麼、夢也未夢見、說什麼勘破、檢、金毛獅子也撲來不著。復云、勘破了也。非但當時、即今也恁麼、雪竇也是賊過後張弓、雖然爲衆竭力、

【評唱】維摩詰令諸大菩薩、各說不二法門、時三十二菩薩、皆以二見、有爲無爲、眞俗二諦、合爲一見、爲不二法門、後問文殊、文殊云、如我意者、於一切法、無言無說、無示無識、離諸問答、是爲入不二法門、蓋爲三十二人、以言遣言、文殊以無言遣言、一時掃蕩總不要、是爲入不二法門、殊不知靈龜曳尾、拂迹成痕、又如掃箒掃塵相似、塵雖去箒迹猶存、末後依前除蹤跡、(除蹤跡、本作餘蹤跡、)於是文殊、卻問維摩詰云、我等各自說已、仁者當自說、何等是菩薩入不二法門、維摩詰默然、若是活漢、終不去死水裏浸卻、若作恁麼見解、似狂狗逐塊、雪竇亦不說良久、亦不說默然、據坐、只去急急處云、維摩道什麼、只如雪竇恁麼道、還見維摩麼、夢也未夢見在、維摩乃過去古佛、亦有眷屬、助佛宣化、具不可思議辯才、有不可思議境界、有不可思議神通妙用、於方丈室中、容三萬二千獅子寶座、與八萬大衆、亦不寬狹、且道、是什麼道理、喚作神通妙用、得麼、且莫錯會、若是不二法門、雖同得同證方乃相共證知、獨有文殊、可與酬對、雖然恁麼、還免得雪竇檢責也無、雪竇恁麼道、也要與這二人相見、云、維摩道什麼、又云、勘破了也、儞且道、是什麼處是勘破處、只這些子、不拘得失、不落是非、如萬仞懸崖、向上捨得性命、跳得過去、許儞親見維摩、如捨不得、大似抵羊觸藩、雪竇故然是捨得性命底人、所以頌出云、

【頌】咄這維摩老。咄、他作什麼、自有金剛王寶劍、爲他百、咄、得不濟事、好與三十棒。悲生空懊惱。悲、他作什麼、朝打三千、暮打八閑事長無明、勞而無功。臥疾毗耶離。因誰致得、帶累一切人。全身太枯槁。病則且置、爲什麼、口似匾擔、飯也喫不得、喘也喘不得。七佛祖師來。客來須看、賊來須打、成軍作陣、也須是作家始得。一室且頻掃。猶有這箇在、元來在鬼窟裏作活計。請問不二門。若有可說、被他說了也、一打云、和閻鑊也尋不見。當時便靠倒。蒼天蒼天、道什麼。獅子無處討。咄、還見麼、蒼天蒼天。不靠倒。死中得活、病有氣息在。金毛

【評唱】雪竇道、咄這維摩老、頭上先下一咄、作什麼、以金剛王寶劍當頭直截、須朝打三千暮打八百始得、梵語云維摩詰、此云無垢稱、亦云淨名、乃過去金粟如來也、不見僧問雲居簡和尚、既是金粟如來、爲什麼卻於釋迦如來會中聽法、簡云、他不爭人我、大解脫人、不拘成佛不成佛、若道他修行、務成佛道、轉沒交涉、譬如圓覺經云、以輪廻心、生輪廻見、入於如來大寂滅海、終不能至、永嘉云、或是或非、人不識、逆行順行天莫測、若順行則趣佛果位中、若逆行則入衆生境界、壽禪師道、直饒儞磨鍊得、到這田地、亦未可順汝意、在直待證無漏聖身、始可逆行順行、所以雪竇道、悲生空懊惱、維摩經云、爲衆生有病故、我亦有病、懊惱則悲絕也、臥疾毗耶離、維摩示疾於毘耶離城也、唐時王玄策使西域、過其居、遂以手板縱橫量其室、得十笏、因名方丈、全身太枯槁、因以身疾、廣爲說法云、是身無常無强無力無堅、速朽之法、不可信也、爲苦

爲惱、衆病所集、乃至陰界入所共合成、七佛祖師來、文殊是七佛祖師、承世尊旨在、彼問疾、一室且頻掃、方丈內皆除、去所有、唯留一榻、等文殊至、請問不二法門也、所以雪竇道、請問不二門、當時便靠倒、維摩口似匾擔、如今禪和子、便道、無語是靠倒、且莫錯認定盤星、雪竇拶到萬仞懸崖上、卻云、不靠倒、一手撐一手搦、他有這般手脚、直是用得玲瓏、此頌前回拈云、維摩道、什麼、金毛獅子無處討、非但當時、卽今也恁麼、還見維摩老麼、盡山河大地草木叢林、皆變作金毛獅子、也摸索不着。

第八十五則

垂示云、把定世界、不漏纖毫、盡大地人亡、鋒結舌、是衲僧正令、頂門放光、照破四天下、是衲僧金剛眼睛、點鐵成金、點金成鐵、忽擒忽縱、是衲僧拄杖子、坐斷天下人舌頭、直得無出氣處、倒退三千里、是衲僧氣宇、且道、總不恁麼時、畢竟是箇什麼人、試擧看。

【本則】擧、僧到桐峯庵主處、便問、這裏忽逢大蟲時、又作麼生。作家、弄影漢、草窠裏一箇半箇。庵主便作虎聲。將錯就錯、卻有牙爪、同一生同死、承言須會宗。僧便作怕勢。兩箇弄泥團漢、見機而作、似則也似、是則未是。庵主呵呵大笑。識較些子、笑中有刀、亦能放亦能收。僧云、這老賊。也須識破、敗也、兩箇都放行。庵主云、爭奈老僧何。劈耳便掌、可憎放過、雪上加霜、又一重。僧休去。恁麼休去、二俱不了、著天著天。雪竇云、是則是兩箇惡賊、只解掩耳偷鈴。言偷在耳、遮他雪竇點檢、且道、當時合作麼生、免得點檢、天下納僧不到。

【評唱】大雄宗派下、出四庵主、大梅、白雲、虎溪、桐峯、看他兩人恁麼眼親手辨、且道、諭訛在什麼處、古人一機一境、一言一句、雖然出在臨時、若是眼目周正、自然活鱍鱍地、雪竇拈、教人識邪正、辨得失、雖然如此、在地達人分上、雖處得失、卻無得失、若以得失見他古人、則沒交涉、如今人須是各各窮到無得失處、然後以得失辨人、若一向去揀擇言句、處用心、又到幾時得了去、不見雲門大師道、行脚漢、莫只空遊州獵縣、只欲得提搦閑言語、待老和尚口動、便問禪問道、向上向下、如何若何、大卷抄將去、壑向肚皮裏、卜度、到處火爐邊、三箇五箇、聚頭擧口、喃喃地、便道、這箇是公才語、這箇是就身打出語、這箇是事上道底語、這箇是體裏語、體偏屋裏老爺老娘、嚫卻飯了、只管說夢、便道、我會佛法了、也、將知恁麼行脚驢年得休歇去、古人暫時間拈弄、豈有勝負得失是非等見、桐峯見臨濟、其時在深山卓庵、這僧到彼中、途問、這裏忽逢大蟲時又作麼生、峯便作虎聲、也好就事便行、這僧也會將錯就錯、便作怕勢、庵主呵呵大笑、僧云、這老賊、峯云、爭奈老僧何、是則是二俱不了、千古之下、遭人點檢、所以雪竇道、是則是兩箇惡賊、只解掩耳偷鈴、他二人雖皆是賊、當機卻不用、所以掩耳偷鈴、此二老如排百萬軍陣、卻只鬪掃箒、若論此事、須是殺人不眨眼底手脚、若一向縱而不擒、一向殺而不活、不免遭人怪笑、雖然如是、他古人亦無許多事、看他兩箇恁麼、總是見機而作、五祖道、神通游戲三昧、慧炬三昧、莊嚴王三昧、自是後人脚跟不點地、只去點檢古人、便道、有得有失、有底道、分明是庵主落節、且得沒交涉、雪竇道、他二人相見、皆有放過處、其僧道、這裏忽逢大蟲時又作麼生、峯便

作虎聲、此便是放過處、乃至道、爭奈老僧何、此亦是放過處、着着落在第二機、雪竇道、要用便用、如今人聞恁麼道、便道、當時好與行令、且莫盲枷瞎棒、只如德山入門便棒、臨濟入門便喝、且道、古人意如何、雪竇後面、便只如此頌出、且道、畢竟作麼生、免得掩耳偷鈴去、頌云。

【頌】見之不取。睡過了也、已是千里萬里。思之千里。悔不慣當初、着天着天。好箇斑斑。闇裏自領出去、爭奈未解用在。爪牙未備。只恐用處不明、待爪牙備向爾道。君不見、大雄山下忽相逢。有條攀條例。落落聲光皆振地。道大蟲卻恁麼去、論較些子、獲箇男兒是丈夫。大丈夫見也無。老婆心切、若解開喉、同生同死、雪竇打葛藤。收虎尾兮捋虎鬚。忽然突出如何收、敢天下納僧、在這裏、忽有箇出來、便與一拶、若無收放、爾三十棒、教爾轉身吐氣、喝、打云、何不道、這老賊。

【評唱】見之不取、思之千里、正當嶮處、都不能使、等他道、爭奈老僧何、好與本分草料、當時若下、得這手腳、他必須有後語、二人只解放不解收、見之不取、早是白雲萬里、更說什麼思之千里、好箇斑斑爪牙未備、是則是、箇大蟲也解藏牙伏爪、爭奈不解咬人、君不見、大雄山下忽相逢、落落聲光皆振地、百丈一日問黃檗云、什麼處來、檗云、山下採菌子來、丈云、還見大蟲麼、檗便作虎聲、丈於腰下取斧作斫勢、檗約住便掌、丈至晚上堂云、大雄山下有一虎、汝等諸人出入切須好看、老僧今日親遭一口、後來溈山問仰山、黃檗虎話作麼生、仰云、和尚尊意如何、溈山云、百丈當時合一斧斫殺、因什麼到如此、仰山云、不然、溈山云、子又作麼生、仰山云、不唯騎虎頭亦解收虎尾、溈山云、寂子甚有嶮崖之句、雪竇引用明前面公案、聲光落落振於大地也、這箇些子轉變自在、要句中有出身之路、大丈夫見也無、還見麼、收虎尾兮捋虎鬚也須是本分、任爾收虎尾捋虎鬚、未免一時穿卻鼻孔。

第八十六則

垂示云、把定世界、不漏絲毫、截斷衆流、不存涓滴、開口便錯、擬議卽差、且道、作麼生、是透關底眼、試道看。

【本則】舉、雲門垂語云、人人盡有光明在。黑漆桶。看時不見暗昏昏。看時時時。作麼生是諸人光明。山是山、水是水、漆桶裏洗黑汁。自代云、厨庫三門。老婆心切、打葛藤、作什麼。又云、好事不如無。自知較一半、猶較些子。

【評唱】雲門室中、垂語接人、爾等諸人腳跟下、各各有一段光明、輝騰今古、迥絕見知、雖然光明、恰到問着、又不會、豈不是暗昏昏地、二十年垂示、都無人會他意、香林後來請代語、門云、厨庫三門、又云、好事不如無、尋常代語只一句、爲什麼、這裏卻兩句、前頭一句、爲爾略開一線路、教爾見、若是箇漢、聊聞舉着、剔起便行、他怕人滯在此、又云、好事不如無、依前與爾掃卻、如今人纔聞舉着光明、便去瞪眼云、那裏是厨庫、那裏是三門、且得沒交涉、所以道、識取鉤頭意、莫認定盤星、此事不在眼上、亦不在境上、須是絕知見、忘得失、淨躶躶赤灑灑、各各當人分上究取始得、雲門云、日裏來往日裏辨人、忽然半夜無日月燈光、曾到處則故是、未曾到處取一件

物，還取得麼，參同契云，當明中有暗，勿以明相遇，若坐斷明暗，且道，是箇什麼，所以道，心花發明，照十方刹，盤山云，光非照境，境亦非存，光境俱忘，復是何物。又云，即此見聞非見聞，無餘聲色可呈君，箇中若了全無事，體用何妨分不分，但會取末後一句了，卻去前頭游戲，畢竟不在裏頭，作活計，古人道，以無住本立一切法，不得去這裏弄光影弄精魂，又不得作無事會，古人道，寧可起有見如須彌山，不可起無見如芥子許，二乘人多偏墜此見，雪竇頌云，

【頌】自照列孤明。森羅萬象，賓主交參，列孤明，轉鼻孔，瞎漢作什麼。爲君通一線。何止一線，十日並照，放一線道，即得。花謝樹無影。打舊藥有什麼了期，向什麼處，拽來，黑漆桶裏盛黑汁。看時誰不見。瞎，不可建扶籬撲壁，爾瞎三瞎。見不見。兩頭俱坐斷，瞎。倒騎牛兮入佛殿。中三門合掌，還我話頭來，打云，向什麼處去也，雪竇也只向鬼窟裏作活計，還會麼，牛夜日頭出，日午打三更。

【評唱】自照列孤明，自家腳跟下，本有此一段光明，只是尋常用得暗，所以雲門大師與彌羅列此光明，在彌面前，且作麼生是諸人光明，廚庫三門，此是雲門列孤明處也，盤山道，心月孤圓，光吞萬像，這箇便是眞常獨露，然後與君通一線，亦怕人着，在廚庫三門處，廚庫三門則且從卻，朝花亦謝樹亦無影，日又落月又暗，盡乾坤大地黑漫漫地，諸人還見麼，看時誰不見，且道，是誰不見，到這裏，當明中有暗，暗中有明，皆如前後步，自可見，雪竇道，見不見頌，好事不如無，合見又不見，合明又不明，倒騎牛兮入佛殿，入黑漆桶裏去也，須是彌自騎牛，入佛殿，看道，是箇什麼道理，

第八十七則

垂示云，明眼漢沒窠臼，有時孤峰頂上草漫漫，有時鬧市裏頭赤灑灑，忽若忿怒那吒，現三頭六臂，忽若日面月面，放普攝慈光，於一塵現一切身，爲隨類人，和泥合水，忽若撥着向上竅，佛眼也覷不着，設使千聖出頭來，也須倒退三千里，還有同得同證者麼，試舉看，

【本則】學，雲門示衆云，藥病相治。一合相不可得。（治證之切，攻理也，音持。）盡大地是藥。苦瓠遽，似苦，擲向一邊。那箇是自己。甜瓜蔕，帶甜，那裏得這消息來。

【評唱】雲門道，藥病相治，盡大地是藥，那箇是自己，諸人還有出身處麼，二六時中，管取壁立千仞，德山棒如雨點，臨濟喝似雷奔，則且致，釋迦自釋迦，彌勒自彌勒，未知落處者，往往喚作藥病相投會去，世尊四十九年，三百餘會，應機說教，皆是應病與藥，如將蜜果換苦葫蘆相似，既淘汝諸人業根，令灑灑落落，盡大地是藥，彌向什麼處插觜，若插得觜，許彌有轉身吐氣處，便親見雲門，彌若回顧躊躇，管取揑觜不得，雲門若著有，與彌說無，彌若着無，與彌說有，彌若着不有不無，與彌去糞掃堆上，現丈六金身，頭出頭沒，只如今盡大地森羅萬象，乃至自己，一時是藥，當恁麼時，卻喚那箇是自己，彌一向喚作藥，彌勒佛下生也未，夢見雲門，在畢竟如何，識取釣頭意，莫認定盤星，文殊一日，令善財去採藥，云，不是藥者採將來，善財徧採，無不是藥，卻來白云，無不是藥者，文殊云，是藥者採將來，善

財乃拈一枝草度與文殊、文殊提起示衆云、此藥亦能殺人、亦能活人、此藥病相治話最難看、雲門室中尋常用接人、金鵝長老一日訪雪竇、他是箇作家、乃隔濟下尊宿、與雪竇論此藥病相治話、一夜至天光、方能盡善、到這裏、學解思量計較、總使不着、雪竇後有頌、送他道、藥病相治見最難、萬重關鎖太無端、金鵝道者來相訪、學海波瀾一夜乾、雪竇後面頌得最有工夫、他意亦在、賓亦在、主自可見也、頌云。

【頌】盡大地是藥。敘誰辨的、撒沙撒土、架高處着。古今何太錯。言中有響、一筆勾下、咄。閉門不造車。大小雪竇爲衆踢出私門、坦蕩不掛一絲毫、阿誰有閑工夫向鬼窟裏作活計。通途自寥廓。脚下便入草、上馬見路、信手拈來不妨奇特。錯錯。雙敘倚空飛、一箭落雙鵰。鼻孔遼天亦穿卻。頭落也、打云、穿卻了也。

【評唱】盡大地是藥、古今何太錯、儞若喚作藥會、自古自今、一時錯了也、雪竇云、有般漢不解截斷大梅脚跟、只管道貧程太速、他解截雲門脚跟、爲雲門這一句惑亂天下人、雲門云、拄杖子是浪許儞、七縱八橫盡大地是浪、看儞頭出頭沒、閉門不造車、通途自寥廓、雪竇道、爲儞通一線路、儞若閉門造車、出門合轍濟箇甚事、我這裏閉門也不造車、出門自然寥廓、他這裏略露些子縫罅、教人見、又連忙卻道、錯錯、前頭也錯、後頭也錯、誰知雪竇開一線路、也是錯、既然鼻孔遼天、爲什麼也穿卻、要會麼、且參三十年、儞有拄杖子、我與儞拄杖子、儞若無拄杖子、不免被人穿卻鼻孔。

第八十八則

垂示云、門庭施設、且恁麼破二作三、入理深談、也須是七穿八穴、當機敲點擊碎金鎖玄關、據令而行、直得掃蹤滅跡、且道、訴訛在什麼處、具頂門眼者、請試舉看。

【本則】舉、玄沙示衆云、諸方老宿、盡道接物利生。隨分開箇鋪席、隨家豐儉。忽遇三種病人來、作麼生接。打草只要蛇驚、山僧直得日瞪口呆、管取倒退三千里。（瞪侍陵切、怒目直視也。）呿去伽切、張口貌。又不聞。嘘的聾、是則接物利生、未必聾在、是那箇須聞在。患盲者拈鎚竪拂、他又不見。嘘的瞎、是則接物利生、未必不見在。患聾者、語言三昧、他僧請益雲門。也要諸方共知、着。且作麼生接、若接此人不得、佛法無靈驗。誠哉是言、山僧拱手歸降、已接了也、便打。雲門以拄杖拄、僧退後、門云、汝禮拜着。風行草偃、咄。僧禮拜起。這僧始折拄杖子也。復喚近前來、僧近前。第二杓惡水潑、親香來也、當時好與一喝。門云、汝不是患盲。嘘的瞎、莫道這僧患盲好。（拄陟栗切、音望、撞空也。）門乃云、還會麼。何不與本分草料、當時好莫作聾。僧云、不會。兩重公案、蒼天蒼天。門云、汝不是患聾。嘘的聾、莫道這僧患聾好。嘘。嘘的啞、口吧吧地、莫道這僧啞好。僧於此有省。賊過後張弓、討什麼碗。

【評唱】玄沙參到絕情塵意想淨躶躶赤灑灑地處方解恁麼道是時諸方列刹相望尋常示衆道諸方老宿盡道接物利生忽遇三種病人來時作麼生接患盲者拈鎚豎拂他又不見患聾者語言三昧他又不聞患啞者教他說又說不得且作麼生接若接此人不得佛法無靈驗如今人若作盲聾瘖啞會卒摸索不着所以道莫向句中死卻須是會佗玄沙意始得玄沙常以此語接人有僧久在玄沙處一日上堂僧問和尚云三種病人話還許學人說道理也無玄沙云許僧便珍重下去沙云不是不是這僧會得他玄沙意後來法眼云我聞地藏和尚舉這僧語方會三種病人話若道這僧不會法眼爲什麼卻恁麼道若道他會玄沙爲什麼卻道不是不是一日地藏道某甲聞和尚有三種病人話是否沙云是藏云珪琛現有眼耳鼻舌和尚作麼生接玄沙便休去若會得玄沙意豈在言句上他會底自然殊別後有僧舉似雲門門便會他意云汝禮拜着僧禮拜起門以拄杖拄這僧退後門云汝不是患盲復喚近前來僧近前門云汝不是患聾乃云會麼僧云不會門云汝不是患啞其僧於此有省當時若是箇漢等他道禮拜着便與掀倒禪床豈見有許多葛藤且道雲門與玄沙會處是同是別佗兩人會處都只一般看佗古人出來作千萬種方便意在鈎頭上多少苦口只令諸人各各明此一段事五祖老師云一人說得卻不會一人卻會說不得二人若來參如何辨得他若辨這兩人不得管取爲人解粘去縛不得在若辨得纔見入門我便着草鞋向爾肚裏走幾遭了也猶自不省討什麼碗出去且莫作盲聾瘖啞會好若恁麼計較所以道眼見色如盲等耳聞聲如聾等又道滿眼不視色滿耳不聞聲文殊常觸目觀音塞耳根到這裏眼見如盲相似耳聞如聾相似方能與玄沙意不爭多諸人還識盲聾瘖啞底漢子落處麼看取雪竇頌云

【頌】盲聾瘖啞。已在言前三箇俱明已做一段了也。杳絕機宜。向什麼處摸索還做計較得麼有什麼交涉。天上天下。我也恁麼。堪笑堪悲。笑箇什麼悲箇什麼半明半暗。離婁不辨正色。瞎漢巧匠不留蹤跡的瞎。(離婁莊子天地篇作朱。)師曠豈識玄絲。聾漢大功不立賞罰的聾。(玄絲一作絃絲。)爭如獨坐虛窻下。須是恁麼始得莫向鬼窟裏作活計一時打破漆桶。葉落花開自有時。即今什麼時節切不得作無事會今日也從朝至暮明日也從朝至暮。復云、還會也無。重說偈言。無孔鐵鎚。自領出去可惜放過便打。

【評唱】盲聾瘖啞杳絕機宜盡爾見與不見聞與不聞說與不說雪竇一時與爾掃卻了也直得盲聾瘖啞見解機宜計較一時杳絕總用不著這箇向上事可謂眞盲眞聾眞啞無機無宜天上天下堪笑堪悲雪竇一手撥一手搦且道笑箇什麼悲箇什麼堪笑是啞卻不啞是聾卻不聾堪悲明明不盲卻盲明明不聾卻聾離婁不辨正色不能辨青黃赤白正是瞎離婁黃帝時人百步外能見秋毫之末其目甚明黃帝游於赤水沉珠令離朱尋之不見令契詬尋之亦不得後令象罔尋之方獲之(象罔一作罔象。)故云象罔到時光燦爛離婁行處浪滔天這箇高處一着直是離婁之目亦辨他正色不得師曠豈識玄絲周時絳州晉景公之子師曠字子野(一云晉平公之樂太師也)善別五音六律隔山聞蟻鬬時晉與楚爭霸師曠唯鼓琴撥動風絃知戰楚必無功雖然如是雪竇道他尚未識玄絲在不聾卻是聾底人這箇高處玄音直是師

曠亦誠不得，雪竇道，我亦不作離婁，亦不作師曠，爭如獨坐虛窓下，葉落花開自有時，若到此境界，雖然見似不見，聞似不聞，說似不說，飢卽喫飯，困卽打眠，任佗葉落花開，葉落時是秋，花開時是春，各各自有時節，雪竇與伽一時掃蕩了也，又放一線道云，還會也無，雪竇力盡神疲，只道得箇無孔鐵鎚，這一句急着眼看方見，若擬議又蹉過，師舉拂子云，還見麼，遂敲禪床一下云，還聞麼，下禪床云，還說得麼。

第八十九則

垂示云，通身是眼，見不到，通身是耳，聞不及，通身是口，說不着，通身是心，鑒不出，通身卽且止，忽若無眼作麼生見，無耳作麼生聞，無口作麼生說，無心作麼生鑒，若向箇裏撥轉得一線道，便與古佛同參，參則且止，且道，參箇什麼人。

【本則】舉，雲巖問道吾，大悲菩薩，用許多手眼作什麼。當時好與本分草料，爾等諸方走上走下作什麼，闍梨問作什麼。吾云，如人夜半背手摸枕子。何不用本分草料，一一直引來直。巖云，我會也。將錯就錯，醭一殺一船人，同坑無異土，未覺箇鋒犯手。吾云，汝作麼生會。何勞更問，也要問過，好與一拶。巖云，徧身是手眼。有什麼交涉，鬼窟裏作活計，泥盡洗土塊。吾云，道卽太煞道，只道得八成。同坑無異土，奴見婢慇懃，痴兒來伴。巖云，師兄作麼生。取人處分，爭得也好與一拶。吾云，通身是手眼。瞎驢不出斗，換卻爾眼睛，移卻舌頭，還得十歲也未，喚夢作醒。

【評唱】雲巖與道吾同參藥山，藥山出曹洞一宗，有三人，法道盛行，雲巖下洞山，道吾下石霜，船子下夾山，大悲菩薩有八萬四千母陀羅臂，大悲有許多手眼，諸人還有也無，百丈云，一切語言文字，俱皆宛轉歸于自己，雲巖常隨道吾咨參決擇，一日問他道，大悲菩薩用許多手眼作什麼，當初好與他勞弃便棒，免見後有許多葛藤，道吾慈悲不能如此，卻與他說道理，意要教他便會，卻道，如人夜半背手摸枕子，當深夜無燈光時，將手摸枕子，且道，眼在什麼處，他便道，我會也，吾云，汝作麼生會，巖云，徧身是手眼，吾云，道卽太煞道，只道得八成，巖云，師兄又作麼生，吾云，通身是手眼，且道，徧身是底是，通身是底是，雖似爛泥卻脫灑，如今人多去作情解道，徧身底，不是，通身底是，只管咬他古人言句，於古人言下死了，殊不知古人意不在言句上，此皆是事不獲已而用之，如今下注腳，立格則，道若透得此公案，便作罷參會，以手摸渾身，摸燈籠露柱，盡作通身話會，若恁麼會，壞他古人不少，所以道，他參活句不參死句，須是絕情塵意想，淨裸裸赤灑灑地，方可見得大悲話，不見曹山問僧，應物現形，如水中月，時如何，僧云，如驢覷井，山云，道卽煞道，只道得八成，僧云，和尚又作麼生，山云，如井覷驢，便同此意也，伽若去語上見，總出道吾雲巖圈纘不得，雪竇作家，更不向句下死，直向頭上行，頌云。

【頌】徧身是。四肢八節，未是稱僧極則處。通身是。頂門上有半邊，驗在窠窟裏許。拈來猶較十萬里。放過則不

可、何止十萬里。展翅鵬騰六合雲。我子境界、將奇特點。搏風鼓蕩四溟水。些子塵埃、將謂、天下人不奈、彌何、過。是何埃壒兮忽生。竄爲、諸人、下、注脚、斬、拈卻著、那裏。(壒於蓋切、塵也、通作、塲。)那箇毫釐兮未止。別別、吹散了也、破。君不見。又慈麼去。網珠垂範影重重。大小大雪竇作、這箇去、就、可惜許依、舊打、葛藤。棒頭手眼從何起。喝、賊過後張弓、放、關不得、竈大地人無出氣處、故得、又須、喫、棒、又打、咄云、且道、山僧底是、雪竇底是。咄。三喝四喝。後作麼生。

【評唱】徧身是、通身是、若道、背手摸枕子底便是、以手摸身底便是、若作恁麼見解、盡向鬼窟裏作活計、舉竟徧身通身都不是、若要以情識去見、他大悲話、直是猶較十萬里、雪竇弄得一句活道、拈來猶較十萬里、後句頌雲巖道吾奇特處云、展翅鵬騰六合雲、搏風鼓蕩四溟水、大鵬吞龍、以翼搏風鼓浪、其水開三千里、遂取龍吞之、雪竇道、偏若大鵬能搏風鼓浪、也太煞雄壯、若以大悲千手眼觀之、只是些子塵埃忽生相似、又似一毫釐風吹來、止相似、雪竇道、偏若以手摸身用作手眼、堪作何用、於是大悲話上、直是未在、所以道、是何埃壒兮忽生、那箇毫釐兮未止、雪竇自謂、作家一時拂迹了也、爭奈後面依舊漏逗、說箇譬喻子、依前只在圈繢裏、君不見網珠垂範影重重、雪竇引帝網明珠、以用垂範、手眼、且道、落在什麼處、華嚴宗中、立四法界、一理法界、明一味平等、故、二事法界、明全理成事、故、三理事無礙法界、明理事相融、大小無礙、故、四事事無礙法界、明一事徧入一切事、一切事徧攝一切事、同時交參無礙、故、所以道、一塵纔舉大地全收、一一塵含無邊法界、一塵既爾、諸塵亦然、網珠者、乃天帝釋善法堂前、以摩尼珠爲網、凡一珠中映現百千珠、而百千珠俱現一珠中、交映重重、主伴無盡、此用明事事無礙法界也、昔賢首國師、立爲鏡燈論、圓列十鏡、中設一燈、若看東鏡、則九鏡鏡燈歷然齊現、若看南鏡、則鏡鏡如然、所以世尊初成正覺、不離菩提道場、而徧昇忉利諸天、乃至於一切處、七處九會說華嚴經、雪竇以帝網珠垂示事事無礙法界、然六相義甚明白、卽總卽別、卽同卽異、卽成卽壞、舉一相則六相俱該、但爲衆生日用而不知、雪竇拈帝網門珠垂範、況此大悲話、直是如此、儞若善能向此珠網中、明得拄杖子、神通妙用、出入無礙、方可見得手眼、所以雪竇云、棒頭手眼從何起、教儞棒頭取證、喝下承當、只如德山入門便棒、且道、手眼在什麼處、臨濟入門便喝、且道、手眼在什麼處、且道、雪竇末後爲什麼更着箇咄字、參。

第九十則

垂示云、聲前一句、千聖不傳、面前一絲、長時無間、淨躶躶赤灑灑、頭髮鬆耳卓朔、且道、作麼生、試擧看。

【本則】擧、僧問智門、如何是般若體。通身無影象、坐斷天下人舌頭、用體作什麼。門云、蚌含明月。光吞萬象、卽且止、棒頭正眼、事如何、曲不藏直、雪上加霜、又一重。僧云、如何是般若用。倒退三千里、要用作什麼。門云、兎子懷胎。嗽、苦瓠連根苦、甜瓜徹蔕甜、向光影中作活計、不出智門窠窟、若有箇出來、且道、是般若體是般若用、且要土上加泥。

【評唱】智門道、蚌含明月、兎子懷胎、都用中秋意、雖然如此、古人意卻不在蚌兎上、他是雲門

會下尊宿、一句語須具三句、所謂函蓋乾坤句、截斷衆流句、隨波逐浪句、亦不消安排、自然恰好、便去驗處答、這僧話略露些子鋒鋩、不妨奇特、雖然恁麼、他古人終不去弄光影、只與儞指些路頭教人見、這僧問、如何是般若體、智門云、蚌含明月、漢江出、蚌、蚌中有明珠、到中秋月出蚌於水面浮開、口含月光、感而產珠、合浦珠是也、若中秋有、月則珠多、無月則珠少、如何是般若、用門云、兎子懷胎、此意亦無異、兎屬陰、中秋月生、開口吞其光、便乃懷胎、口中產兒、亦是有月則多、無月則少、他古人答處、無許多事、他只借其意、而答般若光也、雖然恁麼、他意不在言句上、自是後人、去言句上作活計、不見盤山道、心月孤圓、光吞萬象、光非照境、境亦非存、光境俱亡、復是何物、如今人但瞪眼喚作光、只去情上生解、空裏釘橛、古人道、汝等諸人、六根門頭盡夜放大光明、照破山河大地、不只止眼根放光、鼻舌身意亦皆放光也、到這裏直須打疊六根下無一星事、淨躶躶赤灑灑地、方見此話落處、雪竇正恁麼頌出、

【頌】一片虛凝絕謂情。（凝心即差、動念即隔、佛眼也覷不見。）蚌含玄兎深深意。（也須是當人始得、有什麼意、何須更用深深意。）曾與禪家作戰爭。（干戈已息、天下太平、還會麼、打云、圍棊喫得多少。）人天從此見空生。（須菩提好與三十棒、用這老漢作什麼、設使須菩提也倒退三千里。）

【評唱】一片虛凝絕謂情、雪竇一句便頌得好、自然見得古人意、六根湛然、是箇什麼、只這一片虛明凝寂、不消去天上討也、不必向別人求、自然常光現前、是處壁立千仞、謂情即是絕言謂情塵也、法眼圓成實性頌云、理極忘情謂、如何得諭齊、到頭霜夜月、任運落前溪、果熟象猿重、山遙似路迷、擧頭殘照在、元是住居西、所以道、心是根、法是塵、兩種猶如鏡上痕、塵垢盡時光始現、心法雙忘性卽眞、又道、三間茅屋從來住、一道神光萬境閑、莫把是非來辨我、浮生穿鑿不相關、只此頌亦見一片虛凝絕謂情也、人天從此見空生、不見須菩提巖中宴坐、諸天雨花讚歎、尊者云、空中雨花讚歎、復是何人、天云、我是梵天、尊者云、汝云何讚歎、天云、我重尊者善說般若波羅蜜多、尊者云、我於般若未嘗說一字、汝云何讚歎、天云、尊者無說、我乃無聞、無說無聞是眞般若、又復動地雨花、看他須菩提善說般若、且不說體用、若於此見得、便可見智門道、蚌含明月兎子懷胎、古人意雖不在言句上、爭奈答處有深深之旨、惹得雪竇道、蚌含玄兎深深意、到這裏、曾與禪家作戰爭、天下禪和子鬧浩浩地商量、未嘗有一人夢見在、若要與智門雪竇同參、也須是自着眼始得。

佛果圜悟禪師碧巖錄卷第九　終

佛果圜悟禪師碧巖錄卷第十

第九十一則

垂示云、超情離見、去縛解粘、提起向上宗乘、扶豎正法眼藏、也須十方齊應、八面玲瓏、直到恁麼田地、且道、還有同得同證、同死同生底麼、試舉看。

【本則】舉、鹽官一日喚侍者、與我將犀牛扇子來。打高聲不少、何以還箇好箇消息。侍者云、扇子破也。可惜許、好箇消息、道什麼。官云、扇子既破、還我犀牛兒來。喚遍不少、蹋州猶自可、最苦是新羅、和尚用犀牛兒作什麼。侍者無對。果然是箇無孔鐵鎚、可惜許。投子云、不辭將出、恐頭角不全。似則似、爭奈兩頭三面、也是說道理。雪竇拈云、我要不全底頭角。堪作何用、將錯就錯。石霜云、若還和尚即無也。道什麼、撞着鼻孔。資福畫一圓相、於中書一牛字。草裏不勞拈出、莽彥影漢。雪竇拈云、適來爲什麼不將出。金鹽不辨、也是草裏漢。保福云、和尚年尊、別請人好。辭地獄罵官人、辭辛道苦作什麼。雪竇拈云、可惜勞而無功。兼身在內、也好與三十棒、灼然。

【評唱】鹽官一日喚侍者、與我將犀牛扇子來、此事雖不在言句上、且要驗人平生意氣作略、又須得如此藉言而顯、於臘月三十日、着得力、作得主、萬境摐然(摐七恭切、撞也)覩之不動、可謂無功之功、無力之力、鹽官廼齊安禪師、古時以犀牛角爲扇、時鹽官豈不知犀牛扇子破、故問侍者、侍者云、扇子破也、看他古人、十二時中、常在裏許、撞着磕着、鹽官云、扇子既破、還我犀牛兒來、且道、他要犀牛兒作什麼、也只要驗人知得落處也、無投子云、不辭將出、恐頭角不全、雪竇云、我要不全底頭角、亦向句下便投機、石霜云、若還和尚即無也、雪竇云、犀牛兒猶在、資福畫一圓相、於中書一牛字、爲他承嗣仰山平生愛、以境致接人明、此事、雪竇云、適來爲什麼不將出、又穿他鼻孔了也、保福云、和尚年尊、別請人好、此語道得穩當、前三則語卻易見、此一句語、有遠意、雪竇亦打破了也、山僧舊日在慶藏主處理會、道、和尚年尊老耄、得頭忘尾、適來索扇子、如今索犀牛兒、難爲執侍、故云、別請人好、雪竇云、可惜勞而無功、此皆是下語格式、古人見徹此事、各各雖不同、道得出來、百發百中、須有出身之路、句句不失血脈、如今人問着、只管作道理計較、所以十二時中、要人咬嚼、教滴水滴凍、求箇證悟處、看他雪竇頌、一串云。

【頌】犀牛扇子用多時。遇夏則涼、遇冬則暖、人人具足、爲甚不知、阿誰不會用。問着元來總不知。知則知、會則不會、英靈人好、也怪別人不得。無限清風與頭角。在什麼處、不向自己上會、向什麼處會、天上天下、頭角重生、是什麼、無風起浪。盡同雲雨去難追。蒼天蒼天、也是失錢遭罰。雪竇復云、若要清風再復、頭角重生。人人有箇犀牛。

鷹子、十二時中全得他力、因什麼問著總不知道道得麼。請禪客各下一轉語。（看官檢在、三轉了也。）問云、扇子既破、還我犀牛兒來。（也有一箇牛箇、咄、也好推倒禪床。）時有僧出云、大衆參堂去。（賊過後張弓、被奪卻槍、前不搆村後不迭店。）雪竇喝云、拋鈎釣鯤鯨、釣得箇蝦蟆、便下座。（招得他恁麼地、賊過後張月、佛果自徵此語云、又道問諸人、道僧道、大衆參堂去、是會不會、若是不會爭解恁麼道、若道會時、雪竇又道、拋鈎釣鯤鯨、只釣得箇蝦蟆、便下座、且道、諸訛在什麼處、試請參詳看。）

【評唱】犀牛扇子用多時、問着元來總不知、人人有箇犀牛扇子、十二時中、全得他力、爲什麼問着總不知、去着、侍者投子、乃至保福、亦總不知、且道、雪竇還知麼、不見無着訪文殊、喫茶次、文殊舉起玻璃盞子云、南方還有這箇麼、着云、無、殊云、尋常用什麼喫茶、着無語、若知得這箇公案落處、便知得犀牛扇子、有無限清風、亦見犀牛頭角崢嶸、四箇老漢恁麼道、如朝雲暮雨、一去難追、雪竇復云、若要清風再復、頭角重生、請禪客各下一轉語、問云、扇子既破、還我犀牛兒來、時有一禪客出云、大衆參堂去、這僧奪得主家權柄、道得也煞道、只道得八成、若要十成、便與掀倒禪床、儞且道、這僧會犀牛兒不會、若不會卻解恁麼道、若會雪竇因何不肯、伊爲什麼道、拋鈎釣鯤鯨、只釣得箇蝦蟆、且道、畢竟作麼生、諸人無事、試拈掇看。

第九十二則

垂示云、動絃別曲、千載難逢、見兎放鷹、一時取後、總一切語言爲一句、攝大千沙界爲一塵、同死同生、七穿八穴、還有證據者麼、試舉看。

【本則】舉、世尊一日陞座。（賓主俱失、不是一同漏逗。）文殊白槌云、諦觀法王法、法王法如是。（一子親得。）世尊便下座。（慈人莫向慈人說、說向慈人慈人殺人、打鼓弄琵琶、相逢兩會家。）

【評唱】世尊未拈花已前、早有這箇消息、始從鹿野苑、終至拔提河、幾曾用着金剛王寶劒、當時衆中、若有箇衲僧氣息底漢、綽得去免得他末後拈花、一場狼藉、世尊良久間、被文殊一拶、便下座、那時也有這箇消息、釋迦掩室、淨名杜口、皆似此這箇、則已說了也、如肅宗問忠國師、造無縫塔話、又如外道問佛、不問有言、不問無言、之語、看佗向上人行履、幾曾入鬼窟裏作活計、有者道、意在默然處、有者道、在良久處、有言明無言底事、無言明有言底事、永嘉道、默時說、說時默、總恁麼會、三生六十劫、也未夢見在、儞若便直下承當得去、更不見有凡有聖、是法平等無有高下、日日與三世諸佛把手共行、後面看雪竇自然見得頌出。

【頌】列聖叢中作者知。（莫誇釋迦老子好、這佗臨濟總山、千箇萬箇中雖得一箇半箇。）法王法令不如斯。（儞他走底如麻似粟、三頭兩面、灼然能有人到這裏。）會中若有仙陀客。（就中雖得伶俐人、文殊不是作家、闍黎定不是。）何必文殊下一槌。（更下一槌、又何妨、第二第三槌一總不要、當機一句作麼生道、驗。）

【評唱】列聖叢中作者知、靈山八萬大衆皆是列聖、文殊普賢乃至彌勒主伴同會、須是巧中之巧、奇中之奇、方知他落處、雪竇意謂、列聖叢中無一箇人知、有若有箇作家者、方知不恁麼、

何故、文殊白槌云、諦觀法王法、法王法如是、雪竇道、法王法令不如斯、何故如此、當時會中若有箇漢頂門具眼肘後有符、向世尊未陞座已前、覷得破、更何必文殊白槌、涅槃經云、仙陀婆一名四寶、一者鹽、二者水、三者器、四者馬、有一智臣、善會四義、王若欲灑洗、要仙陀婆、臣即奉水、食索奉鹽、食訖奉器、飲漿、欲出奉馬、隨意應用無差、灼然須是箇伶俐漢始得、只如僧問香嚴、如何是王索仙陀婆、嚴云、過這邊來、僧過、嚴云、鈍置殺人、又問趙州、如何是王索仙陀婆、州下禪床、曲躬叉手、當時若有箇仙陀婆、向世尊未陞座已前、透去、猶較些子、世尊更陞座、便下去、已是不着、便了也、那堪文殊更白槌、不妨鈍置、他世尊一上提唱、且作麼生是鈍置處。

第九十三則

【本則】舉、僧問大光、長慶道、因齋慶讚、意旨如何。重光、這漆桶、不妨難、不問不知。大光作舞。莫醫殺人、依舊從前恁麼來。僧禮拜。又恁麼去也、是只恐錯會。光云、見箇什麼便禮拜。也好一摟、須彌倒過始得。僧作舞。依樣畫葫蘆、果然錯會、弄光影漢。光云、這野狐精。此恩雖報、三十二祖只傳這箇。

【評唱】西天四七、唐土二三、只傳這箇些子、諸人還知落處麼、若知免得此過、若不知、依舊只是野狐精、有者道、是裂轉他鼻孔來瞞人、若眞箇恁麼、成何道理、大光善能爲人、他句中有出身之路、大凡宗師須與人抽釘拔楔、去粘解縛、方謂之善知識、大光作舞、這僧禮拜、末後僧卻作舞、大光云、這野狐精、不是轉這僧、畢竟不知的當、僞只管作舞、遞相恁麼到幾時得休歇去、大光道、野狐精、此語截斷金牛、不妨奇特、所以道、他參活句、不參死句、雪竇只愛他道、這野狐精、所以頌出、且道、這野狐精、與藏頭白海頭黑、是同是別、這漆桶、又道、好師僧、且道、是同是別、還知麼、觸處逢渠、雪竇頌云、

【頌】前箭猶輕後箭深。百發百中、向什麼處迴避。誰云黃葉是黃金。且作止啼、誰得小兒也、無用處。曹溪波浪如相似。弄泥團漢、有什麼限、依樣畫葫蘆、放行一路。無限平人被陸沈。過鱠活底人、帶累天下衲僧、摸索不出頭不得。

【評唱】前箭猶輕後箭深、大光作舞、是前箭、復云、這野狐精、是後箭、此是從上來爪牙、誰云、黃葉是黃金、仰山示衆云、汝等諸人、各自回光返照、莫記吾言、汝等無始劫來、背明投暗、妄想根深、卒難頓拔、所以假設方便、奪汝龕識、如將黃葉止小兒啼、如將蜜果換苦葫蘆、相似、古人權設方便爲人、及其啼止、黃葉非金、世尊說一代時教、也只是止啼之說、這野狐精、只要換他業識、於中也有權實、也有照用、方見有衲僧巴鼻、若會得、如虎插翼、曹溪波浪如相似、儻忽四方八面學者、只管大家如此作舞、一向恁麼無限平人被陸沈、有什麼救處。

第九十四則

垂示云、聲前一句、千聖不傳、面前一絲、長時無間、淨躶躶赤灑灑、露地白牛、眼卓劃耳卓劃、金毛獅子則且置、且道、作麼生是露地白牛。

【本則】舉、楞嚴經云、吾不見時、何不見吾不見之處。（好箇消息、用見作見。什麼、釋迦老子漏逗不少。）若見不見自然非彼不見之相。（咄、有甚閑工夫、不可教。山僧作兩頭三面去也。）若不見吾不見之地。（向什麼處去也、釘釘纏纏相似、喃。）自然非物。（按牛頭喫草、更說什麼口頭聲色。）云何非汝。（說爾說我、總教交涉、打云、還見釋迦老子麼、爭奈古人不肯承當、打去、聊跟下自家看取、還會麼。）

【評唱】楞嚴經云、吾不見時、何不見吾不見之處、若見不見、自然非彼不見之相、若不見吾不見之地、自然非物、云何非汝、雪竇到此、引經文不盡、全引則可見、經云、若見是物、則汝亦可見吾之見、若同見者、名爲見吾、吾不見時、何不見吾不見之處、若見不見、自然非彼不見之相、若不見吾不見之地、自然非物、云何非汝、辭多不錄、阿難意道、世界燈籠露柱、皆可有名、亦要世尊指出此妙精元明、喚作什麼物、教我見佛意、世尊云、我見香臺、阿難云、我亦見香臺、卽是佛見、世尊云、我見香臺則可、知、我若不見香臺時、卽是見佛、佛云、我云不見、自是我知、汝云不見、自是汝知、他人不見處、爾如何得知、古人云、到這裏、只可自知、與人說不得、只如世尊道、吾不見時、何不見吾不見之處、若見不見、自然非彼不見之相、若不見吾不見之地、自然非物、云何非汝、若道認見爲有物、未能拂迹、吾不見時、如羚羊掛角、聲響蹤跡、氣息都絕、爾向什麼處摸索、經意初縱破、後奪破、雪竇出教眼頌、亦不頌物、亦不頌見與不見、直只頌見佛也。

【頌】全象全牛曾不殊。（牛邊瞎漢、半開半合、扶疎墜作什麼、一刀兩段。）從來作者共名摸。（四天、七、唐土二三、天下老和尚、如麻似粟、猶自少在。）如今要見黃頭老。（咄、這老胡、瞎漢、在爾腳跟下。）刹刹塵塵在半途。（腳跟下。）

下蹉過了也、更教山僧說什麼、驢年還曾夢見麼。

【評唱】全象全牛曾不殊、（曾壹計切、目疾、）衆盲摸象、各說異端、出涅槃經、僧問仰山和尚、見人問禪問道、便作一圓相、於中書牛字、意在於何、仰山云、這箇也是閑事、忽若會得、不從外來、忽若不會、決定不識、我且問爾、諸方老宿、於爾身上、指出那箇是爾佛性、爲復語底是、默底是、莫是不語不默底是、爲復總是、爲復總不是、爾若認語底是、如盲人摸着象耳、若認不語不默底是、如盲人摸着象鼻、若道物物都是、如盲人摸着象四足、若道總不是、拋本象落在空見、如是衆盲所見、只於象上名邈差別、爾要好切莫摸象、莫道見覺是、亦莫道不是、祖師云、菩提本無樹、明鏡亦無臺、本來無一物、爭得染塵埃、又云、道本無形相、智慧卽是道、作此見解者、是名眞般若、明眼人見、象得其全體、如佛見性、亦然、全牛者出莊子、庖丁解牛、未嘗見其全牛、順理而解、游刃自在、更不須下手、纔舉目時、頭角蹄肉、一時自解了、如是十九年、其刃如新發於硎、謂之全牛、雖然如此奇特、雪竇道、縱使得如此、全象全牛與眼中瞎、更不殊、從來作者共名摸、直是作家、也去裏頭摸索不着、自從迦葉、乃至西天此土祖師、天下老和尚、皆只是名摸、雪竇直截道、如今要見黃頭老、所以道、要見卽便更、要尋覓方見、則千里萬里也、黃頭老乃黃面老子也、爾如今要見、刹刹塵塵在半途、尋常道、一塵一佛刹、一葉

一釋迦、盡三千大千世界、所有微塵、只向一塵中見、當恁麼時、猶在半途、那邊更有半途在、且道、在什麼處、釋迦老子、尚自不知、教山僧作麼生說得。

第九十五則

垂示云、有佛處不得住、住着頭角生、無佛處急走過、不走過草深一丈、直饒淨躶躶赤灑灑、事外無機、機外無事、未免守株待兎、且道、總不恁麼、作麼生行履、試舉看。

【本則】舉、長慶有時云、寧說阿羅漢有三毒。（無毒不生芽。）不說如來有二種語。（已是謗釋迦老子了。）不道如來無語。（猶自顢頇、早是七穿八穴。）只是無二種語。（周由者也、說什麼。）慶云、聾人爭得聞。（望空啓告、七花八裂。）保福云、作麼生是如來語。（錯、卻較些子。）保福云、喫茶去。（頌、復云、慶、疑過了也。）慶云、作麼生是如來語、情知、儞向第二頭道。（爭瞞得明眼人、裂轉乖孔、何止第二頭。）

【評唱】長慶保福、在雪峯會下、常互相舉覺商量、一日平常如此說話云、寧說阿羅漢有三毒、不說如來有二種語、梵語阿羅漢、此云殺賊、以功能彰名、能斷九九八十一品煩惱、諸漏已盡、梵行已立、此是無學阿羅漢位、三毒卽是貪嗔癡根本煩惱、八十一品、尚自斷盡、何況三毒、長慶道、寧說阿羅漢有三毒、不說如來有二種語、大意要顯如來無不實語、法華經云、唯此一事實、餘二則非眞、又云、唯有一乘法、無二亦無三、世尊三百餘會、觀機逗教、應病與藥、萬種千般說法、畢竟無二種語、他意到這裏、諸人作麼生見得、佛以一音演說法、則不無、長慶要且未夢見如來語在、何故大似人說食、終不能飽、保福見他平地上說教、途問、作麼生是如來語、慶云、聾人爭得聞、這漢知他幾時、在鬼窟裏作活計來也、保福云、情知儞向第二頭道、果中其言、卻問、師兄作麼生是如來語、福云、喫茶去、鎗頭倒被別人奪卻了也、大小長慶、失錢遭罪、且問諸人、如來語還有幾箇、須知恁麼見得、方見這兩箇漢敗缺、子細檢點將來、盡合喫棒、放一線道、與他理會、有底云、保福道得是、長慶道得不是、只管隨語生解、便道有得有失、殊不知、古人如擊石火、似閃電光、如今人不去他古人轉處看、只管去句下走、使道、長慶當時不便用、所以落第二頭、保福云、喫茶去、便是第一頭、若只恁麼看、到彌勒下生、也不見古人意、若是作家、終不作這般見解、跳出這窠窟、向上自有一條路、儞若道、聾人爭得聞、有什麼不是處、保福云、喫茶去、有什麼是處、轉沒交涉、是故道、他參活句、不參死句、這因緣與徧身是通身是因緣一般、無儞計較、是非處、須是儞脚跟下、淨躶躶地、方見古人相見處、五祖老師云、如馬前相撲相似、須是眼辨手親、這箇公案、若以正眼觀之、俱無得失、處辨箇得失、無親疎處、分箇親疎、長慶也須禮拜保福、始得、何故、這箇些子、巧處用得好、如電轉星飛、相似、保福不妨、牙上生牙、爪上生爪、頌云、

【頌】頭兮第一第二。（我王庫中無如是事、古今榜樣、隨邪逐惡、作什麼。）臥龍不鑒止水。（同道方知。）無處

有月波澄。四海孤舟獨自行、徒勞二下度、討什麼橈。有處無風浪起。嚇殺人、還覺寒毛卓豎、麽、打云、來也。稜禪客稜禪客。勾賊破家、開市裏莫出頭、失錢還罪。三月禹門遭點額。退己讓人萬中無一、只得依氣吞聲。

【評唱】頭兮第一第二、人只管理會第一第二、正是死水裏作活計、這箇機巧、偏只作第一第二會、且摸索不着在、雪竇云、臥龍不鑒止水、死水裏豈有龍藏、若是第一第二、正是止水裏作活計、須是洪波浩渺白浪滔天處、方有龍藏、正似前頭云、澄潭不許蒼龍蟠、不見道、死水不藏龍、又道、臥龍長怖碧潭清、所以道、無龍處有月波澄、風恬浪靜、有龍處無風起浪、大似保福道、喫茶去、正是無風起浪、雪竇到這裏、一時與彌打疊情解、頌了也、佗有餘韻、敘成文理、依前就裏頭、着一隻眼、也不妨奇特、卻道、稜禪客稜禪客、三月禹門遭點額、長慶雖是透龍門底龍、卻被保福驀頭一點。

第九十六則

【本則】舉趙州示衆三轉語。道什麼、三段不同。

【評唱】趙州示此三轉語了、末後卻云、眞佛屋裏坐、這一句忒煞郎當、他古人出一隻眼垂手接人、略借此語通箇消息、要爲人、偏若一向正令全提、法堂前草深一丈、雪竇嫌他末後一句漏逗、所以削去只頌三句、泥佛若渡水則爛卻了也、金佛若渡鑪中則鎔卻了也、木佛若渡火便燒卻了也、有什麼難會、雪竇一百則頌古、計較葛藤、唯此三頌直下有衲僧氣息、只是這頌也不妨難會、偏若透得此三頌、便許偏罷參、

【頌】泥佛不渡水。浸翻鼻孔、無風起浪。神光照天地。干他什麼事、一見兎放鷹。立雪如未休。一人傳虛萬人傳、實將錯就錯、阿誰曾見偏來。何人不雕僞。入寺看額、二六時中走上一走下是什麼、闇黎便是。

【評唱】泥佛不渡水、神光照天地、這一句頌分明了、且道、爲什麼卻引神光、二祖初生時、神光燭室、旦於霄漢、又一夕神人現謂二祖曰、何久于此、汝當得道時至、宜即南之、二祖以神遇、遂名神光、久居伊洛博極群書、每嘆曰、孔老之敎祖述風規、近聞達磨大師住少林、乃往彼晨夕參扣、達磨端坐面壁莫聞誨勵、光自忖曰、昔人求道敲骨出髓刺血濟飢布髮掩泥投崖飼虎、古尚若此、我又何如、其年十二月九日夜大雪、二祖立於砌下、遲明積雪過膝、達磨憫之曰、汝立雪於此、當求何事、二祖悲淚曰、惟願慈悲開甘露門、廣度群品、達磨曰、諸佛妙道曠劫精勤、難行能行、非忍而忍、豈以小德小智輕心慢心、欲冀眞乘、無有是處、二祖聞誨勵、向道益切、潛取利刀自斷左臂、致于達磨前、磨知是法器、遂問曰、汝立雪斷臂、當爲何事、二祖曰、某甲心未安、乞師安心、磨曰、將心來與汝安、祖曰、覓心了不可得、達磨云、與汝安心竟、後達磨爲易其名、曰慧可、後接得三祖燦大師、既傳法隱於舒州皖公山、皖戶版切、明貌、屬後周武帝破滅佛法、沙汰僧、師往來太湖縣司空山、居無常處、積十餘載、無人知者、宣律師高祖傳、載二祖事不詳、三祖傳云、二祖妙法不傳於世、賴值末後依前悟、他當時立雪、所以雪竇道、立雪如未休、何人不雕僞、立雪若未休、足恭諂詐之人皆效之、足將樹反、過也、一時只成雕僞、則是諂詐之徒也、

雪竇頌泥佛不渡水、爲什麼卻引這因緣來用、他參得意根下無一星事、淨躶躶地方頌得如此、五祖尋常教人看此三頌、豈不見、洞山初和尚有頌、示衆云、五臺山上雲蒸飯、古佛堂前狗屎、天刹竿頭上煎餡子、三箇胡孫夜簸錢、又杜順和尚道、懷州牛喫禾、益州馬腹脹、天下覓醫人、灸豬左膊上、又傳大士頌云、空手把鋤頭、步行騎水牛、人從橋上過、橋流水不流、又云、石人機似汝、也解唱巴歌、汝若似石人、雪曲應須和、若會得此語、便會他雪竇頌。

【頌】金佛不渡鑪。爐卻眉毛、天上天下唯我獨尊。人來訪紫胡。又恁麼去也、只恐喪身失命。牌中數箇字。不識字底貓兒也無、話會處、天下納僧拂袖不得、只恐喪身失命。清風何處無。又恁麼去也、頭上漫漫、腳下漫漫、又云、來也。

【評唱】金佛不渡鑪、人來訪紫胡、此一句亦頌了也、爲什麼卻引人來訪紫胡、須是作家鑪鞴始得、紫胡和尚、山門立一牌、牌中有字云、紫胡有一狗、上取人頭、中取人腰、下取人脚、擬議則喪身失命、凡見新到便喝云、看狗、僧纔回首、紫胡便歸方丈、且道、爲什麼、卻咬趙州不得、紫胡又一夕夜深、於後架叫云、捉賊捉賊、黑地逢著一僧、攔胷捉住云、捉得也捉得也、僧云、和尚不是某甲、胡云、是則是、只是不肯承當、儞若會得這話、便許儞咬殺一切人、處處清風凜凜、若也未然、牌中數箇字、決定不奈何、若要見他、但透得盡、方見頌云、

【頌】木佛不渡火。燒卻了也、唯我能知。常思破竈墮。東行西行有何不可、總兒牽伴。杖子忽擊着。在山僧手裏、山僧不用人、阿誰手裏無。方知宰負我。似爾相似、撲索不著、有什麼用處、蒼天蒼天、三十年後始得、宰可永劫沈淪、不來諸聖解脫、若向這裏覷得、未免宰負、作陰生得、不率負去、杖子未免在別人手裏。

【評唱】木佛不渡火、常思破竈墮、此一句亦頌了、雪竇因此木佛不渡火、常思破竈墮、嵩山破竈墮和尚、不稱姓字、言行叵測、隱居嵩山、一日領徒入山塢間、有廟甚靈、殿中唯安一竈、遠近祭祀不輟、烹殺物命甚多、師入廟中、以拄杖敲竈三下云、咄、汝本塼土合成、靈從何來、聖從何起、恁麼烹殺物命、又乃擊三下、竈乃自傾破墮落、須臾有一人青衣峨冠、忽然立師前、設拜曰、我乃竈神、久受業報、今日蒙師說無生法、已脫此處、生在天中、特來致謝、師曰、汝本有之性、非吾强言、神再拜而沒、侍者曰、某甲等久參侍和尚、未蒙指示、竈神得何徑旨、便乃生天、師曰、我只向伊道、汝本塼土合成、靈從何來、聖從何起、侍僧俱無對、師云、會麼、僧云、不會、師云、禮拜著、僧禮拜、師云、破也破也、墮也墮也、侍者忽然大悟、後有僧舉似安國師、師歎云、此子會盡物我一如、竈神悟此則故是、其僧乃五蘊成身、亦云、破也墮也、二俱開悟、且四大五蘊、與塼瓦泥土、是同是別、既是如此、雪竇爲什麼道、杖子忽擊着、方知宰負我、因甚卻成箇宰負去、只是未得挂杖子在、且道、雪竇頌木佛不渡火、爲什麼卻引破竈墮公案、老僧直截與儞說、他意只是絕得失情塵意想、淨躶躶地、自然見他親切處也。

第九十七則

垂示云、拈一放二、未是作家、舉一明三、猶乖宗旨、直得天地陡變、四方絕唱、雷奔雷馳、雲行雨

驟傾湫倒嶽甕瀉盆傾也未提得一半在還有解轉天關能移地軸底麼試舉看

【本則】舉、金剛經云、若爲人輕賤。（故一線道、又且何妨。）是人先世罪業。（驢駝馬載。）應墮惡道。（陷墮一丁也。）以今世人輕賤故。（醜本及宋、只得忍受。）先世罪業。（向什麼處摸索、種般不生豆苗。）則爲消滅。（雪上加霜又一重、如湯消冰。）

【評唱】金剛經云、若爲人輕賤、是人先世罪業應墮惡道、以今世人輕賤故、先世罪業則爲消滅、只據平常講究、乃經中常論、雪竇拈來頌這意、欲打破教家鬼窟裏活計、昭明太子科此一分、爲能淨業障、教中大意說此經靈驗、如此之人先世造地獄業、爲善力强未受、以今世人輕賤故、先世罪業則爲消滅、此經故能消無量劫來罪業、轉重成輕、轉輕不受、復得佛果菩提、據教家、轉此二十餘張經、便喚作持經、有什麼交涉、有底道、經自有靈驗、若恁麼、儞試將一卷放在閑處看、他有感應也無、法眼云、證佛地者、名持此經、經中云、一切諸佛及諸佛阿耨多羅三藐三菩提法、皆從此經出、且道、喚什麼作此經、莫是黃卷赤軸底是麼、且莫錯認定盤星、金剛諭於法、體堅固、故物不能壞、利用故、能摧一切物、擬山則山摧、擬海則海竭、就諭彰名、其法亦然、此般若有三種、一實相般若、二觀照般若、三文字般若、實相般若者、卽是眞智、乃諸人腳跟下、一段大事、輝騰今古、迥絕知見、淨躶躶赤灑灑者是、觀照般若者、卽是眞境、二六時中、放光動地、聞聲見色者是、文字般若者、卽能詮文字、卽如今說者聽者、且道、是般若不是般若、古人道、人人有一卷經、又道、手不執經卷、常轉如是經、若據此經靈驗、何止轉重令輕、轉輕不受、設使歡聖功能、未爲奇特、不見龐居士聽講金剛經、問座主曰、俗人敢有小問、不知如何、主云、有疑請問、士云、無我相無人相、既無我人相、教阿誰講阿誰聽、座主無對、卻云、某甲依文解義、不知此意、居士乃有頌云、無我亦無人、作麼有疎親、勸君休歷座、爭似直求眞、金剛般若性、外絕一纖塵、我聞幷信受、總是假稱名、此頌最好、分明一時說了也、圭峰科四句偈云、凡所有相、皆是虛妄、若見諸相非相、卽見如來、此四句偈義、全同、證佛地者名持此經、又道、若以色見我、以音聲求我、是人行邪道、不能見如來、此亦是四句偈、晦堂云、話墮也不、知雪竇於此經上指出、若有人持此經者、卽是諸人本地風光、本來面目、若據祖令當行、本地風光、本來面目、亦斬爲三段、三世諸佛十二分教不消一揑、到這裏、設使有萬種功能、亦不能管得、如今人只管轉經、都不知是箇什麼道理、只管道、我一日轉得多少、只認黃卷赤軸、巡行數墨、殊不知、全從自己本心上起、這箇唯是轉處些子、大珠和尙云、向空屋裏、堆數函經看、他放光麼、只以自家一念發底心是功德、何故萬法皆出於自心、一念是靈、既靈卽通、既通卽變、古人道、青青翠竹盡是眞如、鬱鬱黃花無非般若、若見得徹去卽是眞如、忽未見得、且道、作麼生喚作眞如、華嚴經云、若人欲了知三世一切佛、應觀法界性一切唯心造、倘若識得去、逢境遇緣、爲主爲宗、若未能明得、且伏聽處分、雪竇出眼頌、大槩要明經靈驗也、頌云、

【頌】明珠在掌。（上通霄漢、下徹黃泉、道什麼、四邊謗訕八面玲瓏。）有功者賞。（多少分明、隨他去也、忽若無功時作麼生賞。）胡漢

不來。內外絕消息、驗較一些子。全無伎倆。展轉沒交涉、向什麼處摸索、打破漆桶來相見。伎倆既無。休去歇去、阿誰恁麼道。波旬失途。勘破了也、這外道魔王、平生踪跡不見。瞿曇瞿曇。佛眼覷不見、咄。識我也無。咄、勘破了也。復云、勘破了也。一棒一條痕、已在言前。

【評唱】明珠在掌、有功者賞、若有人持得此經、有功驗者、則以珠賞之。他得此珠、自然會用。胡來胡現、漢來漢現。萬象森羅、縱橫顯現。此是有功勳、法眼云、證佛地者、名持此經。此兩句頌公案畢。胡漢不來、全無伎倆。雪竇裂轉鼻孔、也有胡漢來則教伽現。若忽胡漢俱不來時、又且如何到這裏。佛眼也覷不見、且道是功勳是罪業、是胡是漢、直似羚羊掛角、莫道聲響蹤跡、氣息也無。向什麼處摸索、至使諸天捧花無路。魔外潛覷無門。是故洞山和尚、一生住院、土地神覓他蹤跡不見。一日厨前拋撒米麨、洞山起、心曰、常住物色、何得作踐如此。土地神遂得一見、使禮拜、雪竇道、伎倆既無、若到此無伎倆處、波旬也教失途。世尊以一切衆生爲赤子、若有一人發心修行、波旬宮殿爲之振裂。他使來惱亂修行者。雪竇道、直饒波旬恁麼來、也須教失卻途路。無近傍處。雪竇更自點胷云、瞿曇瞿曇、識我也無。釋迦老子、尚自不見、諸人向什麼處摸索。復云、勘破了也。且道是雪竇勘破瞿曇、瞿曇勘破雪竇、具眼者試定當看。

第九十八則

垂示云、一夏嘮嘮打葛藤、幾乎絆倒五湖僧。金剛寶劍當頭截、始覺從來百不能。且道作麼生是金剛寶劍。眨上眉毛、試請露鋒鋩看。

【本則】舉、天平和尚行腳時參西院、常云、莫道會佛法、覓箇舉話人也無。遍逗不少、這漢是則是、爭奈靈龜曳尾。一日西院遙見召云、從漪。鏡鈎搭索了也。(漪、於宜切、水文也。)平行三兩步。已是平舉頭。著、兩重公案。西院云、錯。也須是鑪裏煅過始得、劈腹剜心、三要印開朱點窄、未容擬議、主賓分。平近前。依前不知落處、展轉摸索不着。西院又云、錯。劈腹剜心、人皆喚作兩重公案、殊不知似水入水、如金博金。平行三兩步。牛前落後、這漢泥裏洗土塊。西院云、錯。認馬鞍橋、喚作爺下頷、似恁麼納僧打殺千箇萬箇、有什麼咖。西院云、適來這兩錯、是西院錯、是上座錯。前箭猶輕、後箭深。平云、從漪錯。西院云、錯。雪上加霜。平休去。錯認定盤星、果然不知落處、軒知闖鼻孔在別人手裏。西院云、且在這裏過夏、待共上座商量這兩錯。西院尋常背梁硬似鐵、當時何不趕將出去。平當時便行。也似納僧、似則似、是則未是。後住院謂衆云。曾見思舊債、也須是點過。我當初行腳時、被業風吹、到思明長老處、連下兩錯、更留我過夏、待共我商量、我不道恁麼時錯。我發足向南方去時、早知道錯了也。爭奈、這兩錯、何千錯萬錯、爭奈沒交涉、轉見郎當、慙殺人。

【評唱】思明先參大覺、後承嗣前寶壽、一日問、踏破化城來時如何、壽云、利劍不斬死漢、明云、斬、壽便打、思明十回道、斬、壽十回打云、這漢着甚死急、將箇死屍、抵他痛棒、遂喝出、其時有一僧、問寶壽云、適來問話底僧、甚有道理、和尚方便接他、寶壽亦打、趕出這僧、且道、寶壽亦趕這僧、唯當道他說是說、非、且別有道理、意作麼生、後來俱承嗣寶壽、思明一日出見南院、院問云、甚處來、明云、許州來、院云、將得什麼來、明云、將得箇江西剃刀、獻與和尚、院云、既從許州來、因甚卻有江西剃刀、明把院手、掐一掐、院云、侍者收取、思明以衣袖拂一拂便行、院云、阿刺刺、阿刺刺、天平曾參進山主來、爲他到諸方參得些蘿蔔頭禪、在肚皮裏、到處便輕開大口道、我會禪會道、常云、莫道會佛法、覓箇舉話人也無、屎臭氣薰人、只管放輕薄、且如諸佛未出世、祖師未西來、未有問答、未有公案、已前、還有禪道麼、古人事不獲已、對機垂示、後人喚作公案、因世尊拈花、迦葉微笑、後來阿難問、迦葉、世尊傳金襴外別傳何法、迦葉云、阿難、阿難應喏、迦葉云、倒卻門前刹竿、着、只如未拈花阿難未問已前、甚處得公案來、只管被諸方多瓜印子、印定了、便道、我會佛法奇特、莫教人知、天平正如此、被西院叫來連下兩錯、直得周章惶怖分疎不下、前不搆村後不迭店、有者道、說箇西來意、早錯了也、殊不知西院這兩錯落處、諸人且道、落在什麼處、所以道、他參活句不參死句、天平舉頭已是落、二落三了也、西院云、錯、他卻不薦得當陽用處、只道我肚皮裏有禪、莫管他、又行三兩步、西院又云、錯、卻依舊黑漫漫地、天平近前、西院云、適來兩錯是西院錯是上座錯、天平云、從渝錯、且喜沒交涉、已是第七第八頭了也、西院云、且在這裏度夏、待共上座商量這兩錯、天平當時便行、似則也似、是則未是、也不道他不是、只是趕不上、雖然如是、卻有些子衲僧氣息、天平後住院、謂衆云、我當初行腳時被業風吹到思明和尚處、連下兩錯、更留我度夏、待共我商量、我不道恁麼時錯、我發足向南方去時、早知道錯了也、這漢也煞道、只是落第七第八頭、料掉沒交涉、如今人開他道、發足向南方去時、早知道錯了也、便去卜度道、未行腳時、自無許多佛法禪道、及至行腳、被諸方熱喘、不可、未行腳時、喚地作天、喚山作水、幸無一星事、若總恁麼作、流俗見解、何不買一片帽戴大家過、時有什麼用處、佛法不是這箇道理、若論此事、豈有許多般葛藤、儞若道我會他不會、擔一擔禪、遠天下走、被明眼人勘破、一點也使不着、雪竇正如此頌出。

【頌】禪家流。染編一狀、飢餓過。愛輕薄。也有些子、呵佛罵祖、如麻似粟。滿肚參來用不着。只宜有用處、方未不遇、孔、隨架與他同參。堪悲堪笑天平老。天下納僧跳不出、不怕。人撲眉、也得人鈍鬼。卻謂當初悔行腳。未行腳已前錯了也、諸破草鞋、堪作何用、一棒勾下。錯錯。是什麼、雪竇已下名言了也。西院清風頓銷鑠。四院在什麼處、何似生、莫道西院、三世諸佛天下老和尚、亦須倒退三千、始得、於斯會得、許儞天下橫行。復云、忽有箇衲僧出云、錯。一狀餓過、發皺些子。雪竇錯、何似天平錯。四院又出世、據款結案、惣沒交涉、且道、畢竟如何、打云、錯。

【評唱】禪家流、愛輕薄、滿肚參來用不着、這漢會則會、只是用不得、尋常目視雲霄、道他會得多少禪、及至向烘爐裏、纔烹、元來一點使不着、五祖先師道、有一般人參禪、如琉璃瓶裏搗虀、虀相似、更動轉不得、抖擻不出、觸着便破、若要活潑潑地、但參皮殼漏子禪、直向高山上撲將

下來亦不破亦不壞古人道設使言前薦得猶是滯殼迷封直饒句下精通未免觸途狂見堪悲堪笑天平老卻謂當初悔行脚雪竇道堪悲他對人說不出堪笑他會一肚皮禪更使些子不着錯錯這兩錯有者道天平不會是錯又有底道無語底是錯有什麼交涉殊不知這兩錯如擊石火似閃電光是他向上人行履處如仗劍斬人直取人咽喉命根方斷若向此劍及上行得便七縱八橫若會得兩錯便可以見西院清風頓銷鑠雪竇上堂舉此話了意道錯我且問儞雪竇這錯何似天平錯且參三十年。

第九十九則

垂示云龍吟霧起虎嘯風生出世宗猷金玉相振通方作略箭鋒相拄徧界不藏遠近齊彰古今明辨且道是什麼人境界試擧看。

【本則】擧肅宗帝問忠國師如何是十身調御。作家君王大唐天子也合知愁麼頭上捲輪冠脚下無憂履。國師云檀越踏毗盧頂上行。須彌那畔把手共行猶有這箇在。帝云寡人不會。何不。偈話可惜許好彩不分付帝當時便喝更用會作什麼。國師云莫認自己清淨法身。雖然葛藤卻有出身處醉後郎當愁殺人。

【評唱】肅宗皇帝在東宮時已參忠國師後來卽位敬之愈篤出入迎送躬自捧車輦一日致箇問端來問國師云如何是十身調御師云檀越踏毗盧頂上行國師平生一條脊梁骨硬如生鐵及至帝王面前如爛泥相似雖然答得廉纖卻有箇好處他道儞要會得檀越須是向毗盧頂頭上行始得他卻不薦更道寡人不會國師後面忒煞郎當落草更注頭上底一句云莫錯認自己清淨法身所謂人人具足箇箇圓成看他一放一收八面受敵不見道善爲師者應機設教看風使帆若只僻守一隅豈能回互看佗黃檗老善能接人遇着臨濟三回便痛施六十棒臨濟當下便會去及至爲裴相國葛藤忒煞此豈不是善爲人師忠國師善巧方便接肅宗帝蓋爲他有八面受敵底手段十身調御者卽是十種他受用身法報化三身卽法身也何故報化非眞佛亦非說法者據法身則一片虛凝靈明寂照太原孚上座在揚州光孝寺講涅槃經有游方僧卽夾山典座在寺阻雪因往聽講講至三因佛性三德法身廣談法身妙理典座忽然失笑孚乃目顧講罷令請禪者問云某素智狹劣依文解義適來講次見上人失笑某必有所短乞處請上人說典座云座主不問卽不敢說座主旣問則不可不言某實是笑座主不識法身孚云如此解說何處不是典座云請座主更說一徧孚曰法身之理猶若太虛豎窮三際橫亘十方彌綸八極包括二儀隨緣赴感靡不周徧典座曰不道座主說不是只識得法身量邊事實未識法身在孚曰旣然如是禪者當爲我說典座曰若如是座主暫輟講旬日於靜室中端然靜慮收心攝念善惡諸緣一時放卻自窮究看孚一依所言從初夜至五更聞鼓角鳴忽然契悟便去叩禪者門典座曰阿誰孚曰某甲典座咄曰敎汝傳持大敎代佛說法夜半爲什麼醉酒臥街孚曰自來講經將生身父母鼻孔扭捏從今日已後更不敢如是看他奇特漢豈只去認箇昭昭靈靈落在驢前馬後須是打破業識無一絲毫頭可得猶只得一半在古人道不起纖毫修學心無相光中常自在但識常寂滅底莫認聲色但識靈知莫認妄想所

以道、假使鐵輪頂上旋、定慧圓明終不失、達磨問二祖、汝立雪斷臂、當爲何事、祖曰、某甲心未安、乞師安心、磨云、將心來、與汝安心、竟二祖忽然領悟、且道、正當恁麼時、法身在什麼處、長沙云、學道之人不識眞、只爲從前認識神、無量劫來生死本、癡人喚作本來人、如今人只認得箇昭昭靈靈、便瞪眼努目弄精魂、有什麼交涉、只如他道、莫認自己清淨法身、且如自己法身、儞也未夢見在、更說什麼莫認、教家以清淨法身爲極則、爲什麼卻不教人認、不見道、認着依前還不是、咄、好便與棒、會得此意者、始會他道、莫認自己清淨法身、雪竇嫌他老婆心切、爭奈爛泥裏有刺、豈不見、洞山和尙接人有三路、所謂玄路、鳥道、展手、初機學道、且向此三路行履、僧問、師尋常教學人行鳥道、未審如何是鳥道、洞山云、不逢一人、僧云、如何行、山云、直須足下無私去、(足下無私、一作無絲、)僧云、只如行鳥道、莫便是本來面目否、山云、闍黎因什麼顚倒、僧云、什麼處是學人顚倒處、山云、若不顚倒、爲什麼認奴作郎、僧云、如何是本來面目、山云、不行鳥道、須是見到這般田地、方有少分相應、直下打疊、教前迹呑聲、猶是衲僧門下、沙彌童行見解在、更須回首塵勞繁興大用始得、雪竇頌云、

【頌】一國之師亦强名。何必空花水月、風過樹頭搖。南陽獨許振嘉聲。果然坐斷要津、千箇萬箇中難得一箇半箇。大唐扶得眞天子。可憐生、接得堪作何用、一接得瞎衲僧濟什麼事。曾踏毗盧頂上行。一切人何不恁麼去、直得天上天下、上座作麼生踏。鐵鎚擊碎黃金骨。暢快平生、已在言前。天地之間更何物。茫茫四海少知音、全身擔荷、沙撒土。三千刹海夜沉沉。高看一眼、把定封疆、儞待入鬼窟裏去那。不知誰入蒼龍窟。三十棒一棒也少不得、拈了也、還會麼、咄、諸人鼻孔被雪竇穿了也、莫錯認自己清淨法身。

【評唱】一國之師亦强名、南陽獨許振嘉聲、此頌一似箇眞贊相似、不見道至人無名、喚作國師亦是强安名了、國師之道、不可比倫、善能恁麼接人、獨許南陽是箇作家、大唐扶得眞天子、曾踏毘盧頂上行、若是具眼衲僧眼腦、須是向毘盧頂上行、方見此十身調御、佛謂之調御、便是十號之一數也、一身化十身十身化百身、乃至千百億身、大綱只是一身、這一頌卻易說、後頌他道莫認自己清淨法身、頌得水灑不着、直是難下口說、鐵鎚擊碎黃金骨、此頌莫認自己清淨法身、雪竇忒煞讚歎他、黃金骨、一鎚擊碎了也、天地之間更何物、直須淨躶躶赤灑灑、更無一物可得、乃是本地風光、一似三千刹海夜沉沉、(沉沉一作澄澄、)三千大千世界香水海中、有無邊刹、一刹有一海、正當夜靜更深時、天地一時澄澄地、且道、是什麼切忌、作閉目合眼會、若恁麼會、正墮在毒海、不知誰入蒼龍窟、展腳縮腳、且道、是誰、諸人鼻孔一時被雪竇穿卻了也、

第一百則

垂示云、收因結果、盡始盡終、對面無私、元不曾說、忽有箇出來道、一夏請益、爲什麼不曾說、待儞悟來向儞道、且道、爲復是當面諱卻、爲復別有長處、試舉看、

【本則】舉、僧問巴陵、如何是吹毛劍。斬、驗。陵云、珊瑚枝枝樹着月。

光吞萬象、四海九州。

【評唱】巴陵不動干戈、四海五湖多少人、舌頭落地、雲門接人正如此、他是雲門的子、亦各具箇作略、是故道、我愛韶陽新定機、一生與人抽釘拔楔、這箇話正恁麼地也、於一句中自然具三句、函蓋乾坤句、截斷衆流句、隨波逐浪句、答得也不妨奇特、浮山遠錄公云、未透底人、參句不如參意、透得底人、參意不如參句、雲門下有三尊宿、答吹毛劍、俱云了、唯是巴陵、答得過於了字、此乃得句也、且道、了字與珊瑚枝枝樺着月、是同是別、前來道、三句可辨、一鏃遼空、要會這話須是絕情塵意想、淨盡方見、他道珊瑚枝枝樺着月、若更作道理轉見摸索不着、此語是禪月懷友人詩曰、厚似鐵圍山上鐵、薄似雙成仙體纈、蜀機鳳雛動歷覽、珊瑚枝枝樺着月、王凱家中藏難掘、顏回飢漢愁天雪、古檜筆直雷不折、雪衣石女蟠桃缺、佩入龍宮步遲遲、繡簾銀簟何參差、卽不知驪龍失珠、知不知、巴陵於句中取一句、答吹毛劍、則是快劍及上吹毛試之、其毛自斷、乃利劍謂之吹毛也、巴陵只就他問處便答、這僧話頭落也不知、頌云。

【頌】要平不平。細若蚍蜉、大丈夫漢須是恁麼。大巧若拙。不動聲色、藏身露影。或指或掌。看來然這箇不是。倚天照雪。斬鐵瞎。大冶兮磨礱不下。更用煅煉作什麼、干將莫能求。良工兮拂拭未歇。人莫能行、直饒干將出來、也倒退三千。別別。唱、有什麼別處、讚歎有分。珊瑚枝枝樺着月。三更月落、影照寒潭、且道、向什麼處去、直得天下太平、醉後郎當、恣意殺人。

【評唱】要平不平、大巧若拙、古有俠客、路見不平、以強凌弱、卽飛劍取強者頭、所以宗師家眉藏寶劍、袖掛金鎚、以斷不平之事、大巧若拙、巴陵答處、要平不平之事、爲他語忒煞傷巧、返成拙相似、何故、爲佗不當面揮來、卻去僻地裏、一截暗取人頭、而人不覺、或指或掌、倚天照雪、會得則如倚天長劍、凜凜神威、古人道、心月孤圓、光吞萬象、光非照境、境亦非存、光境俱忘、復是何物、此寶劍或現在指上、忽現掌中、昔日慶藏主、說到這裏、豎手云、還見麼、也不必在手指上也、雪竇借路經過、敎儞見古人意、且道、一切處不可不是吹毛劍也、所以道、三級浪高魚化龍、癡人猶戽夜塘水、祖庭事苑載孝子傳云、楚王夫人、嘗夏乘涼、抱鐵柱、感孕、後產一鐵塊、楚王令干將鑄爲劍、三年乃成雙劍、一雌一雄、干將密留雄、以雌進於楚王、王秘於匣中、常聞悲鳴、王問群臣、臣曰、劍有雌雄、鳴者懷雄耳、王大怒卽收干將、殺之、干將知其應、乃以劍藏屋柱中、因囑妻莫耶曰、日出北戶、南山其松、松生於石、劍在其中、妻後生男、名眉間赤、年十五問母曰、父何在、母乃述前事、久思惟、剖柱得劍、日夜欲爲父報讎、楚王亦募覓其人、宣言、有得眉間赤者、厚賞之、眉間赤遂逃、俄有客曰、子得非眉間赤邪、曰、然、客曰、吾飢山人也、能爲子報父讎、赤曰、父昔無辜、枉被荼毒、君今惠念、何所須邪、客曰、當得子頭幷劍、赤乃與劍幷頭、客得之、進於楚王、王大喜、客曰、願煎油烹之、王遂投於鼎中、於是二首相囓、(囓倪結切、噬也。)客恐眉間赤不勝、乃自刎以助之、三頭相囓、尋亦俱爛、(川本無此楚王一段。)雪竇道、此劍能倚天照雪、尋常道、倚天長劍光能照雪、這些子用處、直得大冶兮磨礱不下、任是良工拂拭也未歇、良工卽干將是也、故事自顯、雪竇頌

了、末後顯出道、別別、也不妨奇特、別有好處、與尋常劒不同、且道、如何是別處、珊瑚枝枝撐着月、可謂光前絕後獨據寰中、更無等匹、畢竟如何諸人頭落也、老僧更有一小偈。

萬斛盈舟信手拏。　卻因一粒甕吞蛇。
拈提百轉舊公案。　撒卻時人幾眼沙。

佛果圜悟禪師碧巖錄卷第十 終

後序

雲竇頌古百則、叢林學道詮要也、其間取譬經論或儒家文史以發明此事、非具眼宗匠、時爲後學擊揚剖析、則無以知之、

圜悟老師、在成都時、予與諸人、請益其說、師後住夾山道林、復爲學徒扣之、凡三提宗綱、語雖不同、其旨一也、門人掇而錄之、既二十年矣、師未嘗過而問焉、流傳四方、或致踵駁、諸方且因其言、以其道不能尋繹之、而妄有改作、則此書遂廢矣、學者幸諦其傳焉

宣和乙巳春暮上休　　孕人關友無黨記。

重刊圜悟禪師碧巖集疏

雪竇頌古百則、圜悟重下注腳、單示叢林、永垂宗旨、經也、學人機鋒捷出、大慧密室勘辨、知無實詣、毀梓不傳、權也、此書諸佛正眼、列祖大機、兩經鉗鎚、一無瑕纇、茲欲與大慧長書並駕、同圜悟心要、兼行、揭杲日於迷途、指南鍼於慧海、快然一覩、開彼群愚、相與圓成、不無利益、幸甚。

右伏以、十七歲、便悟雲門睦州、可道是口頭三昧、二百年不見碧巖雪竇、忽遭渠手下一交、怎忘得弓冶裘箕、莫斷卻兒孫種草、隨人去腳跟後轉、誰下得釣龍鈎、有箇具眼目底來、不看作繫驢橛、此事當如筏喻、他時自會筌忘、家家門戶透長安、前者呼後者應、種種因緣歸大數、昔之廢今之興、莫恠山僧口多、終是老婆心切、不讀東土書、安知西來意、重興一代宗風、雖無南去鴈、看取北來魚、便有十分消息、持同文印、續無盡燈、謹疏。

今月　日疏

圜悟老祖居夾山時、集成此書、欲天下後世、知有佛祖玄奧、豈小補哉、老妙喜深患學者不根道、溺于知解、由是毀之、謂其父子之間矛盾、可乎、今觸中張居士、重爲板行、果何謂哉、覽者宜自擇焉。

大德壬寅中秋。

住天童第七世法孫比丘淨日拜手謹書。

圜悟禪師評唱雪竇和尚頌古一百則剖決玄微扶剔幽邃顯列祖之機用開後學之心源況妙智虛凝神機默運晶旭輝而玄扃洞照圓蟾升而幽室朗明豈淺識而能致極哉後大慧禪師因學人入室下語頗異疑之幾勘而邪鋒自挫再鞫而納欵自降曰我碧巖集中記來質非有悟因慮其後不明根本專尚語言以圖口捷由是火之以救斯弊也然成此書火此書其用心則一豈有二哉嶋中張明遠偶獲寫本後冊又獲雪堂刊本及蜀本校訂訛舛刊成此書流通萬古使上根大智之士一覽而頓開本心直造無疑之地豈小補云乎哉

延祐丁巳迎佛會日

徑山住持比丘希陵拜書以爲後序

儒門子貢極有功於東家聖人藉令良馬見鞭影而奔皆如瞪若乎後之顏子吾聖師遊乎何言之天久矣靈山會上四衆海集世尊拈花宗旨諸人罔措獨迦葉尊者微爲之破顏與吾教中一唯之外口耳俱喪同一頓徹懸悟當時曾參不直下剖擊忠恕之祕鑰豈惟門人之惑滋甚千載之下何以祛一貫之迷雲乎異時成都佛果圜悟老禪笏夾山丈室拈提雪竇頌古百則其大弟子呆上座懼學人泥於言句辜負從上諸祖取老和尚舌頭一截併付烈焰煙而颺之拉摧堆自以巨壑太虛投置毫滴如古德德山賣弄油糍婆前此疏鈔已埃冷而無餘矣野火燒不盡春風吹又生花落碧巖陽陂如繡歷過去劫死灰復然不知何許許多葛藤一一從嶋中張居士手栽無影樹子上全體敗露直得般若無說諸天雨花百七八十年祇僧驀地橫穿鼻孔從前不曾嗅底寶熏一旦水湧雲蒸於八萬四千毛孔悉普悉徧可謂甚深希有難值難遇之事已而居士二子得心疾或謂勤寶經呆上座爛板居士不當拾遺燼而日月光景之故受如是報居士者疑其說以質於予予謂圜悟門人人人而呆上座碧巖自碧何得有說呆上座見月亡指遂乃追尤古佛毒燎亘天倒卻刹竿不放一綫彼未嘗識月者誰將乘一指而示之或者又謂呆上座火此書盟之社鬼者深重居士二子之患正坐此予謂當呆上座灼然秉炬時煉得故紙通紅何緣密室通風老勤巴命門舌根別自有不壞處一星迸散明月空山張居士那裏得這消息來把天然一段西蜀錦機依舊織作舊日花樣意者主林神陰爲之地訶護至今料亦是此書合出世因緣時節清涼池上針芥相投則書寫讀誦爲人演說之功應獲殊勝福德何況金石刻鏤展轉流布居士二子之心疾根本本不在此客作漢安以情識卜

度、居士緣、其目前不足計拔之禍福、亦以情識卜度之、是相隨赴火坑也、豈不冤哉、冥驗記沛國周氏、三子並瘠、一日有客造門曰、君可內省宿愆、忽猛憶、兒時見燕窠三子、伺其母出、各以一蒺藜吞之、斯須共斃、母還悲鳴而去、常自悔責、客曰、君既知悔責、罪今免矣、三子卽皆能言、然則居士二子之病、風喪心、得無亦有可悔恨之事乎、談般若者、若爲人輕賤、是人先世罪業應墮惡道、以今世人輕賤、故先世罪業、卽爲消滅、居士能於此有省、縱無始劫來所造諸業、當應時消滅、卽君二子之心疾、當如周氏三子之應、時能言、可以不疑、世尊住世、四十九年、六百函文字、覆藏徧界、若從杲上座之說、萬年一念更留踪跡、作麼、向上禪林、無限尊宿、有兩句、最嶮的、曰、任儞、卽心卽佛、我但非心非佛、今而後有謗如來正法輪者、君但應之曰、任汝說杲上座底是、我只說勤老師底是、若不如是、卽恐燎卻面門、四百四病一時發矣、將如居士二子心疾何、不見、古人道、養子方知父母恩、居士學佛知恩、臨老懺悔、他日作家爐鞴、跳出丈六金身、不知還見勤老師眞箇揚眉竪拂否、若還一句薦得、向道、佛祖有誓、罪不重科、莫殃及他家兒孫、好、雖然如是、且得沒交涉、

是年延祐丁巳中元日、

海粟老人馮子振題、

國譯信心銘義解序

中峯大師一生の提唱、總じて廣錄と號す、中に三祖信心銘義解壹冊あり、嗚呼銘豈に解し易からんや。世尊四十餘年の所說、列祖一千七百の公案、皆此の心に歸す、智解の禪、豈に以て玄要の旨を盡すに足らんや。且つ數百年の下に生れて、數百年の上を發明せんと欲す、亦已に難し。然るに如來五千餘卷の名敎も、亦この心に本づき、祖師一千七百の㋺玄關も、亦この心を離れず。旣に其の心を明むるときは、則ち敎と禪と、固に得て解すべし矣。是の故に拈華微笑、迦葉所傳の妙心、立雪斷臂、慧可所得の玄要、誠に事殊なりと雖も、理は卽ち一にして、皆此の心を明むる所以なり。是を以て中峯禪師、㋩三祖大師と數百年を代と雖も、明心見性、本不二なり、然れば則ち何の解し難きことか之れ有らん。惟ふに、師の作る所の義解は、意旨他なし、但だ學者をして、此の心の妙を窮めしめんと要するのみ矣。茲に㋥寬文九年歲己酉に次る孟秋の日、廣錄中より撮つて以て梓に

㋑銘。警戒の辭を銘といふ、「銘は志なり、名なり、其の功を記銘す」と韵會井に釋名にあり。

㋺玄關。古則公案なり。

㋩三祖大師。名は僧璨、支那禪宗の第三祖、生處を詳にせず、性山水を好み、舒州皖山に隱る、後周の武帝、佛法を破滅するを以て、司空山等に往來して、住所を定めず、二祖慧可の法を傳ふ、隋の開皇十三年、道信を得て衣法を傳へ、隋の煬帝大業二年十二月十五日(日本の推古天皇十四年)寂す、唐の玄宗、鑑智禪師と諡す。

命じて生る。願はくは賢人君子、此の義解に從つて、彼の銘の蘊奥を發き易からん乎。

㊀寛文九年。日本の靈元天皇の御字。

國譯三祖信心銘義解

解題

信心銘は、四言一百四十六句、五百八十四字より成れる、長篇の韻語なり、支那相承第三祖鑑智禪師の著すところにして、達磨以後、佛祖單傳の禪要を韻語に述べたるは、此を始めとす、其の說く所は、理義精邃にして、如來の一代の藏經、祖師の一千七百則の公案も、此中に攝せりといふも不可なし、本書の末疏には、支那の眞歇禪師の拈古、道沛の著語、日本の瑩山禪師の拈提、壽龍の夜塘水、支那の中峯明本禪師の闢義解等、其他假名抄二三種ありて、禪門最古の寶典の一なり、最も普く行はるゝなり、今國譯するに、中峯の闢義解を撮ることは、末疏中の最も玄奥を盡し、且つ縝素の得て解し易きを以てなり、この闢義解は、中峯廣錄の第十二卷に載す、三祖大師名は僧璨、支那禪宗の第三祖にして、生處を詳にせず、性山水を好み、舒州皖山に隱る　二祖慧可の法を傳ふ、後周の武帝、佛法を破滅するを以て句容山等に往來して住所を定めず、隋の開皇十三年四祖、道信に衣法を傳へり、

隋の煬帝、大業二年十月十五日、日本推古天皇十四年に入寂す、唐の玄宗、鑑智禪師と諡す、覺寂の塔といふ、義解者なる中峯は、名は明本、支那杭州錢塘の人、姓は孫氏、南宋の理宗景定四年に生る、高峯原妙に嗣ぐ、大元の仁宗金襴の袈裟及び、佛慈圓照廣慧禪師の號を賜ひ、文宗諡して智覺禪師と賜ひ、又順宗普應國師の號を加賜す、英宗至治三年八月十四日「日本後醍醐天皇元亨三年」入寂す、著す所の廣錄三十卷あり、この義解は、其中に出づるなり、信心銘の注釋書は、古來多くあるも、就中この闡義解は、其の最たるものにして、誠に此の銘の玄義を闡明して餘蘊なしといふべし。

國譯❹中峯和尚信心銘義解

參學門人北庭㊐慈寂㊅進

聞く、夫れ少林不立文字直指の道、方に二傳して璨大師に至ると。師、信心銘五百八十四字を作る、遽に乃祖の風を變じて、文字の流布と爲すに非ざることを得んや。或謂く、「然らず、是れ其の直指の道を顯示して、後の學者をして正信を具せしめんと欲す。」信と謂ふは何ぞや、其の廣大の心體、諸佛と平等にして間無きことを信ず、必ず其の自ら信じて、而して入つて修證を假らざらんことを欲す。㊁一たび信位に入れば、決定して退轉せざるなり。故に此の銘と不

❹中峯。支那杭州錢塘の人、姓は孫氏、南宋の理宗の景定四年に生る、高峯原妙に嗣ぐ、常に定居なく、或は船中、或は庵中に住し、幻住と號す、元の仁宗皇帝、金襴の袈裟及び佛慈圓照廣慧禪師の號を、又普應國師と賜ふ。英宗の至治三年八月十四日寂す、世壽六十一なり、日本の後醍醐天皇元亨三年なり、廣錄三十卷あり、この義解はその十二卷に出づ。

㊅慈寂。梵名は善達密的理、照堂と號す、元の至元三年三月二十一日、吳門の龍仁庵に卒す。

㊅進。元の順宗の元統二年正月に、中峯廣錄を天子に上進して入藏を乞ひたるなり。

㊁一入信位。圓教の位なり、一位卽一切位、一切位卽一位なることを明す、是の故に十信の滿心に卽ち五位を攝して、正覺を成ずる等、主伴具足するが故に、圓教と名く、卽ち華嚴經の主意より、圭峯の圓覺の略疏に出づ。

立文字の説と千古の下に並べ驅せて、而して相悖れざる者なり。益大師の言を立つることの至り、法を荷ふことの誠あることを信ず。嗟今の學者、義解に膠して、神心を廓悟し、源底を洞見して、以て正信を資くること能はず、返つて是の銘を以て、引證談柄の張本と爲す、其の ㋙金屑眼に入るの喩、吾が大師に及すこと無き能はず。㋚余、影を舟に繫ぐに因んで、凡そ兩句の下に、之れを申ぶるに ㋛語偈を以てすず、敢て見聞を炫耀し、仰いで ㋜勝軌を攀づとにはあらず、誠に義解を闢き、正悟を顯し、同志に曉し、自己を勵さんと欲するなり。其れ傍に肯はざる者あらば、余が罪過、當に何を以てか諸を釋くべけん。故に信心銘闢義解を以て、其の名を標す。

㋐至道無難、唯嫌揀擇。

祖師の道く、「至道無難、唯嫌揀擇」と。義解者の謂く、「此の兩句は則ち一篇の要綱、一銘の本旨なり。然も信の一言、全く悟證を該ぬ。信行の信にはあらず、㋝法華の諸子の權を會して實に入るの際に於て、信解品を作つて以て其の懷を述せしが如し。吾が祖は之れを目けて至道と曰ひ、唯だ佛は之れを證して菩提と曰ひ、衆生は之れを昧して無明と曰ひ、教中には

㋙金屑入眼。古人の語なり、五祖演、僧の環鄉に清淨本然の因緣を請益するに云く、「金屑雖貴落眼成翳」と、菩提涅槃、眞如法性等は貴ぶべしと雖も、若し之を執着すれば、法執の病となるに喩ふ。

㋚余因繫影。中峯は元の武宗至大二年己酉より辛亥に至るまで船居す、この時の著述なり後數年船遊をなす。

㋛語偈。今ここには偈を省き、闢のみを除きたり、義解のみを列す、中峯廣錄には偈及び闢を列す。

㋜勝軌。一動一靜は後學のてほんなればなり。

㋐至道。一心の異名なり、佛は之を證して菩提といひ、衆生は之を昧して無明といふ、已下四言二句の對句が、七十三對句にして、字數は五百八十四字なり、已下韵字の脚注は

之れを彰して本覺と爲す、皆一心の異名なり。徧く名相を該ね、色空に涉入するが若くなるに至るまで、轍を異にし途を殊にして、千條萬目なり、豈に優劣に乖かんや。悟迷を隔てず、斯れに由つて著れずといふことなし。

㋑趙州の栢樹子、楊岐の金剛圈、密庵の破沙盆、東山の鐵酸餡の如し。異端並び起つて、邪法扶け難し。卽ち知んぬ至道の話行ずることを。事理を該通し、古今を融貫せり。箇の無難と說くも、早く剩語と成る。然も聖凡深淨、目を極むれば全く眞なるも、揀擇情生ずれば、迥に至體に乖く、是れを唯だ擇揀を嫌ふと謂ふなり。下の文、殊なりと雖も、悉く其の意を禀けたり。」

但だ憎愛莫ければ、洞然として ㋒明白なり。

祖師の道く、「但だ憎愛莫ければ、洞然として明白なり」と。義解者の謂く、「生死を厭ひ涅槃を慕ふ、是れ憎愛、煩惱を捨てて菩提に趣く、是れ憎愛。倘但だ一切の聖凡の法中に於て、毫髮も欣厭の情を存することを得ざるときは、則ち此の心自然に明白ならん。」

毫釐も差有れば、天地懸に隔たる。

祖師の道く、「毫釐も差有れば、天地懸に隔たる」と。義解者の謂く、「我れ此の廣大の法門、悟迷間

實政十年版の脩證圓備錄に出づ。

㋝法華諸子。法華に上中下根、各四段の文あり、一は正說、二は領解、三は述成、四は授記、信解品は中根領解なり。

㋑趙州栢樹子。楊岐の金剛圈等は正宗贊に出づ。

㋒明白。心地洞然として明白なるを云ふ、莊子に「虛室生白」と云ふに同じ。

なしと曰ふと雖も、倘若し愛憎揀擇の情、亮盡も盡さざるときは、則ち霄壤相去ること、其の遠さに勝へず。」

現前することを得んと欲せば、㋐順逆を存すること莫れ。

祖師の道く、「現前することを得んと欲せば、順逆を存すること莫れ」と。師此に到つて、話、兩橛と作る。何となれば卽ち此の事本來現前す、誰をしてか得ることを欲せしめん。敎中に謂く、『正性通ぜずといふことなし、順逆皆方便』と。此に於て若し存すること莫からしめば、却つて斷滅と成り去らん。然らず、蓋し祖師曲げて初心の爲に方便委示す、美食飽人の餐に中らざるに似たり。」

㋑違順相爭ふ、是れを心病と爲す。

祖師の道く、「違順相爭ふ、是れを心病と爲す」と。義解者の謂く、「生死無常是れ心病なり、見聞覺知是れ心病なり、參禪學道是れ心病、成佛作祖是れ心病。會須らく兩なから違順を忘じ、聖凡を雙泯して、萬慮俱に捐て、一道空寂にして、萬金の神藥を假らざるべし。所謂心病といふは、自然に地の寄るべき無からん。」

玄旨を識らざれば、徒に㋒念靜を勞す。

一等の義解者の謂く、「祖

㋐順逆。順境界逆境界、順も逆も喜んだり厭つたりしてはならぬと、已上の八句は陌の韻を用ふ。
㋑違順。順逆と同じ。
㋒念靜。已上の四句は通の韻を用ふ、念靜は念を起さぬがよいと云ふて耳目を閉ぢて靜處に坐するを是とすると云ふ。

祖師の道く、「玄旨を識らざれば、徒に念靜を勞す」と。義解者の謂く、「玄旨といふは、至道の異名同體なり、若し識得せずんば、豈に特に念靜のみならんや。任ひ伊が恒河沙劫を歷て、萬種修證すとも、心外に法を求めば、只だ益自ら勞す。此れ吾が祖の許さざるところなり。」

圓なることは太虛に同じ、欠くることもなく餘ることもなし。

祖師の道く、「圓なることは太虛に同じ、欠くることもなく餘ることもなし」と。叢林商量して道く、「此の心、聖に在つても加增せず、凡に在つても減を加へず、太虛の圓なるが如く、各各に具足せり。」

良に取捨するに由る、所以に㋓如ならず。

祖師の道く、「良に取捨するに由る、所以に如ならず」と。義解者の謂く、「此の心既に太虛の圓なるが如し、相として具せずといふこと無し、一切皆如なり。倘、深淨の法中に於て、瞥に取捨を生ぜば、則ち如ならず。」

有緣を逐ふこと莫れ、㋔空忍に住すること勿れ。

祖師の道く、「有緣を逐ふこと莫れ、空忍に住すること勿れ」と。義解者の謂く、「二つ俱に虛幻なり、心に擬して執着ければ、取捨紛然たり。一念生ぜずんば、常に中道に居す、解脫の道人と爲すべし」

一種平懷なれば、㋕泯然として自ら盡く。

㋓如。已上の四句は魚の韻を用ふ、如とは不變の處をいふ、境に轉ぜられぬを如と云ふ。
㋔空忍。忍はこらへるなり、佛も法もないと云ふて、無法なことをするはよくない、よくこらへてすることなり。
㋕泯然。此の四句は軫の韻を用ふ、平懷とは一切處、平常にして萬事泯絕するをいふ。

祖師の道く、「一種平懷なれば、泯然として自ら盡く」と。義解者の謂く、「取捨の情既に盡きぬれば、聖凡の知見無依なり、自然に一切處に平常なり、一切處に泯然として滅す」と。

動を止めて止に歸すれば、止更に彌動ず。

祖師の道く、「動を止めて止に歸すれば、止更に彌動ず」と。一種義學の沙門の謂く、「眞心湛然として常住不動なり、無始より流轉すること皆妄見に由る。且く動既に妄動、止も亦妄止、妄を以て妄を止めば、猶ほし薪を抱いて焚を救ふがごとし、祇だ其の熾ゆるを益す。㋐ 肇法師の『夫の不動の作を尋ぬるに、豈に動を釋てて以て靜を求めんや、必ず靜を諸動に求め。必ず靜を諸動に求むるが故に、動ずと雖も常に靜なり、動を釋てずして以て靜を求むるが故に、靜なりと雖も而も動を離れず』と謂ふことを引く。審かに是の如きんば、則ち動に動相無く、靜に靜相無し。教中に謂ふが如し、『動靜の二相了然として生ぜざるものは、蓋し動靜皆是れ妄緣なることを了知すれば、群妄既に消して、二相亦遣る』と。」

㋐ 肇法師謂。肇の物不遷論に出づ。

㋑ 惟滯兩邊。已上の四句は、蕭宋の韻を通用す。

㋑惟だ兩邊に滯らば、寧ろ一種を知らんや。

祖師の道く、「惟だ兩邊に滯らば、寧ろ一種を知らんや」と。義解者の謂く、「兩邊は是れ動靜の二相なり、一種は是れ覿體差ふこと無し、乃ち上の二句を釋するの辭なり。當に知るべし、動靜の二邊、安なるときは則ち俱に安なり、眞なることときは則ち全く眞なり、安んぞ二致有らんやと。」

一種に通ぜざれば、兩處功を失す。

祖師の道く、「一種通ぜざれば、兩處功を失す」と。一等㋒杜撰の禪和道く、「遮の兩句は是れ結前引後の辭なり。結前と謂ふは則ち一種の眞理を顯示す。引後と謂ふは則ち深く空有の妄緣を責むるなり。

㋒ 有を遣れば有に沒す、空に從へば空に背く。

祖師の道く、「有を遣れば有に沒し、空に從へば空に背く」と。有等の言に循ひ句を逐ふ者謂く、「有は乃ち妄有、之れを遣るに由るが故に沒す。空本自ら空なり、之れに從はんと欲するが故に背く。有は是れ空家の有なり、空は是れ有家の空なり、空は有を得て故に彰れ、有は空を得て乃ち顯る。其の彰はるるを以ての故に、空全く是れ有なり、其の顯はるゝを以ての故に、有全く是れ空なり。互融互攝して差はず、相在相入して損すること無し。是れに由つて知んぬ、之れを遣り之れに從ふ、妄に徇ふ者に非ざることを得んや。」

㋒ 杜撰禪。この故事は前輯所所に出づ、略之す、杜撰の禪とは師承なく法式なきなり、只だ自家の胸中臆見に據つて爲す所ないふ。

㋓ 有。妄想の有をいふ。

㋔ 多言。言句思量の間では至道には相應せぬとなり。

㋔多言多慮、轉た相應せず。

義解者の謂く、「言多ければ道を去ること轉た遠し。又云く、神心洞照して、聖默を宗と爲すと。又

㋐逢磨の『外諸緣を絶して、內心喘ぐこと無し』と道ふことを引く。外諸緣を絶するときは、則ち其の言を忘ずるなり、內心喘ぐこと無きときは、則ち其の慮を絶するなり。」

㋑絶言絶慮、處として通ぜずといふこと無し。

㋒道吾笏を舞し、㋓石衆弓を張り、㋔西河の師子、㋕長沙の大蟲、且つ當時極めて餘態有り。今朝に到るまで尙ほ遺風を播す。祖師門下に逗到しては、直に跡を寘し蹤を潛さしむ。何を以てか此の如くなる、豈に道ふことを見ずや、簸箕米を量る升渾べて別なり、斛斗に茶を煎ず銚同じからずと。所以に云ふ、絶言絶慮、處として通ぜずといふことなしと。或者、文に依つて義を解して道く、「絶言は則ち言語道斷なり、絶慮は則ち心行處滅なり。言語道斷は、則ち寂にして照なり、心行處滅するときは、則ち照にして寂なり。此に到つて如來禪祖師禪、以て一串に穿過しつべし。又古人伊を敎へ、休し去り歇し去り、口邊に醍生じ、舌上に草出づる等の語有り。是の理に非ざることを得んや。」

㋖根に歸すれば旨を得、照に隨へば宗を失す。

與麼與麼、西を指して東と作す、不與麼不與麼、有を認めて空と爲す。與麼の中の不與麼、綱の風に兜するに似たり。不與麼の中却つて與麼、濕紙將ち來つて大蟲を裹む。何を以てか此の如くなる、豈に道ふことを見ずや、根に歸すれば旨を得、照に隨へば宗を失すと。一等の人巧に卜度を生じて道く、「絶言絶慮は、是れ根に歸するなり、處として通ぜずといふこと無しといふは、是れ旨を得るなり。儞若し根に歸し旨を得る會を作さば、又却つて照に隨つて宗を失す。然して根本歸すること無く、旨亦得るに非ず。此の意を了ぜざれば、妄に自ら認執す、是れ照に隨ふと謂ふ。苟し之れを照すの跡を存せば、則ち佛祖の心宗、其れ失ふに勝へず」と。

須臾も返照すれば、㋗前空に勝却す。

祖師の曰く、「須臾も返照すれば、前空に勝却す」と。一等强ひて道理を說く者の謂く、「㋘明暗色空消して自己に歸る者を以て、是れを返照と名く。當に知るべし、空自ら空ならず、心に因るが故に空なり、有自ら有にあらず、心に因るが故に有なり。心を離れて空無し、心を離れて有無し。衆生自心に違背して、妄りに空有を見て、而して之れに從ひ、之れを却けんことを欲す、俱に顚倒と名く。」と

㋙轉變は、皆妄見に由る。

祖師の道く、「前空の轉變は、皆妄見に由る」と。義解者の謂く、「有是れ妄、空も亦是れ妄と。空有、緣に從つて、變易して定ること無し。妄を離るることを得んと欲せば、二つ俱に排遣すべし」と。

㋐逢磨。この語も正宗贊などに出づ。
㋑絶言。無言無說の處ばかりではないとなり、大徹底の人は何を云ふても言慮の外なればと。
㋒道吾。眞禪師なり。
㋓石衆。洪禪師、馬祖に嗣ぐ。
㋔西河。汾陽昭禪師、首山に嗣ぐ。
㋕長沙。岑禪師なり。
㋖歸根。至道の旨を得るないふ、照は光影邊、宗は要なり、又跡を認むるを隨照といふ
㋗前空。已上十七句は東の韻を用ふ、前空は目前の頑空を指す、今は二乘等の空を斥するが爲に之を言ふに非ず。
㋘明暗。情と無情となり。
㋙轉變。この二字は正しく二乘等に通ず。

眞を求むることを用ひず、㊁惟だ須らく見を息むべし。

㋐生鐵の脊梁を竪起し、横に天に倚るの長劍を按ず。閑忙靜鬧、門頭總べて與に一片に打成す。既に精專に復た勇健なり。將に謂へり、成佛作祖、一塵を隔てずと。三祖大師に撞著すれば、輕輕として伊に向つて道ふ、眞を求むるとを用ひず、惟だ須らく見を息むべしと、好々方便を看よ。一等義學の者の謂く、「見に六十二種有り、㋒法數に具に陳ぶ。斷常の二見を主と爲ることを出でずして、眞を求むれば斷見に落つ、妄を逐はば常見に墮す。㋓楞嚴に謂く、『妄と言つて諸眞を顯す。妄と眞と同じく二つながら妄なり、猶ほし眞と非眞とに非ざるがごとし、云何が見と所見とあらん。但だ能く一切の見を離るれば、全體卽ち眞なり、求むることを用ひざるなり。』」

㋔二見に住せず、愼んで追尋すること勿れ。

祖師の道く、「二見に住せず、愼んで追尋すること勿れ」と。義解者の謂く、「既に妄に住せず、又眞に住せず、箇の不住に和して亦住せず。正與麼の時、大用を繁興して、擧必ず全眞なり、更に此れを離れて別に尋ぬることを假らず。」

纔に是非有れば、㋕紛然として心を失す。

㊁惟須。此の四句は繩の韻か用ふ。

㋐生鐵脊梁。これは龍藏の形相を云ふ。

㋒法數。諸乘法數は明時代の編、藏乘法數は元時代の編なり。

㋓楞同。經第五に出づ。

㋔二見。前の眞妄の二見。

㋕紛然。已上の四句は侵の韻を用ふ、紛然はみだりがはしくといふ事なり。

祖師の道く、「纔に是非有れば、紛然として心を失す」と。叢林往往に道ふ、「盡十方世界、是れ沙門の自己、十方世界、是れ古佛の法身」と。所以に云く、「㋖撲落他物に非ず、縱横是れ塵にあらず」と。也た是なる者無し、也た非なる者無し。一一皆是れ妙明の心中より流出す。

㋗二は一に由つて有なり、一も亦守ること莫し。

祖師の道く、「二は一に由つて有なり、一も亦守ること莫し」と。義解者の謂く、「纔に二に徇へば卽ち一を昧ます、纔に卽ち一を守れば二を生ず。當に知るべし、二は是れ眞妄、一は是れ自心なることを。眞妄の二つ既に除くときは、自心の一も住すること無し。解脫の大道と謂つべし。」

一心生ぜざれば㋘萬法に咎無し。

祖師の道く、「㋙一心生ぜざれば、萬法に咎無し」と。義解者他の經論を引いて道く、「心生ずれば種種の法生ず、心滅すれば種種の法滅す。諸法自ら生ぜず、諸法自ら滅せず、皆一心より變ずる所なり。一心生ぜざれば、諸法常住なり。所以に㋚古人の謂く、『鐵牛は師子吼を怕れず、恰も木人の華鳥を見るに似たり』と云ふの說、政に此れに類せり」と。

㋖撲落。會元十に、永明壽禪師が薪の墮つる音を聞いて省あり、偈を作つて曰く、「撲落非他物、縱橫不是塵、山河及大地、全露法王身。」

㋗二山一。自心を是とおもふに由つて、眞妄の二見が生ずるなり。

㋘萬法。已上の四句は有の韻を用ふ、いろいろに心が生ずるに依りて、萬法に咎あり。

㋙心生。起心命なり、これは二句とも古祖の偈。

㋚古人。鷹居十偈に出づ。この二句の次に「木人本體自無情、花鳥逢人亦不驚、心境如如只遮是、何慮菩提道不成。」

㋐ 咎無ければ法無し、生ぜざれば心にあらず。

祖師の道く、「咎無ければ法無し、生ぜざれば心にあらず」と。義解者の謂く、「此の二句は上の二句に返して言ふ。咎無しと謂ふときは、則ち萬法自ら消し、生ぜざれば則ち一心自ら寂なり。法消し心寂す、至道の體、㋑ 冲然として得ることを待たずして得るなり。」

能は境に隨つて滅し、㋒ 境は能を逐ふて㋓ 沈む」と。義解者

祖師の道く、「能は境に隨つて滅す、境は能を逐ふて㋓ 沈む」と。義解者遽に㋔ 永嘉の「境は智に非ざれば了ぜず、智は境に非ざれば生ぜず、智の生ずること境を了じて生ず、境了ずることは智生じて了ず」と道ふを引く。當に知るべし、能は是れ一心、境は是れ諸法、能は卽ち智の異名なり、境は卽ち法の別號なりと。境滅するときは則ち能了の心も亦滅す、心空ずるときは則ち所現の境も亦沈む。相卽相在、互攝互融、初めより間斷無し。其の了ぜざる者、之れを目けて迷と曰ふ。

㋑ 無咎。心境一如なり。
㋑ 冲然。冲は深なり。
㋒ 境逐。已上の四句は偈の韻を用ふ。
㋓ 沈。滅するなり。
㋔ 永嘉。この語は永嘉集の毘婆舍那頌の章に出づ。

境は能に由つて境たり、能は境に由つて能たり。

祖師の道く、「境は能に由つて境たり、能は境に由つて能たり」と。箇の語に依つて解を生ずる漢有つて道く、「境自ら境にあらず、能に因るが故に境なり、能自ら能ならず、境に由るが故に能なり。

能は境に由つて生じ、境は能に托いて起る。當に知るべし、生にして不生なり、心外に法無し、起にして起に非ず、法の外に心無しと。祖師此に到つて、一心萬法を將つて、丸して箇の密果子と作す。只だ伊が笑談に一嚥せんことを要す」と。

㋕ 兩段を知らんと欲せば、㋖ 元是れ一空。

祖師の道く、「兩段を知らんと欲せば、元是れ一空」と。義解者の商量して道く、「兩段といふは前の心法を指す、言ふ所の一空、太虛の頑然たるの空に非ず、小乘斷滅の空に非ず、乃ち靈覺無相の眞空ならくのみ。此の空是れ諸佛の源、萬靈の母なり。㋗ 聲も無く臭も無し、群象の前に昭昭たり、有にあらず無にあらず、諸塵の表に朗朗たる者是れなり。」

一空、兩に同じ、齊しく㋘ 萬象を含む。

祖師の道く、「一空、兩に同じ、齊しく萬象を含む」と。義解者の卜度して道く、「心、法に異ならざる、是れ一空兩に同じ、法、心に異ならざる、是れ齊しく萬象を含む。所以に㋙ 古に云ふ『色を見れば便ち心を見る、色無ければ心現ぜず』と。又教の中に謂く、『森羅及び萬象、一法の印する所なり。』故に祖師此を發明す」と。

㋚ 精麤を見ざれば、㋛ 寧ろ偏黨有らんや。

㋕ 兩段。前の能と境となり。
㋖ 元是。已上の四句は通の韻を用ふ、能も空も唐の韻に通ず。
㋗ 無聲。詩の皇矣に出づ、「德輶如レ毛」云云。
㋘ 萬象。眞空の處に萬象を、ともに含むなり、眞空を了ずれば能も境も他物にあらずとなり。
㋙ 古云。會元八に延慶院の便殷禪師、僧問ふの語なり。
㋚ 精麤。偏黨なり、偏は偏頗、黨は黨類なり。
㋛ 寧有。已上の四句は養蒔の韻を用ふ、寧は安なり、なほ胡といふが如し、助辭なり、何と同意。

義解者の謂く、「心法既に空じ、能所俱に泯するときは、則ち生佛體同じ、悟迷一致なり。故に ㊇息心の銘に、『何れが貴く何れが賤しく、何れが辱何れが榮、何れが得何れが失、何れが重何れが輕、一道虛寂にして、萬物齊平なり』と謂ふの語を引いて證と爲す」と。

㊈大道體寬く、易無く難無し。

祖師の道く、「大道體寬く、易無く難無し」と。義解者の道く、「本來箇の事日月を包ね、虛空を含す。佛祖も名を知らず、大地も載せ起さず。天の普く蓋ふが如く、地の普く擎ぐるが如し。各各圓成し、人人具足す、又何の難易の言を容る可けんや。其の難易する所は、人に在つて法に在らざるなり。肯て自心是れ佛なりと信ずることは卽ち易く、自心是れ佛なりと信ぜざることは卽ち難し。

小見は狐疑す、㋐轉た急なれば轉た遲し。

祖師の道く、「小見は㋐狐疑す、轉た急なれば轉た遲し」と。義解者の道く、「一切衆生、空却已前より、三世の諸佛と、同じく正覺を成ず、初めより少欠無し。此の心了ぜざれば、返つて愚迷に墮して知覺せず、是の故に諸佛祖、百千の方便、之れを導き之れを策つて、之れ

㊇息心銘。傳燈三十二、僧の亡名息心銘あり、「隋の左拾遺棄官僧と爲り、名を亡名と曰ふ」とあり。

㊈大道。この語は前の至道無難云云と一意なり。

㋐轉急。已上四句は皆韻押む、來支互に隔句なり、高麗本を原本とする本には、この四句と後の四句と前後せり、後の四句が此の四句の前にあり。

㋐狐疑。野狐の疑のやうに言句の上ばかりを疑ふ、或は趙州の無、潙山の麻三斤などと、無理會の話を十年二十年の大疑を生ずに居るないふ、大疑は大悟し、小疑は小悟す。

をして悟入せしむ。所以に云ふ、一大事因緣の爲に、故に世に出現すと、乃ち此れが爲なり。但だ是れ學人、自心是佛なりと信ぜずして、心外に別に求めんと欲す、故に之れを斥けて小見と爲す。當に知るべし、此の心本具せり、箇の疾に菩提を成ずることを得んと說く。已に剩語と成る、何の遲速か之れ有らんや。」

㋐之れを執すれば度を失ふ、必ず邪路に入る。

祖師の道く、「之れを執すれば度を失ふ、必ず邪路に入る」と。近代有等の師位に據る者、人の古人の話を看て工夫を做して、孜孜として寸陰を捨てず、己事を克究すと說く者を見ては、便ち遽に此の二句を引いて、之れを斥けて之れを執すれば度を失ふと謂ふ。乃ち云く、佛法那ぞ遮箇の事有らん、㋑一切見成せり、何ぞ領取せざる、特地に死模樣を做して作麼かせんと。

之れを放てば自然なり、㋒體に去住無し。

義解者の謂く、「執心既に遣るときは、自然に任運に騰騰として、拘無の絆無し。㋓動は行雲の若く、止は谷神の如し。既に彼此に心無し、寧ろ去住を分つこと有らんや。圓覺に謂く、『一切の時に居して、妄念を起さず、諸の妄心に於ても、亦息滅せざれ。妄想の境に住しても、了知を加へず、無了知に於

㋐執之。悟に執着すればなり。

㋑一切見成。「一切見成は更に誰をしてか會せしめん」と、會元の十七に湛堂禪の章にあり。

㋒體無。已上の四句は遇暮の韻を用ふ、無拘無絆ないふて去住なしと。

㋓動若行雲。肇論に出づ、谷神は山びこなり、山びこは其の應するものの姿見えざるも、喚べば應ずるが故に無きにめらず。

ても、眞實を辨ぜざれば、亦差近し。『凡聖情盡き、體露眞常なり、廓かに妄緣を絶すれば、卽ち如如の佛なり。』

性に任せて道に合ひ、㋙逍遙として惱を絶す。

祖師の道く、「性に任せて道に合ひ、逍遙として惱を絶す」と。義解者の謂く、「心空及第の士は、性任すことを待たずして任す、道、合ふことを待たずして合ふ。逍遙は㋚岫を出づる雲の如し、惱を絶すといふは空に行く月の若し。大圓鏡中、誰有つてか爾らざらん」と。

念を繫くれば眞に乖く、㋛昏沈不好なり。

祖師の道く、「念を繫くれば眞に乖く、昏沈不好なり」と。義解者、敎中に云ふを引く、「心、道に繫けず、亦業を結ばず、是れを得道の人と爲す」と。或は德山の「毫釐も念を繫くれば、三途の業因なり」といふの說を引いて證と爲す。又云く、「體道の士、纖に纖毫の凡聖悟迷の情有つて念慮に繫けば、則ち凡聖悟迷の見の爲に昏まされん。眞に一物、懷に干らざる、萬緣俱に蕩盡を須ちて、初めて他の古人の見處に合ふべし」と。

不好なれば神を勞す、㋜何ぞ疎親を用ひん。

祖師の道く、「不好なれば神を勞す、何ぞ疎親を用ひん」と。義解者の謂く、「念を繫くるに由つて便

㋙逍遙。自得の義、ゆるやかなる貌。
㋚岫。山の穴。
㋛昏沈。已上の四句は皆の韻を用ふ、好は佳なり、今不好といふは、內心の不明不安を謂ふ。
㋜何。深く責むるの辭。

ち眞に乖く、既に眞に乖けば卽ち神を勞す。神を勞するを以て必ず疎親あり。當に知んぬべし、繫念は乃ち疎親の因、疎親は卽ち繫念の果なることを。祖師箇の何の用かを說く、臍を噬むとも何ぞ及ばんや。」

㋝一乘に趣かんと欲せば、六塵を㋞惡むこと勿れ。

祖師の道く、「一乘に趣かんと欲せば、六塵を惡むこと勿れ」と。義解者の謂く、「一乘は卽ち自心の異名なり、六塵根識十八界は、乃ち自心の別號、安んぞ一乘に趣いて六塵を惡むこと有らん。是れ猶ほ手足を愛して肩背を忘るゝがごとし。當に知んぬべし、此の心を悟るときは則ち六塵卽ち一乘、此の心に迷ふときは則ち一乘皆六塵なることを。㋟裴相國の謂く、『之れに背くときは則ち凡なり、之れに順ふときは卽ち聖なり。又楞嚴に謂く、『阿難、汝俱生の無明、汝をして生死に輪轉し、結根せしむることを識知せんと欲するや。唯だ汝が六根なり、更に他物無し。汝復た無上菩提を知らんと欲するや。汝をして速かに安樂解脫、寂靜妙常を證せしめん。亦汝が六根なり、更に他物に非ず』と。」

六塵を惡まざれば、㋠還つて正覺に同じ。

㋝一乘。一乘にかなへば六塵卽ち一乘なり、一乘は運載の義なり。
㋞勿惡。已上の四句は眞の韻を用ふ。
㋟裴相國。名は休、黃檗運下の居士、この語は傳心法要に出づ。
㋠還同。この二句は覺の韻を用ふ、嵩罷本には「夢幻空華何勞把捉」の二句を、この二句と對せしむといふ。

祖師の道く、「六塵を惡まざれば、還つて正覺に同じ」と。者解者の謂く、「也た六塵無く、也た正覺無し。總べて只だ是れ箇の妙明心地、喚んで正覺と作すも也た得たり、喚んで六塵と作すも也た得たり。儞若し　妙明の心地に於て了ぜざる所有らば、喚んで六塵と作すも也た了ぜず、喚んで正覺と作すも也た了ぜず、別に甚麼の事か有らん。只だ箇の了と不了と他の佛祖、❷口嘮し舌沸いて、許多の優劣を分出することを引き得て、都べて是れ自ら丈夫ならずして、之れをして然らしむるなり。」

智者は ❸無爲なり、愚人は自縛す。

祖師の道く、「智者は無爲なり、愚人は自縛す」と。義解者の謂く、「智は自ら智にあらず、悟に由つて智なり、愚は自ら愚にあらず、迷に由つて愚なり。智者は自心を悟る、心悟れば本無爲なり、愚人は自心に迷ふ、心迷へば還つて自縛す。當に知んぬべし、悟者は無爲なり、天地鬼神なりと雖も、能く之れをして爲さしむること莫し。迷者の自縛、千聖萬賢なりと雖も、能く其の縛を釋くこと莫し、惟だ智と愚と惡く心に由つて變ず、豈に外物の之れをして然らしむならんや。」

❷法に異法無し、妄に自ら愛著す。

❷口嘮舌沸。大慧徑山に住する上堂に「若也放開從二口嘮舌沸一若也把住不消一擊。」

❸無爲。無事これ賞人、但だ造作することなかれとなり。

❷法。高麗本には「方」の字に作るといふ、法とは一乘の法なれば異法はないぞ、愛著に依つて二法となる。

祖師の道く、「法に異法無し、妄に自ら愛著す」と。義解者の謂く、「❸青青たる翠竹、盡く是れ眞如、鬱鬱たる黃華、般若に非ざるは無し。盡微塵法界、海內所有の聲色、中に於て一の同相を覺むるに不可得なり、一の異相を覺むるにも、亦不可得なり、此の同異を離るゝも、俱に不可得なり。嗟乎此れを了ぜざる者、佛に著せば佛に礙へられ、法に著せば法に礙へらる。且つ佛法に著するすら尙ほ其の窒礙、況ふ、此れより以往、又何の愛著としてか窒礙せざる者あらんや。」

❹心を將つて心を用ふ、豈に大錯に非ざらんや。

義解者の道く、「儞が成佛せんと要する。是れ心を將つて心を用ふるなり、乃至生死を超え、涅槃に住し、菩提を證し、煩惱を斷ぜんと要する等、總べて箇の心を將つて心を用ふることを出でず。」

❺迷へば寂亂を生じ、悟れば好惡無し。

祖師の道く、「迷へば寂亂を生じ、悟れば好惡無し」と。義解者の謂く、「眞寂體中に一切留めず。楞嚴に謂ふ、『無漏眞淨、云何が是の中に、更に他物を容れん』と。其の未だ此の理を悟らざるを以て、面前に寂を見ざれば便ち亂を見、動を見ざれば便ち靜を見、知らず動も也た是れ迷、亂も也た是れ迷、靜も也た是れ迷、寂も也た是れ迷、乃至自己立地に成佛すと見るも亦是れ迷なることを。能く

❸青青。憲國師曰く、「此れは靈く是れ文殊普賢大人の境界云云。」

❹將心。人人本心を具足しながら、心を用ひんとするは牛に騎りて牛を覓むるが如し、大なる錯ではないかと。

❺迷生。迷ふに依りて寂靜の處を好み、動亂の處を厭ふぞとなり。

「此の迷信を了じて、當外に解脱するときは、則ち一一に天眞なり。一一に明妙なり。既に亂を見ず、亦寂を知らず、二邊捨離し、中道立せず。安ぞ好惡の情の復た障を爲し、礙を爲す者有らんや。」

一切二邊、良に斟酌に由る。

祖師の道く、「一切㋐二邊、良に斟酌に由る」と。或は箇の杜撰の巡宮有つて、注解して道く、「機に亂有るを見て、便ち寂有りと見る。當に知るべし、亂自ら亂ならず、寂に因るが故に亂なり、寂自ら寂ならず、亂に因るが故に寂なりと。是れに因つて諸法紛然として、未だ相對して相待つて起らずんば有らず。云ふ所の斟酌の二字は、便ち是れ最初に揀擇と謂ふの說と差近し。其の揀擇の識未だ消せざるを以てするときは、卽ち寂亂等の二邊に於て、動斟酌の念を成す、其の未だ遣らざるを以て、則ち一切二ならざることを得じ」と。

夢幻空華、何ぞ㋑馳捉を勞せん。

祖師の道く、「夢幻空華、何ぞ把捉を勞せん」と。義解者敎中に道ふを引く、「一切有爲法、如夢幻泡影、如露亦如電、應作如是觀」と。又永嘉の道ふを引く、「四大を放つて把捉すること莫れ、寂滅性の中飮啄に隨ふ。諸行無常にして一切空なり、卽ち是れ如來の大圓覺なり。」便ち情を肆にして緣ずる所、意の作す所に任せて、禁戒を毀犯し、律義を破壞するが若くに至つて、一へに此の二語を以て證と爲す。

㋐二邊。迷悟寂亂の二邊は、妄に斟酌するに依りて生ずるなり、斟酌は卜度なり。

㋑馳捉。人我を爭ふたいふ。

得失是非、㋒一時に放却す。

祖師の道く、「得失是非、一時に放却す」と。義解者の道く、「一法界の中也た得る者無く、也た失ふ者無く、也た是なる者無く、也た非なる者無し。良に妄情瞥起し、異見橫に生ずるに因つて、得失無き中に於て、熾然として得失あり、是非無き處に於て、紛然として是非あり。所以に祖師、伊をして一時に放却せしめ、已に是れ鋒を傷り手を犯す。平地の風波、儞還つて知るや、本來既に無なり、箇の甚麼をか放す。若し放す可きの理有りと曰はゞ、則ち得失是非、甚れの處に向つてか安着せん。」

㋓眼若し睡らざれば、諸夢自ら除く。

祖師の道く、「眼若し睡らざれば、諸夢自ら除く」と。義解者の謂く、「此の二句は是れ前は喩、後は合、人の大いに兩目を張つて、歷歷として昧まさざるが如し。卽ち昏住して自ら遣る、既に昏住せずんば、安ぞ夢緣有らん。」

心若し異ならずんば、㋔萬法一如なり。

祖師の道く、「心若し異ならずんば、萬法一如なり」と。義解者の謂く、「萬法本如なり、心に由つて

㋒一時。已上十二句は藥鑛の眼を用ふ、法界の中には得失是非はない、妄情に依つて生ずるなれば一時に放却せよとなり。

㋓眼若。初より睡らずんば、夢みると云ふこともあるまじきと、得失是非がなくば放却もするまじきとなり。

㋔萬法。已上の四句は鹿の眼を用ふ、萬法はもの如じやに、こちらより心を起すに依つて異なるなり。

乃ち異なり。譬へば山自ら高からず、心異なるが故に高し、水自ら深からず、心異なるが故に深きが如し。㊃此の心異なるときは、則ち千差競ひ起り、萬別横に生ず。頂背倶に身なり、之れを視るに楚越に殊ならず。弟兄氣を同じうす、之れを目くるに何ぞ霄に天淵のみならん。其の異なれるを以ての故に、至近の情尚ほ爾り、其の聖凡に混じ、物我を齊しくし、自他を一にして、憎愛を等しうせんと欲せば、其れ得べけんや。敎中に亦云く、『未だ境惟れ心なりと達せずんば、種種の分別を起さん、群盲の象を摸するに類し、猶ほ廣客の蛇を疑ふがごとし。』同異無き中に於て熾然として同異なり、何ぞ當に眼を翳ふの膜を揭開し、意を亂すの絲を剪空すべし。法界を融じて此の心に歸す、鏡の鏡を照すが如し、山河を轉じて自己に入れ、空の空に合へるに似たり。此に到つて諸緣寂爾として、萬慮悄然たらん。㊄見生ぜず、一法印定せば、謂つべし遠く祖令に符ひ、深く佛心に契ふ者なりと。」

一如體玄にして、㊅兀爾として緣を忘る。

祖師の道く、「一如體玄にして、兀爾として緣を忘る」と。義解者の謂く、「一如の體、玄の又玄なり、因緣に非ずして有り、自然に非ずして成ず、四句を離れ百非を絶す、佛眼と雖も窺ふこと莫く、聖心も測ること罔し。大千を方外に擲ち、法界を毫端に卷く、一空一切空、宰割を加へず、一有一切有、豈に裁培を用ひんや。塵沙も其の多きに喩ふることを得ず、毫髮も其の少きに方ぶべからず、謂つべし緣を忘じ待を絶する、一如の玄體なりと。」

萬法齊しく觀ずれば、㊆歸復自然なり。

祖師の道く、「萬法齊しく觀ずれば、歸復自然なり」と。義解者他の敎家に謂ふを引く、「隨緣なるが故に眞如是れ萬法、不變なるが故に萬法是れ眞如なり」と。又云く、「更に心外に法の能く心の興に緣と爲る無し、皆是れ心より生じて、還つて心の興に相と爲る。此の說、祖師の萬法齊しく觀ずるの理に似て、相違せず。或は云く、齊觀と謂はゞ、亦是れ不揀擇底の影子なり、苟し揀擇を存せば、則ち齊しく觀ずること能はずと。」

其の所以を泯じて、㊇方比すべからず。

㊈殿裏底、牆外底、車を打ち牛を打つ、拳を竪て指を竪つ、雪峰、三箇の木毬を帽ず、玄沙、三張の白紙を封ず、靈山、性と說き心と說く、少室、皮を分ち髓を分つ。曹洞、五位君臣を列ね、溈仰、一門父子を會して、㊉滿目青山を吟哦し、門前の湖水を指點す。放行するときは光五天を蔽ひ、狸住するときは風萬里に馳す。聲前に停機を許さず、句外豈に觜を挿むことを容れんや。咄。物に是れ眼を開いて牀を尿し、香を燒いて鬼を引く。何が以ぞ、祖師の道、其の所以を泯じ、方比すべから

㊃此心異。宗鏡錄の七十五に出づ、又云く、心平なる時は法界坦然と。

㊅兀爾。高き貌、萬法に掩はれぬをいふ。

㊆歸復。已上の四句は先の韻を用ふ、歸復は本分に歸復すること、自然にして揀擇を生ずるに依つて萬法と隔つるなり。

㊇方比。これが說似一物卽不中なり。

㊈殿裏底。會元の四に、趙州の章に出づ、墻外底、これも同章に出づ、以下の故事は前卷の諸錄に出づ。

㊉滿目青山。傳燈の二十五、天台韻國師の偈に、「通玄峯頂、不三是人間、心外無法、滿目青山。」

ざるかと。義解者の謂く、「般若經には一百の喩を以て、般若に喻へ、他の經中には一百の喩を以て、解脱に喻ふ。或は又一百の喩を以て菩提心に喻ふ、具に典章に在り、安ぞ方比すべからざるの理あらんや。當に知るべし、般若●解脱●菩提は則ち喩へつべしと。一切の名相を去却して、一心と俱に泯ぜしめば、㊁正與麼の時、還つて箇の甚麼の喩子をか立て得ん。或者は謂く、㊂古人の道ふ、『鷺鷥雪に立つ、同色に非ず、明月蘆花、他に似かず』と。此の說豈に方比すべからざる者に非ずや。」

㊃動を止むれば動無し、止を動ずるに止無し。

祖師の道く、「動を止むれば動無し、止を動ずるに止無し」と。義解者の謂く、「祖師老婆心切にして、箇の止動の二邊を將つて、輥じて一團と作し、伊が與に說破す。肇法師の靜に卽して動なり、動に卽して靜なりと云ふの旨と、大率ね途を同じうす。亦是れ萬法齊しく之れを觀る旨越なり、豈に特に動止のみ然らんや。蓋し一切の境緣も、亦皆如なるが故に、止に卽して是れ動なり。落花還つて是れ春風に送らる、動に卽して是れ止なり、堅氷日有つて全く水に歸す。㊄達人大觀して本差ふこと無し、昧者斯れに由つて顚倒起る」と。

㊅兩既に成ぜず、㊆一何ぞ爾ること有らん。

㊁正與麼時。たしかに、かやうなときにはなり。
㊂古人道。傳燈二十九、同安察禪師の偈に出づ。
㊃止動。動止の四字は高麗本に上の止は「見」の字に、下の動止は「止豈有止」に作る、止動云云に動止一致なり。
㊄達人。文選十三、賈誼が鵩鳥の賦に「達人大觀兮物無不可」と。
㊅兩。兩とは是非の二途を去却するは、中道の一なりと云ふ、沙汰もないと。
㊆一何。已上の六句は紙の韻を用ふ。

祖師の道く、「兩既に成ぜず、一何ぞ爾ること有らん」と。義解者の道く、「是は非無ければ是ならず、非は是無ければ非ならず、纔に是有りと見ることは、先づ其の非を存すればなり、纔に非有りと見ることは、先づ其の是を存すればなり。所以に單是立せず、獨非存せず、非は乃ち是の根なり、是は乃ち非の本なり、眞安悟迷等の若くに至つても之れと同じ。然も且く是非の兩つ既に去らば、中道の一も何ぞ存せん。祖師此に到つて、肝を披き心を剖つの老婆、太だ過ぎたりと謂つべし。」

究竟㊇窮極、軌則を存せず。

祖師の道く、「究竟窮極、軌則を存せず」と。義解者の謂く、「盡十方世界、所有の虛空色象、大小纖洪、皆是れ箇の自己、步に信せて行く、祖翁の田地を離れず、口に信せて道ふ、總に是れ古佛の眞詮、以至㊈妻を抱いて釋迦を罵り、酒に醉つて彌勒を打つ、俱に一行三昧を成ず、甚麼の㊉開遮持犯等とか說く。故に㊋永嘉亦云く、『大悟は小節に拘はらず』と。」

心の平等なるに契へば、㊌所作俱に息む。

祖師の道く、「心の平等なるに契へば、所作俱に息む」と。義解者、敎中に道ふことを引く、「是の法は平等にして、高下有ること無し」と。譬へば㊍水銀の地に墮つるが如し、

㊇窮極。一絲毫ほども佛法の道理がないとなれば、規矩法則に拘はらぬとなり。
㊈抱妻。抱妻云云は故事あり。
㊉開遮持犯。これは戒法を行ふ上に用ひらるゝことなり、大乘戒に適用せらるゝ、小乘戒には適用せられず、小乘は嚴密なるが故に、戒法以外に出づることなし、大乘は慈悲の願行なれば、時に依りて犯戒するも破戒とならず。
㊋永嘉云。證道歌の語。
㊌所作。俱に息むとは無作の妙用なり。
㊍水銀。傳心法要にも、この大圓のこと出づ。

大者大圓、小者小圓なり。盡大地更に一法の自心と相應せざる者有ること無し。如來成道の時、積生多劫、所修の行業を回觀するに、皆夢幻の如し、亦作者無く、亦不作者無し。所以に云ふ、㊤空華の梵行を修習して、水月の道場に宴坐し、鏡裏の魔軍を降伏して、夢中の佛事を成就すと。良此の心の未だ了ぜざるに由つて、㊥平等の中に於て、不平等を見る、其の不平等を以てするときは、則ち一切の所作、是れに由つて興る」と。

狐疑㊦淨盡すれば、㊧正信調直なり。

祖師の道く、「狐疑淨盡すれば、正信㋝調直なり」と。義解者の調く、「信に二種有り、一には正信、二には邪信。自心是れ佛なりと信じて、外に求むることを假らざれば、是れ正信、自心是れ佛なりと信ぜずして、心を起して外に馳せば、任ひ宏爲有るとも、皆邪信と名く。當に知るべし、正信も亦疑有り、正信の中に於て、未だ證得するに由らず、所以に疑を致す。疑念益深く、久遠にして退かざれば、忽爾として洞明し、一念開朗す、是れを㋟大疑の下に必ず大悟有りと謂ふ。當に知んぬべし、悟は是れ信の果なり、信は是れ悟の因なりと。㋠肇法師の謂く、『果は因に俱たらざれども、因に因つて果を成ず。』審に是の如くんば、則ち信の時卽ち是れ悟の時、悟の時、信の時に異ならず。祖師の銘、之れを目けて信心と曰ふ、正に之れに類せ

㊤空華。清涼國師の語なり。
㊥於平等中。大般若の文なり。
㊦淨盡。或本には「無淨」に作る。
㊧正信。信にも正信と邪信とがあり、能くよく辨ずべし。
㋝調直。三昧の別稱にして、境に遇うて心を動せず、堅固不動なることをいふ。
㋞大疑下。第三卷の大慧書の呂舍人に答ふる書に、「千疑萬疑只是一疑云云」とあり。
㋠肇法師。物不遷論に出づ。

り。當に知んぬべし、大根器の士、一たび擧起するを聞いて、舊物を獲るが如し、心に了然たり。衣食は忘ず可く、性命は捨つ可しと。其の斯須も其の正信を去らんと欲せば、得べからざるなり。故に古の云く、『假使ひ熱鐵輪、我が頂上に旋るとも、終に此の苦を以て、菩提心を退失せじ』と。其の正信の念、果して此の如きの堅密ならば、安ぞ親證を獲ざる者有らんや。此れを捨つるときは則ち自餘の邪信疑を生じて、疑の已まざるときは、則ち倒見橫に生じ、妄緣を馳逐して、無間に流入せんこと必せり。」

一切留まらざれば、㊨記憶す可き無し。

祖師の道く、「一切留まらざれば、記憶す可き無し」と。義解者の謂く、「心行處滅は、一切留まらざるなり、言語道斷は、記憶す可き無し。外に法の捨つ可き無しといふは、一切留まらざるなり、內に心の爲す可き無しといふは、記憶す可き無きなり。了了として見に一物無く、亦人無く、亦佛無し。大千沙界海中の漚、一切の聖賢電拂の如し、是れを一切留まらず思量す可き無きを緣ず。是れを記憶す可き無しと謂ふ。」

㊩南臺靜坐す一爐の香、終日凝念として萬慮忘ず、是れ心を息め妄想を除かず、都べて事の㊪虛明㋡自照すれば、心力を勞せず。

㊨記憶。是非得失を記憶するなり、所謂熱鐵の上に寸塵を立せずとなり。
㊩南臺靜坐。會元の八、南臺守安禪師の頌、「南臺靜坐一爐香、終日凝然萬慮忘、不是息心除妄想、都緣無事可思量。」
㊪虛明。自己の心虛なれば明なちずと云ふことなし、鏡の物に應ずるが如し。
㋡自照。或本には「自然」に作る。

祖師與麼に道ふ。義解者の謂く、「㊀彌滿清淨にして、中に他を容れず、是れを虛と謂ふ。驪珠獨り耀き、桂輪孤朗なる、是れを明と謂ふ。既に虛にして明なり、物來れば斯れ鑑る、自照の功、言有ることを容れず、遮裏に一毫の心力を加ふるときは、則ち虛明自照と爲ることを得ず。」

思量に非ざる處、㊁識情測り難し。

祖師の道く、「㊂思量に非ざる處、識情測り難し」と。義解者の謂く、「識は是れ心家の識、心は是れ識家の心、此の二つの者、水乳の辨じ難きが如し。當に知んぬべし、識は是れ水、心は是れ水中の乳なりと。所以に教家に謂く、「㊃鵝王は乳を擇ぶ、寧ろ鴨の類に同ぜんや。」但だ是れ水中に皆乳有り、惟れ鵝王能く辨ず、自餘の水族は、皆之を知ること莫し。一切の識中、皆眞心を具すれども、惟れ佛祖のみ能く了ずるに喩ふ。靈知鑑覺する、之れを心と謂ふ。思惟憶持、分別取捨する等、之れを識と謂ふ。然も識に八種有り、六根に六を具す、第七を㊄末那と名く、第八を㊅阿賴耶と名く、亦如來藏と名く。上の七識は枝葉たり、惟れ第八識を根本と爲す。教中に謂ふ、『來るときは先鋒と爲り、去るときは殿後と爲る、悟れば如來藏と爲り、迷へば阿賴耶と爲る。』此の識の迷に在るときは、則ち無量劫來、捨身受身、一切の善惡無記等の業を任持す、悟に在るときは、則ち能く無始時來、一

㊀彌滿清淨。圭峯の圓覺經の序に出づ。
㊁識情。已上の十二句は職德の韻を用ふ。
㊂非思量。法華經の「是法非思量分別之所ヶ解」と同じ意。
㊃鵝王擇乳。故事前卷に出づ。
㊄末那。意又は執我、亦は分別と譯す。
㊅阿賴耶。眞諦三藏は無沒識、玄奘三藏は藏識と譯す、攝藏の義なり、無沒は是れ不失の義。

切善提解脫、諸の智慧の種を任持す。此の識、迷より悟に入るときは、轉じて大圓鏡智と爲る、名を改めて體を改めざるなり。卽今、四大五蘊、諸の聖凡の法中に於て、了了として記憶して、作用分別す。見聞覺知、三有紛然として、萬法昇沈し、一念起滅するが若くに至りては、皆之れに依つて生ぜざるは莫し。所以に云ふ、萬法惟れ識と。圭峰の云く、『生法は本無なり、一切惟識なり』と。嗟今の學者、命根の下に向つて、一斬に兩段すること能はず、脚叢林に跨つて、惟れ聰明の資を以て、情識を引き起し、諸の玄解を覽て、記憶して心に在り。驀地として觸發すれば、是れ情識依通にして然ることを知らず、剛ひて此れは是れ神悟なりと執す。或は妄りに目前の昭昭靈靈を認めて、口を擧げ舌を動ずるを自己と爲す。而して楞嚴に謂ふ、『百千の大海を棄て、一漚を認めて全溺と爲す』と。圓覺に謂ふ、『皆是れ六塵妄想の緣氣なり、實の心體に非ず』と。長沙和尚の謂く、『學道の人、眞を識らざることは、只だ從來識神を認むるが爲なり』と。㊆永嘉の謂く、『法財を損し功德を滅す、斯の心意識等に由らざるは莫し。』乃佛乃祖、指陳せざること庶うして、末法の中に此の病㊇益燻盛を加ふ。然も此の病に墮することは、亦根本學道の志、眞ならず正ならざるに因つて然り、若し是れ根本の志を決めて、生死岸頭と相應せんことを要せんと欲せば、終に肯つて此の識情中に向つて梁跟せず。良に最初の一念、只だ禪を會し道を會し、佛を會し法を會せんと欲するに、況んや此の識、千仞の鐵圍の如し。無始時來、伊を把つて圍繞す、又千兵萬

㊆永嘉謂。證道歌の句。

晴の、晝夜に六根門頭に在つて、其の間隙を伺ふが如し、苟も決定して生死を了ぜんと要するの志を具せずんば、則ち往く所として之れに入らずといふこと無けん。且つ祖師の信心銘を作ること、誠に堂奥を展開して、後の學者をして情識を脱去し、惟だ自心を信じ、歩を轉じて渉入せしめんと欲す。懼し學者一毫も、情識盡きずんば、祖師の此の銘をして、俱に毒藥と爲らしむ、其の利害此の如き者あり。見ずや、最初の兩句に道く、至道無難、唯嫌揀擇』と。只だ遮の兩句、心と識とを將つて、判然として分解すれば、煥として黒白の如し。何となれば、則ち謂ゆる至道無難とは、卽ち是れ此の眞心を指す、唯嫌揀擇とは、卽ち是れ此の情識を破するなり。情識忘ぜざる者有つて、此の說を見て、乃ち我れは只だ揀擇せずと云ふこと莫からんや。殊に知らず、此の不揀擇といふに卽して、早く是れ情識をもつて解を作すことを。而るを況んや歩歩有に渉り境に觸れて、情を生ぜん者をや。蓋し祖師の此の銘の前後の意、重拈再指せり。其の本懷を原ねるに、特に曲げて學者の爲に、其の心と識とを揀辨するに過ぎざるのみ。所以に云ふ、思量に非ざる處、識情測り難しと。」

眞如法界、他無く自無し。

祖師の道く、「㋐眞如法界、他無く自無し」と。義解者の謂く、「眞如法界は、是れ一心の惣名なり、心外に別法無し、安ぞ自他の稱謂有らん。特に自他の立せざるのみにあらず、乃至山河大地、有情無情、俱に得て有と爲す可からず、得て有と爲す可からずと曰ふと雖も、亦妨げず自他物象、燦然として安立することを。何となれば則ち眞如法界は金に喩へ、自他物象は瓶盤釵釧に喩ふ。當に知んぬべし、金は是れ實體、瓶盤釵釧等の器は、是れ權の名なりと。實を以て權に就くときは、則ち自他物象、安住することを妨げず、權を會して實に歸するときは、則ち惟れ一眞法界の至體のみを見る。自餘の瓶盤の假名、遣ることを待たずして自ら泯ず。眞如法界。盡く一心法に歸したるを云ふ。

味者將に謂へり、祖師は圓融の旨に達せず、宛然として斷滅して、偏空に墮在して、他無く自無きの說を作す、玆れ辨せざることを容さずと。」

急に㋑相應せんと要せば、㋒惟だ不二と言ふ。

祖師の道く、「急に相應せんと要せば、惟だ不二と言ふ」と。其の義解者の謂く、「祖師重ねて㋓分疎を費す、首めには則ち唯嫌揀擇と言ふ、其の中間には、一も亦守ること莫れ、萬法齊しく觀ず、萬法一如といふ等の若き、盡く是れ惟だ不二の意を言ふ。然も諸佛と衆生と、㋔覩體不二なり、箇の成佛と說くも、早く是れ剩語なり。惟だ是れ急に相應せんと要せば、兩㋕橛と作るに似たり。果して箇の相應不相應の理有らしめば、卽ち㋖宛然として二と成る、特に此に於て未だ嘗て疑無くんばあらず。」

㋐眞如法界。盡く一心法に歸したるを云ふ。
㋑相應。本分に相應せんとするに依つて二つになる、維摩の默然も、文殊が不二法門と讃せられた。
㋒惟言。已上の四句は眞至の語を用ふ。
㋓分疎。いひわけなり。
㋔覩。見と同じ。
㋕橛。物の動かぬやうに止むる「くさび」のこと、兩橛は二本のくさび、說の有無是非等の兩頭に渉るをいふ。
㋖宛然成二。圓悟云く、「只だ箇の不二、早く是れ二にし了れり」と。

㊀不二なれば皆同じ、包容せずといふこと無し。

祖師の道く、「不二なれば皆同じ、包容せずといふこと無し」と。一等の㊁朱に循つて、墨を塡むる士の謂く、「㊂法華に云ふ、『惟だ此の一事實なり、餘の二は眞に非ず』と。又云ふ、「一切の諸佛、唯一佛乘、無二無三』と。云ふ所の一とは、卽妙圓明の心體、修證を離れて、竪に三際を該ね、横に十虛を貫く。㊃色空明暗、之れを以て源と爲す。凡聖悟迷、之れに卽して本と爲す。乃至塵沙の法界を盡して、一毫も之れに依らずして、生ずる者有りと見ば、皆外道の計する所なり。所以に云ふ、森羅及び萬象、一法の所印なりと。其の不二なれば皆同じ。包容せずといふこと無しといふの說、此れに外なること能はざるなり。」

十方の智者、㊄皆此の宗に入る。

祖師の道く、「十方の智者、皆此の宗に入る」と。義解者、華嚴を引いて云く、「如來眞の境界、其の量虛空に等し、一切衆生は入れども、其れ實には所入無し」と。又㊅圓覺に謂く、「諸の能入といふは、諸〻の能入有るも、覺の入るに非ざるが故に」と。當に知んぬべし、此の宗、一切衆生、本來深く入る、安ぞ復た入るの理有らんや。衆生既に爾り、其れ有智者の、反つて入ると謂ふ所有るに應ぜず。

㊀不二。不二なれば他物はなく、包容せぬと云ふことはないぞと。
㊁循朱墳墨。物事の異同を云ふ。
㊂法華云。方便品。無二無三を一本には「無二共三」に作る。
㊃色空明暗。明は現象で差別の義、暗は本體で平等の義。
㊄皆入此宗。已上の四句は東冬の通韻を用ふ、宗は尊なり、本なり、要なり、迷は出にたとへ、入は悟にたいふ。
㊅圓覺謂。淨諸業障の文。

聞く、「㊆永明和尚の謂ふ、『心眞如門は、初めより離在無し、但だ迷ふ者の出づるに喩へ、悟る者の入るに喩ふ』と。特に迷悟相間つ、豈に果して謂ふ所の出入有らんや。

宗は㊇促延に非ず、一念萬年。

祖師の道く、「宗は促延に非ず、一念萬年」と。義解者の謂く、「祖師一心を指して宗と爲す、一心法界の中、劫を以て日と爲れども、促むることを加へず、日を以て劫と爲れども、延ぶることを加へず。所以に一念を視て萬年と爲す、萬年を轉じて一念と爲す。長ならず短ならず、少に非ず多に非ず。豈に神通の然らしむるところならんや。乃ち法是の如くなるが故に」と。

㊈在と不在と無く、㊉十方目前。

祖師の道く、「在と不在と無く、十方目前」と。或者、意識を以て卜度して謂く、「心は色像に非ず、道は方隅を絕す。色像に卽して妨げず、處處に身を分つことを、方隅に倚つて豈に塵塵影を露はすことを礙へんや。塵塵影を露はす、當處を離れずして常に湛然、處處に身を分つ。覓めば卽ち知んぬ、君が見る可からざることを。是れ謂ゆる在と不在と無く、十方目前といふの旨明けし」と。

㊆永明和尚。智覺延壽禪師なり、天台德韶國師に嗣ぐ、これは宗鏡錄の文か。
㊇促延。促むるといふこともなく、延びると云ふこともないのが此の宗なり、念念生滅に依りて作日が今日と替はる。
㊈在不在。眞佛は無形じや、在も不在もない、十方に通貫し、十方目前なり。
㊉十方。已上の四句は先の韻を用ふ。

極小は大に同じく、境界を㋺忘絶す。

祖師の道く、「極小は大に同じく、境界を忘絶す」と。義解者の道く、「前に云ふ在と不在と無しと。便ち是れ極小は大に同じく、極大は小に同じの標題なり。故に㋩楞嚴に謂く、『一毛端に於て、寶王刹を現じ、微塵裏に坐して、大法輪を轉ず』と。苟も在と不在と無きの旨に達せずんば、則ち動ずれば境界の爲に囿せらる、既に境界に囿せらるるときは、則ち安ぞ忘絶の理有らんや。既に境界を忘絶すること能はずんば、則ち大なる者は大相、小なる者は小相なり、安ぞ能く一體に融攝せんや。」

極大は小に同じく、邊表を㋬見ず。

祖師の道く、「極大は小に同じく、邊表を見ず」と。一等義解の者の謂く、「昔㋭毗耶大士、不思議解脫の神力を運して、三萬二千の師子の座を以て、之れを方方一丈の室中に置く。室窄きことを加へず、座隘きことを加へず。然る後に右手を以て、妙喜世界を斷取して、普く大衆に告ぐ、『彼の世搖動せず、此の世改變せず』と。大を以て小に入れ、小を以て大に入る、互卽互融して、彼れに非ず、此に非ず、㋮經中に此の不思議解脫の神力を說かんと欲す。劫を窮むるとも盡きじ、然も此の神力、一毫も㋯妙明の心中より、流出せずといふこと無し。或者の謂く、『我れ今亦嘗て此の妙明の心體を悟る、何に據つてか此の神力

㋺忘絶。前㋷在も不在もなき處に達せずんば、境界に拘ぜらるるなり。
㋩楞嚴謂。同經第二にあり。
㋬不見。已上の四句は皆韻を押む、卦怪篇小、互に隔句韻なり。
㋭毗耶大士。維摩居士の居城なり、之を維摩の略稱とす。
㋮經中。維摩經の中に。
㋯妙明心。楞嚴第一に出づ。

に於て、而して克く證せざる。』以て或者に對するもの有つて曰く、『當に知んぬべし、此の神力、本自ら具足す、復た證することを加へず。』其の未だ現前することを獲ざる所は、蓋し初心入道、定惠解脫の力に於て、未だ圓滿せざる故なり、未だ圓滿せずと雖も、本覺の心中に於て、亦曾て失せず。但だ時至つて自ら現ずるのみ。時至ると曰ふと雖も、亦一念も時を待つの心を存するとを得ず。苟も此の時を待つの心を存せば、卽ち異見に落つ。譬へば初生の孩子、未だ襁褓を離れざるが如し。其の重きを負ふて遠きに致すことを欲す、其れ得可きか。重きを負ふて遠きに致すこと能はずと雖も、而も重きを負ふて遠きに致すことに於て、亦何ぞ畏れん、何ぞ疑はんや。其の現前することを獲ずと雖も、其の眞實に悟明する所有る者は、此の神力を聞いて、自然に驚かず畏れず、惑はず疑はざれ。若し一毫の驚畏、疑惑の心有つて、胸中に存するときは、則ち此の心に於て、實に未だ嘗て眞正に悟明せざる者なり。近世行脚の高士、正悟を求めず、惟だ言通を貴ぶ。況んや師位に居する者は、多くは是れ一時に順ずることを取る、肯て之れが與に深く挑み、痛く剔らず、彼此妄に徇ふ、俱に丈夫にあらずして至る、般若の叢林をして、地を掃ふこと幾くも無からしむ。嗚呼惜しい哉、其の志有らん者、能く刻苦勵行して、大悟を以て是れ期せば、則ち佛の深恩に報ゆること、此れより加はること莫けん。蓋し吾が佛、亦未だ嘗て備に、今日の弊を言はずんばあらず。謂く、末世の衆生、成道を希望すとも、悟を求めしむること無し。惟だ多聞を益し、我見を增長すといふ。二千餘載相去ると雖も、其の說は

諸掌を示すが如し、益聖人の言、我れを誣ひざることを見る」と。

有は卽ち是れ無、無は卽ち是れ有。

祖師の謂く、「有は卽ち是れ無、無は卽ち是れ有」と。其の義解者の謂く、「有は自ら有にあらず、有は是れ無家の有なり、無は自ら無にあらず、無は是れ有家の無なり。有は單に居せず、無は獨り立せず、且く人の有なりと言ふは、胸中に先づ所見の無を存して、然る後に乃ち其れ有なりと云ふ。苟も胸中に先づ其の無を存せずんば、安ぞ肯て所對無き中に於て、空然として有と言はんや。故に知んぬ、無は無にあらず、卽ち是れ有なり、有は有にあらず、卽ち是れ無なりと。有無の理、一源に本づく、一源の中に於て有と言ふときは、則ち其の有を多くす、無と言ふときは則ちの無を剩す。有無混融し、言路亦絶ゆ、是れを還源の旨と謂ふ」と。

㊀若し此の如くならずんば、㊁必ず守ることを須ひざれ。

祖師の謂く、「若し此の如くならずんば、必ず守ることを須ひざれ」と。其の義解者の謂く、「此れは是れ祖師叮嚀に囑累するの辭なり。謂く、眞寶に妙精明心、本覺靈源、一念相應せんことを要せば、直に須らく上の如きの所說と一念契同すべし。苟も是の如くならずんば、其の雄談闊辯、皆外道の計する所なり、之れを守らば奚ぞ益あらんや。或者の謂く、『若し此の如くならずんば、乃ち決定して人の

㊀若不如此。上件の如くならずんば、皆外道の見解なるべし。
㊁必不。已上の四句は有の韻を用ふ。

其の眞心を契語せんことを要するなり』と。必ず守るべからずといふは、乃ち其の正悟を求めずして、惟だ此の言說に泥んで、得たりと爲る者を指すの意なり。此の說亦通ぜり。」

㊂一卽一切、一切卽一。

祖師の謂く、「一卽一切、一切卽一」と。或者、敎中に「一は是れ一切の一、一切は是れ一の一切なり、一に在つて少からず、一切に在つて多からず」と謂ふを引く。此れは是れ心法互に徧し、一多含容す、神通の然らしむるに非ず、乃ち法理是の如しと。然も此の說、具に典章に在り、廣く引くことを須ひず、只だ言の繁きことを益して、道に補ひ無し。當に知んぬべし、吾が祖是の銘を作る、不二なれば皆同じ、包容せざること無しといふ處に至つて、恐らくは後の學者、融會の理に達せざらんことを。首めは延促を以て相卽し、次には大小を以て相卽し、又次には有無を以て相卽し、今復た一多を以て相卽す。無邊の世界海を以て、融じて不二法門と爲す。廣く群象の淸を闡き大いに衆靈の府を啓く。後學をして步を動ぜずして到り、塵を隔てずして入り、功を加へずして成じ、念を克くせずして證せしむ。大慈の願既に周くして、大化の功普し。

但だ能く是の如くならば、㊃何ぞ畢らざることを慮らん。

㊂一卽一切。一にあつても少いこともなく、一切にあつても多きこともないさ、一切が一有か無無かあるまでなり、悟得店にして始めて得べし。
㊃何慮。已上の四句は實の韻を用ふ、不畢は上件の如くせば了畢せぬと云ふことはあるまじきなり、是れは學者に保任せしめん爲なり。